

八尾南遺跡

財團法人八尾市文化財調査研究会報告47

- I 八尾南遺跡（第8次調査）
- II 八尾南遺跡（第12次調査）
- III 八尾南遺跡（第17次調査）

1995年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

八尾南遺跡

財團法人八尾市文化財調査研究会報告47

I 八尾南遺跡（第8次調査）

II 八尾南遺跡（第12次調査）

III 八尾南遺跡（第17次調査）

1995年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府の東部に位置する八尾市は、東部の生駒山地から西部一帯に広がる河内平野を占地しており、近年の急激な市街化により変貌を遂げた衛星都市であります。

古大和川のもらした豊かな土壌を背景とする平野部においては、水稻耕作の初期段階から活発な開発が行われたり、生駒山西麓部においても数多くの文化財が残されています。さらに、古代には市域南部の弓削郷に「西の京」が設けられるなど、難波と大和を結ぶ大陸文化の中継地としての役割を果たしてきました。

このように、本市には先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しており、これらの文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが我々の大きな責務と認識し、昭和39年に市民憲章に「文化財を大切にしましょう」の条文を設けて文化財の保護・保存の徹底をはかってきたところであります。

今回、昭和62年度・昭和63年度・平成2年度に当調査研究会が実施しました八尾南遺跡（第8次・第12次・第17次）の発掘調査の整理が完了しましたので、これをまとめ報告書として刊行することになりました。

本書が学術研究の資料として、また、文化財保護への関心と理解を深める上で広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、これらの発掘調査に対して御協力いただきました関係機関の皆様に対して心から厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

財團法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

序

1. 本書は、財團法人八尾市文化財調査研究会昭和62年度・昭和63年度・平成2年度に実施した発掘調査の調査報告を集録したもので、内業整理および本書作成業務は各現地調査終了後に着手し、平成7年1月31日をもって終了した。
1. 本書に集録した調査報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書の構成・編集は原田昌則が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1（昭和61年8月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成5年10月1日改訂）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面である。
1. 本書で用いた方位は座標北（第8次調査）、磁北（第12次調査・第17次調査）である。
1. 遺構名は下記の略号で示した。
掘立柱建物-SB 井戸-SE 土坑-SK 溝-SD 小穴-SP 土器集積-SW
1. 実測図の縮尺は、遺構40分の1、60分の1、200分の1を基調とし、遺物は4分の1に統一した。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって以下のように分類した。
弥生土器・土師器・埴輪-白 須恵器-黒 石器・木製品-斜線
1. 各調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき

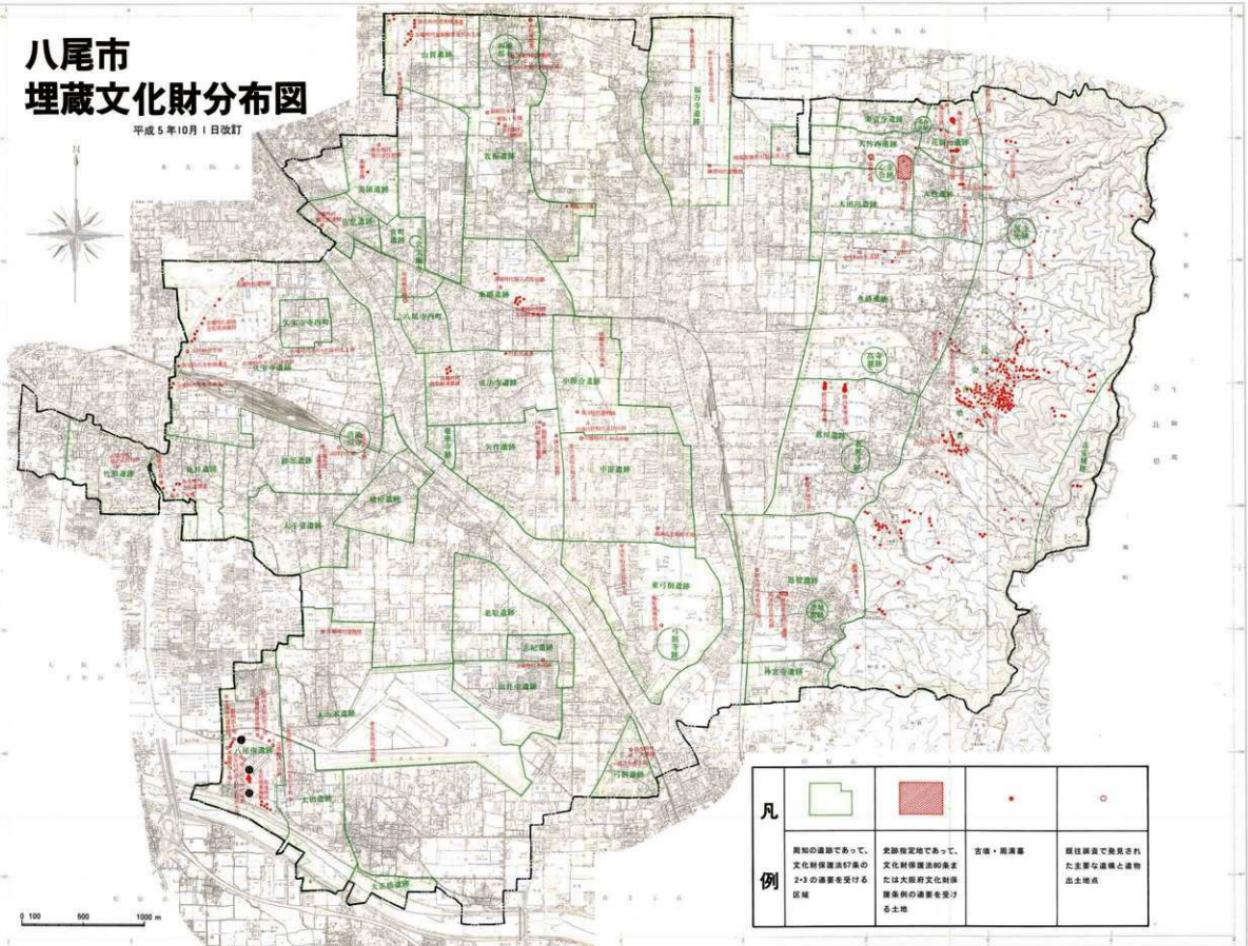
序・目次

八尾市埋蔵文化財分布図

I 八尾南遺跡第8次調査（YS87-8）発掘調査報告	1
II 八尾南遺跡第12次調査（YS88-12）発掘調査報告	131
III 八尾南遺跡第17次調査（YS90-17）発掘調査報告	145

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成5年10月1日 次訂



I 八尾南遺跡第8次調査（YS87-8）発掘調査報告

例　　言

1. 本書は、八尾市若林町1丁目87番地他2筆で実施した店舗付き住宅建設に伴う発掘調査、の報告書である。
1. 本書で報告する八尾市遺跡第8次調査は（YS87-8）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第110号 昭和62年3月26日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が新進不動産株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は昭和62年5月6日から昭和63年1月31日にかけて、原田昌則・駒沢敦を担当者として実施した。面積9,961m²を測る。調査においては小野瑞枝・柏木幸寿・小西博樹・小林博司・坂本真弓・山瀬純子・中西明美・中西謙子・鍋島詩津子・並河聰也・西町達也・畠山忠司・溝口敬一・森本浩一・八元聰志・山田幸博・山上智功・山本ゆかり・若竹慶弘が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成7年3月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・沢村妙子・中内隆子・八元聰志・麻田優・別所秀高・眞柄竜・岡面トレース－北原、遺物写真－原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 調査および本書作成にあたっては、以下の方々からご指導、ご教示を受けた。
　　神谷正弘（高石市教育委員会）、桑原武志（鶴枚方市文化財研究調査会）、柴田喜太郎（広島大学）、瀬川芳則（大阪外国语大学）、千賀 久（樋原考古学研究所附設博物館）、田中清美・趙哲濟・高橋 工（鶴大阪市文化財協会）、福田英人（大阪府教育委員会）、松藤和人（同志社大学）、村川行弘（大阪経済法科大学）、安井良三（八尾市立歴史民俗資料館）、森本 徹（鶴大阪文化財センター）、米田敏幸・道 斎・吉田野乃（八尾市教育委員会）、中井秀樹・伊藤賢人（三田市教育委員会）、森口訓男（長浜市教育委員会）、藤田和尊（御所市教育委員会）、F・E・H・直之・賛田 明（鶴長野県埋蔵文化財センター）、前田清彦・林 弘之（豊川市教育委員会）、仁科 章（福井県立博物館）、赤澤徳明（福井県立朝倉氏遺跡資料館）、山田謙吾（中主町教育委員会）、田原町教育委員会（順不同・敬称略）

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 地理・歴史的環境	4
第3章 調査概要	7
第1節 調査の方法と経過	7
第2節 基本層序	9
第3節 検出遺構と出土遺物の概要	12
1) 東区	12
2) 西区	28
第4節 下層確認調査（旧石器時代相当層の調査）	108
第4章 まとめ	116

挿図目次

第1図 調査地周辺図	2
第2図 調査区設定図および地区割図	8
第3図 基本層序模式図	10
第4図 SB-1 平断面図	12
第5図 検出遺構平面図	13・14
第6図 SB-2 平断面図	15
第7図 SE-1 平断面図	15
第8図 SE-1 出土遺物実測図	16
第9図 SE-1 出土鉢実測図	17
第10図 SK-1 出土遺物実測図	18
第11図 SK-8 平断面図	19
第12図 SK-8 出土遺物実測図	19
第13図 SD-3、SD-4、SD-5 出土遺物実測図	20
第14図 SD-12、SD-13出土遺物実測図	22
第15図 SP-3、SP-38、SP-48出土遺物実測図	23

第16図	第4層出土遺物実測図-1	26
第17図	第4層出土遺物実測図-2	27
第18図	S B-3 平断面図	29
第19図	S B-4 平断面図	29
第20図	S B-5～S B-9 平断面図	30
第21図	S E-2 平断面図	32
第22図	S E-2 出土遺物実測図	33
第23図	S E-3 平断面図	34
第24図	S E-4 平断面図	35
第25図	S E-4 転出土状況	36
第26図	S E-4 出土遺物実測図	37
第27図	木製鞍実測図	38
第28図	S K-10、S K-11、S K-12出土遺物実測図	43
第29図	S K-11平断面図	44
第30図	S K-12平断面図	45
第31図	S K-13出土遺物実測図	46
第32図	S K-14平断面図	47
第33図	S K-14出土遺物実測図	48
第34図	S K-15平断面図	49
第35図	S K-15出土遺物実測図	50
第36図	S K-16平断面図	51
第37図	S K-16出土遺物実測図	51
第38図	S K-18平断面図	52
第39図	S K-19平断面図	53
第40図	S K-19出土遺物実測図	53
第41図	S K-18出土遺物実測図	54
第42図	S K-21出土遺物実測図	55
第43図	S K-21平断面図	56
第44図	S K-24平断面図	57
第45図	S K-24出土遺物実測図	57
第46図	S K-35平断面図	58
第47図	S K-35出土遺物実測図	58

第48図	S K - 37平断面図	59
第49図	S K - 37出土遺物実測図	59
第50図	S D - 23断面図	61
第51図	S D - 23出土遺物実測図	61
第52図	S D - 24出土遺物実測図	62
第53図	S D - 27断面図	62
第54図	S D - 27出土遺物実測図	63
第55図	S D - 28、S D - 29出土遺物実測図	65
第56図	S D - 31断面図	66
第57図	S D - 31出土遺物実測図	67
第58図	S D - 32、S D - 33、S D - 36出土遺物実測図	68
第59図	S D - 37出土遺物実測図	69
第60図	S D - 46出土遺物実測図	71
第61図	S P出土遺物実測図	72
第62図	1号方形周溝墓出土遺物実測図	77
第63図	1号方形周溝墓平断面図	78
第64図	1号墳平断面図	80
第65図	1号墳 S W - 1 半断面図	81
第66図	1号墳出土遺物実測図	81
第67図	1号墳 S W - 1 出土遺物実測図	82
第68図	2号墳平断面図	83
第69図	2号墳出土遺物実測図 - 1	84
第70図	2号墳出土遺物実測図 - 2	86
第71図	2号墳出土遺物実測図 - 3	87
第72図	3号墳平断面図	90
第73図	3号墳出土遺物実測図 - 1	92
第74図	3号墳出土遺物実測図 - 2	93
第75図	3号墳出土遺物実測図 - 3	94
第76図	西区第4層出土遺物実測図 - 1	100
第77図	西区第4層出土遺物実測図 - 2	101
第78図	西区第4層出土遺物実測図 - 3	102
第79図	西区第4層出土遺物実測図 - 4	103

第80図 西区第4層出土遺物実測図-5	104
第81図 西区第4層出土遺物実測図-6	105
第82図 西区第4層出土遺物実測図-7	106
第83図 西区第4層出土遺物実測図-8	107
第84図 八尾南遺跡旧石器出土地点位置図	109
第85図 八尾南遺跡第8次調査（八尾南第4地点）石器出土地点	111
第86図 下層確認調査出土石器実測図-1	113
第87図 下層確認調査出土石器実測図-2	114
第88図 八尾南遺跡第8次調査 弥生時代後期遺構配置図	117
第89図 八尾南遺跡第8次調査 古墳時代中期遺構配置図	118
第90図 八尾南遺跡の古墳時代前期初頭（庄内式期） ～古墳時代後期中葉における集落推移概念図	125

表 目 次

第1表 周辺の発掘調査一覧表	3
第2表 東区小穴（S P）一覧表	23～25
第3表 木製敷出土一覧表	42
第4表 西区小穴（S P）一覧表	73～77
第5表 八尾南遺跡旧石器出土地点調査一覧表	109
第6表 八尾南遺跡検出土古墳一覧表	122
第7表 八尾南遺跡の古墳時代前期初頭（庄内式期） ～古墳時代後期中葉における集落推移概念表	128

写 真 目 次

写真1 西区S E-4調査風景	1
写真2 木製の栓をする瓶（75）	37
写真3 東区下層確認調査（Oトレンチ）調査風景	115

図版目次

- 図版一 調査地遠景
図版二 西区全景
図版三 東区全景
図版四 西区Gトレーナー西壁(W-2)
図版五 東区SE-1検出状況
東区SE-1出土状況
図版六 東区SB-1検出状況
東区SB-2検出状況
図版七 東区SK-1検出状況
東区SK-8検出状況
図版八 西区南部遺構検出状況
西区中央部遺構検出状況
図版九 西区SB-3~SB-5検出状況
図版一〇 西区SB-6~SB-9検出状況
図版一一 西区SE-2検出状況
西区SE-4検出状況
図版一二 西区SE-4被出土状況
西区SK-14検出状況
図版一三 西区SK-15検出状況
西区SK-15遺物出土状況
図版一四 西区SK-18検出状況
西区SK-21検出状況
図版一五 西区1号方形周溝墓および
1号~3号埴検出状況
西区1号方形周溝墓および
2号埴検出状況
図版一六 西区1号埴検出状況
西区2号埴検出状況
図版一七 西区1号埴土器集積検出状況
図版一八 西区3号埴検出状況
図版一九 東区SE-1、SK-1~8、
SD-3~5・13出土遺物
図版二〇 東区第4層出土遺物
図版二一 西区SE-2・SE-4出土遺物
図版二二 西区SE-4、SK-12~14出土
遺物
図版二三 西区SE-4出土軌
図版二四 西区SK-15・SK-16・
SK-18出土遺物
図版二五 西区SK-18・SK-19・
SK-35、SD-24出土遺物
図版二六 西区SD-27出土遺物
図版二七 西区SD-28・SD-31出土遺物
図版二八 西区1号埴土器集積出土遺物
図版二九 西区1号埴出土遺物・2号埴出土
遺物
図版三〇 西区2号埴出土遺物
図版三一 西区3号埴出土遺物
図版三二 西区3号埴出土遺物
図版三三 西区第4層出土遺物
図版三四 西区第4層出土遺物
図版三五 西区第4層出土遺物
図版三六 西区第4層出土遺物
図版三七 西区第4層出土遺物
図版三八 下層確認調査出土遺物

第1章 調査に至る経過

八尾南遺跡は地下鉄谷町線延伸工事に先だって、昭和51年に八尾市教育委員会により実施された試掘調査で古墳時代前期～中世に至る遺物が確認され、遺跡として認識されるようになった。これらの試掘調査を受けて、昭和53年7月～昭和54年10月に八尾南遺跡調査会により駅舎部や検車場予定地の36,000m²について発掘調査が実施された結果、本遺跡が旧石器時代～中世に至る複合遺跡であることが明らかとなった（八尾南遺跡調査会1981）。これらの調査以降も^{註1}周辺の開発に対応すべく、昭和55年6月には八尾市教育委員会により八尾南遺跡範囲確認調査（八尾市教育委員会1981）が実施され、遺跡がさらに南部に広がることが確認されている。^{註2}特に、区画整理が完了していた八尾南駅の南部においては昭和58年以降開発が顕在化しており、それらに伴う発掘調査が大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により継続的に実施されてきた。これらの調査では、後期旧石器時代・繩文時代後期・弥生時代前期～後期・古墳時代前期～後期・平安時代後期の遺構・遺物が検出されおり、遺跡内での推移が明らかになってきた。なかでも、後期旧石器時代相当層における広範な遺物の分布は、降灰時期が明確な火山灰の存在と相俟って、西接する長原遺跡と共に後期旧石器時代の標識遺跡として認識されるに至っている。

今回報告する八尾南遺跡第8次調査(YS87-8)は、八尾南駅南側に位置する八尾市若林町1丁目87で、新進不動産株式会社により計画された店舗付き住宅の建設に先だって実施したものである。調査対象地は道路を挟んで東区(5,587m²)と西区(4,374m²)に二分されており、総調査面積は9,961m²を測る。発掘調査は新進不動産株式会社・八尾市教育委員会・婦八尾市文化財調査研究会との三者間で取り交わした協定に基づき、婦八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した。現地発掘調査の期間は昭和62年5月18日～昭和63年1月31日で、報告書作成に伴う整理事業は現地調査終了後、平成7年1月31日まで随時実施した。

註

註1 米田敏幸他 1981「八尾南遺跡」
八尾南遺跡調査会

註2 米田敏幸 1981「八尾南遺跡範囲確認調査」『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』八尾市文化財報告6



写真1 西区SE-4調査風景



第1図 調査地周辺図

第1表 周辺の発掘調査一覧表

番号	調査機関	調査期間	文献名	発行年
1	八尾市遺跡調査会	昭和53年7月～昭和54年12月	『八尾市遺跡』	1981年3月
2	長原遺跡調査会	昭和53年7月～昭和54年8月	『八尾市平野区長原遺跡発掘調査報告書』	1982年
3	八尾市教育委員会	昭和55年6月	『八尾市南遺跡・東堀遺跡発掘調査概要』	1981年3月
4	八尾市教育委員会	昭和55年12月～昭和56年1月	未報告	—
5	八尾市教育委員会	昭和56年7月～昭和56年8月	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和56年』 『八尾市文化財調査研究会報告書2』	1983年3月
6	鶴大坂市文化財協会 (NC82-26)	昭和57年12月～昭和58年3月	—	—
7	当調査研究会 (YS82-1)	昭和58年2月～昭和58年6月	『昭和58年改事業概要報告』 『昭和58年改事業概要報告5』	1984年4月
8	鶴大坂市文化財協会 (NG82-41)	昭和58年2月	『現地説明資料』 『鶴大坂市文化財調査研究会』	1983年5月 1987年2月
9	当調査研究会 (YS83-2)	昭和59年1月～昭和59年7月	『昭和59年度事業概要報告』 『昭和59年度文化財調査研究会報告7』	1985年4月
10	当調査研究会 (YS84-3)	昭和59年7月～昭和59年9月	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和59年度』 『八尾市埋蔵文化財調査研究会報告6』	1985年3月
11	八尾市教育委員会	昭和59年7月	『八尾市南遺跡 昭和59年度発掘調査報告書』 『八尾市文化財調査報告11』	1993年3月
12	当調査研究会 (YS84-4)	昭和59年10月～昭和59年11月	『昭和59年度事業概要報告』 『昭和59年度文化財調査研究会報告7』	1985年4月
13	鶴大坂市文化財協会 (NC86-3)	昭和61年4月～昭和61年10月	『昭和61年度 大阪府内埋蔵文化財発掘地免差額調査報告』	1988年3月
14	当調査研究会 (YS87-5)	昭和61年9月～昭和62年7月	『八尾市文化財調査研究会報告 昭和62年度』 『八尾市文化財調査研究会報告16』	1988年12月
15	当調査研究会 (YS87-6)	昭和62年1月	『昭和61年度 事業概要報告』 『昭和61年度文化財調査研究会報告14』	1987年12月
16	当調査研究会 (YS87-7)	昭和62年2月～昭和62年7月	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書3』 『八尾市文化財調査研究会報告41』	1988年12月
17	当調査研究会 (YS87-8) 本書附録	昭和62年5月～昭和62年1月	『八尾市文化調査研究会報告 昭和62年度』 『昭和62年度文化財調査研究会報告15』	1988年12月
18	当調査研究会 (YS87-9)	昭和62年7月～昭和62年8月	『八尾市文化調査研究会報告 昭和62年度』 『八尾市文化財調査研究会報告16』	1988年12月
19	当調査研究会 (YS87-10)	昭和62年7月～昭和62年10月	『八尾市文化調査研究会報告』 『八尾市文化調査研究会報告40』	1994年3月
20	大阪府教育委員会	昭和62年4月～昭和62年6月	『八尾市南遺跡・旧石器出土第3地点』	1989年3月
21	当調査研究会 (YS88-11)	昭和63年7月	『八尾市文化財調査研究会報告 昭和63年度』 『昭和63年度文化財調査研究会報告25』	1989年12月
22	当調査研究会 (YS88-12) 本書附録	昭和63年8月～昭和63年10月	『八尾市文化財調査研究会報告 昭和63年度』 『昭和63年度文化財調査研究会報告25』	1989年12月
23	当調査研究会 (YS88-13)	昭和63年9月～平成元年2月	『八尾市文化財調査研究会報告 昭和63年度』 『昭和63年度文化財調査研究会報告25』	1989年12月
24	当調査研究会 (NG88-1)	昭和63年8月	『八尾市文化財調査研究会報告 昭和63年度』 『昭和63年度文化財調査研究会報告25』	1989年12月
25	当調査研究会 (YS89-14)	平成元年5月	『八尾市文化財調査研究会報告 平成元年度』 『昭和63年度文化財調査研究会報告28』	1990年12月
26	大阪府教育委員会	平成元年7月～平成2年6月	『八尾市南遺跡発掘調査報告』 『八尾市南遺跡II 旧石器出土第6地点の調査』	1991年3月 1993年3月
27	当調査研究会 (YS89-15)	平成元年11月～平成2年2月	『八尾市文化財調査研究会報告 平成元年度』 『八尾市文化財調査研究会報告28』	1990年12月
28	当調査研究会 (YS89-16)	平成元年10月～平成2年2月	『平成2年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』	1990年12月
29	当調査研究会 (YS91-17) 本書附録	平成3年1月～平成3年2月	『平成4年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』	1991年4月
30	当調査研究会 (YS92-18)	平成4年8月～平成4年10月	『平成4年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』	1993年5月
31	当調査研究会 (YS93-19)	平成5年10月～平成5年12月	『平成5年度 鶴八尾市文化財調査研究会報告43』	1994年10月
32	鶴大坂市文化財協会 (NG93-06)	平成5年10月～平成5年11月	『平成6年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』	1994年4月
33	当調査研究会 (YS94-20)	平成6年6月	『平成6年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』	1996年5月

第2章 地理・歴史的環境

八尾南遺跡は、大阪府八尾市南西部の若林町1～3丁目、西木の本1～4丁目の東西約0.5km、南北約1.3kmに展開する旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。当遺跡の所在する八尾市は大阪府の東部に位置し、東は奈良県生駒郡平群町、西は大阪市、南は柏原市・藤井寺市・松原市、北は東大阪市と隣接している。現在の八尾市域は、平安時代前期の『延喜式』に見る河内十四郡の中の高安郡・渋川郡・若江郡・志紀郡にあたり、明治期の郡制では、北河内・中河内・南河内の三郡に区分されていた中の中河内郡の南部を占めている。

八尾市の位置する中河内地区の地形は、河内平野と呼称されている河内低地が南北方向に広がる平野部を中心として、東には生駒山地、南には羽曳野丘陵から北方に連なる河内台地、西には河内台地よりさらに北方に伸びる上町台地から成る。八尾南遺跡はこれら地勢を呈する中河内地区の南西部に位置し、河内台地の北端部から河内低地（河内平野）にかけての標高10m前後に立地している。以下、当遺跡周辺の遺跡を時期毎に概観してみる。

旧石器時代の遺物は、当遺跡に西接する大阪市の反原遺跡で1979年に旧石器が発見されて以来、旧石器時代相当層に対する調査の必要性の高まりの中で、両遺跡の南部を中心に遺物の検出例が急激に増加している。当遺跡の南部一帯は、前述したように河内台地の北端から河内低平地に移行する地点にあたり、それらの地形の変化点が八尾南駅駅舎付近にあったことがこれまでの調査で確認されている。また、これらの一連の調査で、この地点付近で複雑に入り込んだ開析谷が確認されており、河内台地に深く刻まれた河川が河内低平地に注ぐ河口付近の情景が想定されている。旧石器は、これらの河川近くの微高地から集中して出土しており、これらの自然環境に棲息する魚類、鳥類、小型の哺乳類を求めて旧石器人がこの地域一帯をハンティングゾーンの一拠点としていたことが想像される。八尾南遺跡、長原遺跡の南部一帯で石器が検出されているのは、このような自然環境に加えて、石器素材のサヌカイトの産出地である二上山が近距離に位置している点や、この期以降、当地域一帯の沖積作用が緩慢で現地表から比較的浅い位置に旧石器相当層が存在する等の諸条件が一致したことによる。石器類は、沖積層下部層に相当する長原地山（NG13層）と称される地層を中心に出土している。これらの地層からは、降灰時期の明らかな姶良Tn火山灰（AT）（約2.1～2.2万年前）や大山ドのホーキ火山灰（約1.7万年前）等の鍾層の存在が確認されており、石器群の時期決定の基準とされている。石器類は両遺跡の26地点で出土しているが、長原遺跡（NG90-62）の調査ではさらに下層のNG14層からも石器が検出されており、府下のなかで層位的に年代（2万数千年前）が明らかな石器群としては最古に位置付けられている。石器類は大半がサヌカイト製でナイフ型

石器を主体とする瀬戸内系の横剥ぎ技法の伝統を引くものであるが、地点毎に石器の形態、器種構成が異なっており、これらの差異が旧石器時代末期での時期差を示すものと理解されている。

縄文時代草創期の遺物としては、有凹尖頭器がありYS83-2次調査・YS87-8次調査、長原遺跡NG14次調査で出土している。瞬位的には、旧石器が出土する土層直上から出土しており、いずれも土器を共伴せず単独に出土している。縄文時代前期以降の河内平野の環境は、縄文海進による河内湾の形成（河内湾Iの時代）があり、当遺跡の北約3kmに位置する龜井遺跡付近まで海水が進入していたことが確認されている。さらに、河内湾縁辺部の三角州の発達による淡水化（河内湾IIの時代）と変遷していくが、当遺跡周辺ではこの時期の遺構・遺物は検出されていない。再び人々がこの付近で活動を始めるのは縄文時代後期で、河内湾の淡水化が進み河内湾に移行する時期（河内湾の時代）である。この時期の遺構・遺物はYS89-15次調査と長原遺跡NG14次調査で堅穴住居が検出された以外は、十器の破片が散発的に発見されている程度である。縄文時代晚期では、長原遺跡NG81-10次調査で居住域と墓域が確認されており、畿内における数少ないこの時期の集落を考えるうえで貴重な資料を提供している。また、これらの調査で出土している縄文時代晚期最終末の十器標識とされる長原式上器の中には、稻穀の印痕があるものが存在しており、縄文社会から稻作導入期への過渡期の一例を可視的に示すものと注目される。

弥生時代前期においては、YS89-15次調査で前期古段階の壺が出土しているほか、YS86-5次調査では前期中段階のしがらみが検出されており、遺跡の南部を中心に弥生時代の比較的早い段階から開発が実施されていたことが窺える。弥生時代中期も前期と同様、遺跡南部に集中しており、YS89-17次調査で居住域が検出されているほか、長原遺跡のNG82-41調査では墓域が検出されている。弥生時代後期においては、遺跡中央部の八尾南遺跡調査会調査（B-1地区・C-1地区）・YS87-8次調査と北部のYS88-11次調査で居住域が確認されているほか、南西部のYS82-1次調査では墓域を形成する方形周溝墓が12基検出されている。

古墳時代前期初頭（庄内式期）の集落は、遺跡中央部の八尾南遺跡調査会調査（D-1地区～D-3地区）と府教委1989調査で検出されており、前代に比して拡大と分散傾向がみられる。続く、古墳時代前期（布留式期）の集落位置は前代と基本的に変わることはない。墓は集落の西部で4世紀末～5世紀初頭に比定される八尾南1号墳（方墳）が検出されており、長原古墳群の初期に築造された塚の本古墳（円墳）、一ヶ塚古墳（帆立貝形）、高廻り1号墳（方墳）、高廻り2号墳（円墳）等の古墳とを比較するうえで貴重な資料を提供している。古墳時代中期の集落は、八尾南遺跡調査会調査（C-4地区・D-1地区）で継続して営まれているほか、新たに集落が分散して出現している。遺跡の北部ではYS84-3次調査・YS92-18次調査、中央部では、八尾南遺跡調査会調査（C-4地区・D-1地区）・YS87-8次調査、さらに南

西部に隣接する長原遺跡NG82-41調査を含めれば南北方向に連なる5箇所で集落の存在が認められる。これらの集落に関連する古墳は八尾南遺跡内では、YS82-1次調査（3基）、YS83-2次調査（1基）、YS87-8次調査（3基）、YS88-12次調査（4基）で計11基が検出されているが、西接する長原古墳群の東部で検出されている古墳についても、これらの集落との有機的な関係が推定されよう。

一方、この時期の集落の特徴としては、建物の形態が堅穴住居から掘立柱建物への変化や、韓式系土器・須恵器に代表される新出土器の出現、さらにはYS87-8次調査で検出された木製鞍橋から推定される乗馬の習慣等も、当時の生活様式に大きな変化をもたらした一因であったことが考えられる。しかし、これらの集落は一樣に古墳時代後期前半を境としてその機能を停止している。このような現象は長原古墳群の終焉時期とも符合しており、この時期に社会情勢に大きな変化が生じたものと理解されている。

飛鳥・奈良時代の遺構・遺物は希薄である。長原遺跡では大半が水田として利用されていたようで、この時期の集落は長原遺跡の西地区や瓜破台地周辺に集中している。平安時代になると条里施行に基づく方格地割に規制された集落が長原遺跡・木の本遺跡を中心に出現しているが、開発が活発化するのは平安時代中期以降である。当遺跡内では後期の集落が遺跡南部のYS82-1次調査地で検出されている。鎌倉時代においても、耕作に関連した溝通構が検出されている程度である。周辺では長原遺跡南東地区および南に位置する太田遺跡（OTT-1次調査）で集落が検出されている。また、この時期、長原遺跡では集落の廻りに大溝を配する環濠集落が出現しており集落形態が散村から集村へと変化している。室町時代以降も集落は長原遺跡西南地区付近に存在しており、当遺跡範囲では水田に関連する遺構を検出するにすぎない。さらに室町時代中期以降は、長原遺跡においても遺構・遺物は希薄で、以後、居住域としては顕著なことなく一帯は水田地帯に移行していったようである。

参考文献

- 米田敏幸他 1981『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会
長原遺跡調査会 1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』
鶴大販市文化財協会 1990『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』
鶴大販市文化財協会 1983『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』
鶴大販市文化財協会 1991『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』
福田英人 1989『八尾南遺跡-旧石器出土第3地点-』大阪府教育委員会
宮野淳一・山田隆一・瀬川純美子 1991『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
山田隆一・宮野淳一 1993『八尾南遺跡Ⅱ 旧石器第6地点の調査』大阪府教育委員会
鶴八尾市文化財調査研究会報告5 1984『昭和58年度事業概要報告』
鶴八尾市文化財調査研究会報告7 1985『昭和59年度事業概要報告』
鶴八尾市文化財調査研究会報告28 1990『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』

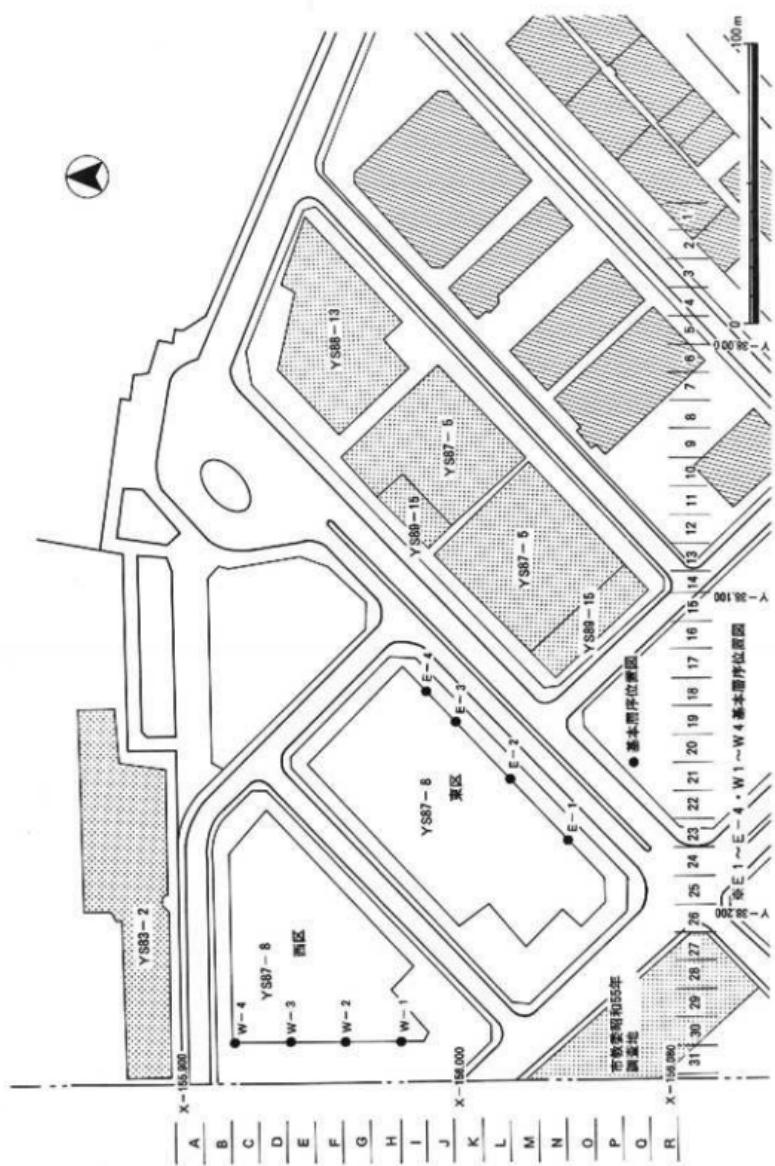
第3章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

調査地点は地下鉄谷町線八尾南駅の南側に位置し、駅前整備事業により区画整理された道路を挟んで東側と西側に調査区が分かれている。東側の調査区を東区、西側の調査区を西区と呼称した。面積は東区が5,587m²、西区が4,374m²で総調査面積は9,961m²である。なお、西区の西端は大阪市との市境にあたり、以西は遺跡名も長原遺跡とされている。

地区割に際しては、本調査と既往調査および将来実施される調査を踏まえて調査地点との整合性を高めるため、八尾南駅南部一帯の東西300m、南北180mにわたって国上座標（第IV座標系）を用いて調査基準点（1A地区北東隅X = -155.900.000、Y = -37.950.000）を設定した。地区の表示に関しては、最小単位を10m四方とし、東西方向は算用数字（東から1～31）、南北方向はアルファベット（北からA～R）とし、その交点を結ぶ呼称法をとった。今回の調査では、東区では17I～26P地区、西区では22D～30G地区が該当地区となる。地点の表示については、国土座標の数値で示した。

昭和62年5月18日から東区の調査を開始した。調査では、八尾市教育委員会が昭和55年度に八尾市若林町1丁目で実施した八尾南遺跡範囲確認調査（八尾市教育委員会1981）の第2調査区が、本調査区の東区北東部にあたることから、この調査結果に基づいて調査方法を検討した。掘削に際しては、現地表下1.6m前後に存在する盛土および旧表土は重機により掘削し、全て場外に搬出した。以下は、層位に従って約0.6mを人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、両地区の第5層上面で弥生時代後期から中世に至る遺構・遺物を検出した（上層調査）。さらに、上層調査終了後、東西方向の調査基準線に沿って幅1mのトレンチを東区で10本（F～Oトレンチ）、西区で6本（C～Hトレンチ）を設定し、後期旧石器時代相当層（第13層）の調査を実施した（下層調査）。上層調査においては、両調査区とともに航空測量により全体写真および平面測量（1/20・1/100）を実施し、調査精度・敏速性を計った。火山灰分析については、柴田喜太郎氏に依頼し西区北東部の各層の火山灰の包含有無および同定をお願いした（旧石器考古学38に掲載）。なお、西区を中心に古墳時代中期の集落・古墳および木製軸等の重要な遺物が出士したことから、各報道機関を通して広報に努めると共に、昭和62年12月18・19日には現地説明会を開催し、約150名の一般市民・研究者に公開した。現地調査は昭和63年1月31日をもって終了した。



第2図 調査区設定図および地区割図

第2節 基本層序

八尾南遺跡に接する大阪市の長原遺跡では細分化された基準層序に沿った調査が実施されており、層序と時期との関係が明確にされつつある。八尾南遺跡第8次調査(YS87-8)においても、調査時点における長原遺跡の基準層序を意識した調査を実施したもの、調査担当者の理解不足もあり、必ずしも共通した認識のうえで行われたとは言い難い。

今回、報告書の作成にあたり、長原遺跡、八尾南遺跡の層位の整合性を高めるため(財)大阪市文化財協会の趙哲濟氏のご協力を得て対応する層序の確認をお願いした。以下、第3図にそって層序を各土層ごとに概観する。

第0層 客上。層厚140~170cmである。上面の標高は南部でT.P+12.80~12.20m、北部で12.40~11.95mで北に向かって緩やかに傾斜している。

第1層 暗灰色砂質土。旧耕土。層厚5~20cm。

第2層 淡灰褐色ないしは淡灰色の色調で、土質は砂質土である。層厚は5~20cmである。
層中にマンガンが斑点状に沈着している。耕作に関連した犁溝が検出されている。

近世~近代の遺物が含まれている。

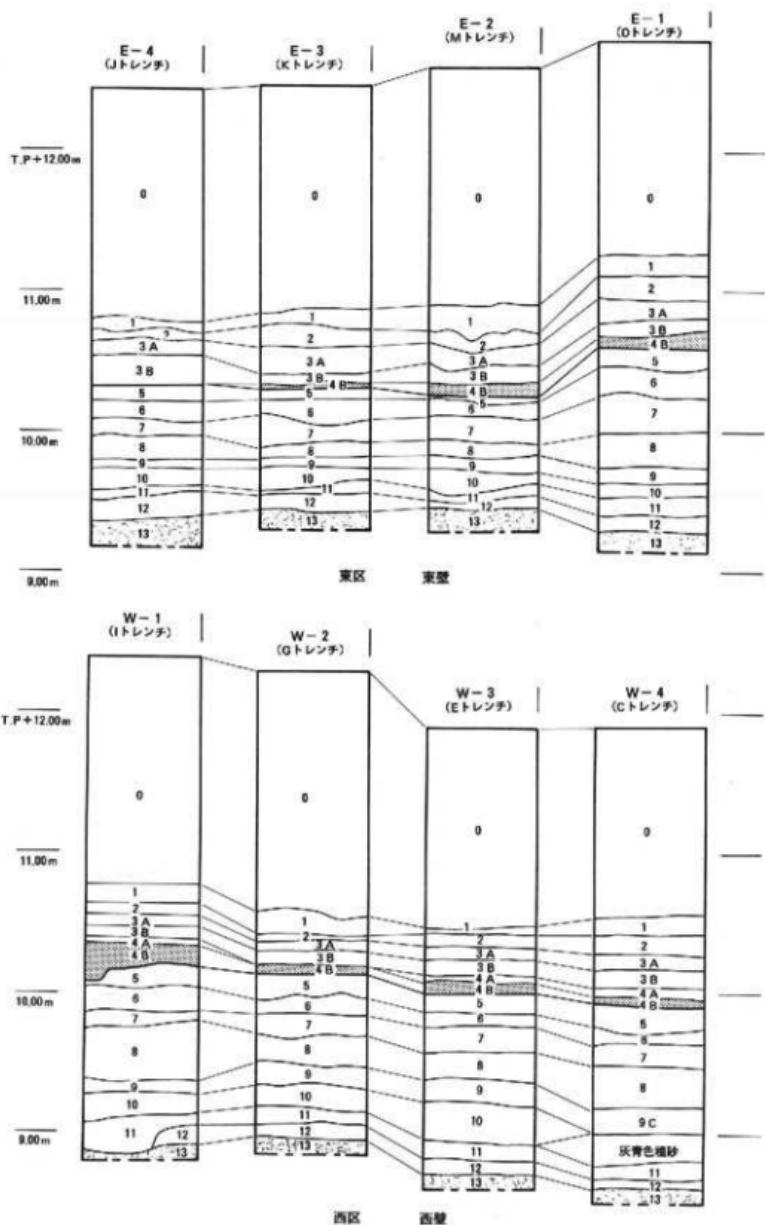
第3 A層 淡灰色ないしは淡黄色で、土質は砂質土および砂質シルトである。層厚は5~25cmである。酸化鉄・マンガンの斑点が顯著な作土層である。局部的に水成層である灰色シルトの薄層を挟んでいる。

第3 B層 淡灰色の色調で土質は砂質シルトである。層厚は15cm前後である。第3 A層と同様作上層で、局部的に水成層の薄層が水平に堆積している。

第4 A層 西区のみで検出した。黄褐色の細縫を含む砂質土である。層厚は5cmを測る。下層の4 B層を切り込んで形成された作土層である。マンガンが斑点状に沈着している。古墳時代中期から飛鳥時代の遺物が少量含まれている。

第4 B層 暗褐色~黒褐色の色調で、土質は東区では砂質~シルト質粘土、西区では細縫が散見される砂質土である。層厚は5~18cmで南部に行くに従って漸増しているが、東区の北東部では欠損している。弥生時代後期・古墳時代中期~後期の遺物を包含している。
NG 7 Bi層~NG 7 Bi層に相当する。

第5層 淡灰色および黃灰色の色調で、土質は砂質~シルトを主とするが、東区南東部付近では粗砂が堆積している。層厚は3~40cmである。弥生時代後期・古墳時代中期~後期初頭の遺構検出面。遺構検出面の標高は、東区南部でT.P+10.60m、北部でT.P+10.30m、西区南部でT.P+10.20m、北部でT.P+9.90mを測るもので、東区の南東から見れば北および西に向かって緩斜面を呈している。西区の中央部では、この土層面で南北方向に伸びる埋没自然河川を検出しておらず、この部分については細縫を含む粗粒砂が認められた。



第3図 基本層序模式図

第0層	客土		
第1層	暗灰色	砂質土	
第2層	淡灰褐色～淡灰色	砂質土	
第3A層	淡灰～淡黄色	砂質～砂質シルト	
第3B層	淡灰色	砂質シルト	
第4A層	黄褐色	砂質土	NG 7B 1層～7B II層
第4B層	暗褐灰色～黒褐色	砂質～シルト質粘土	NG 7B I層～7B II層
第5層	淡灰～黃灰色	砂質～シルト	NG 7B III層
第6層	淡灰～淡黃灰色	粘土	NG 8B層～8C層
第7層	灰～明青灰色	粘土	NG 9A層
第8層	灰オリーブ色	シルト質粘土	NG 9B層
第9層	暗灰色	粘土	NG 9C層
第10層	灰色	粘土	NG 9C層
第11層	灰色	シルト質粘土	NG 10層～11層
第12層	暗灰色	シルト～粘土	NG 12層
第13層	浅黄～灰白色	粘土質シルト	NG 13層

なお、八尾南遺跡第5次調査(Y S87-5)では、この土層上面で古墳時代前期初頭(庄内式期)の遺構が検出されている。NG 7B III層に相当する。

第6層 淡灰～淡黄灰色粘土で、層厚は5～15cmを測る。酸化鉄・マンガンの沈着が顕著である。八尾南遺跡第5次調査(Y S87-5)では上面で弥生時代後期の水田が検出されている。NG 8B層～NG 8C層に相当する。

第7層 灰色ないしは明青灰色粘土。層厚10～40cm。下部に黒色帯を有する。上面で足跡状の凹みが多数観察されており、弥生時代前期の水田の可能性がある。NG 9A層に相当する。

第8層 灰オリーブ色の色調で土質はシルト質粘土である。層厚10～40cm。南部に行くに従って漸増している。NG 9B層に相当する。

第9層 暗灰色粘土。層厚5～20cm。第8層と同様、水成の粘土層である。下部で黒色帯を構成する土層である。八尾南遺跡15次調査(Y S89-15)では縄文後期の住居が検出されている。NG 9C層に相当する。

第10層 灰色粘土層。層厚5～50cm。NG 9C層に相当する。

第11層 灰色シルト質粘土。層厚10～40cm。一部炭化物のラミナが観察される。NG 10層～11層に相当する。

第12層 暗灰色シルトないしは粘土。層厚は5～10cmである。黒色帯を構成する土層で下部は不明瞭で下位層とは漸移関係にある。上面には乾痕が観察される。NG 12層に相当する。

第13層 浅黄～灰白色粘土質シルト。やや硬質の土層で粘土化が進んでいる。層厚は20cm以上。乾痕が認められる。上部は暗灰色シルトが優勢なNG 12/13漸移帶に対比されるもので、この部分から第13層上部で石鐵・有舌尖頭器が出上している。NG 13層に相当する。

第3節 検出遺構と出土遺物の概要

1) 東区

東区は、概ね北東-南西方向に長い長方形を呈する調査区で面積は5,587m²を測る。調査の結果、現表土下2.2m前後付近で弥生時代後期から古墳時代後期に比定される遺物を包含する第4B層を確認した。第4B層の上面の標高は調査区の南部付近が最も高く、西側および北側に行くに従って低くなっている。この土層を取り除くと色調が黄灰色～淡灰色で土質が砂質シルトの層相をもつ第5層が広がっており、この上面（標高-南部10.60m、北部10.30m）で弥生時代後期・古墳時代中期～後期・近世の遺構・遺物を検出した。遺構は主に中央部から南部一帯で検出されている。検出した遺構は、掘立柱建物2棟（SB-1・SB-2）・井戸1基（SE-1）・土坑8基（SK-1～SK-8）・溝16条（SD-1～SD-16）・小穴102個（SP-1～102）である。時期的には、弥生時代後期のSE-1、SK-1・4・5、SD-6と近世のSD-1・2を除けば大半が古墳時代中期～後期に比定される。後期旧石器時代相当層を調査対象とした下層調査では、東西方向に伸びる調査基準線に沿って10本のトレンチ（F～Oトレンチ）を設定した。第13層を対象に調査を実施した結果、O・Hトレンチから剥片等が出土している。

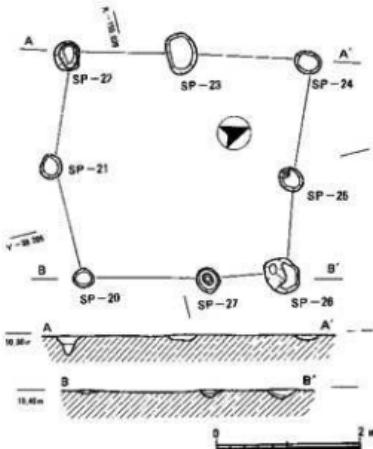
掘立柱建物（SB）

SB-1

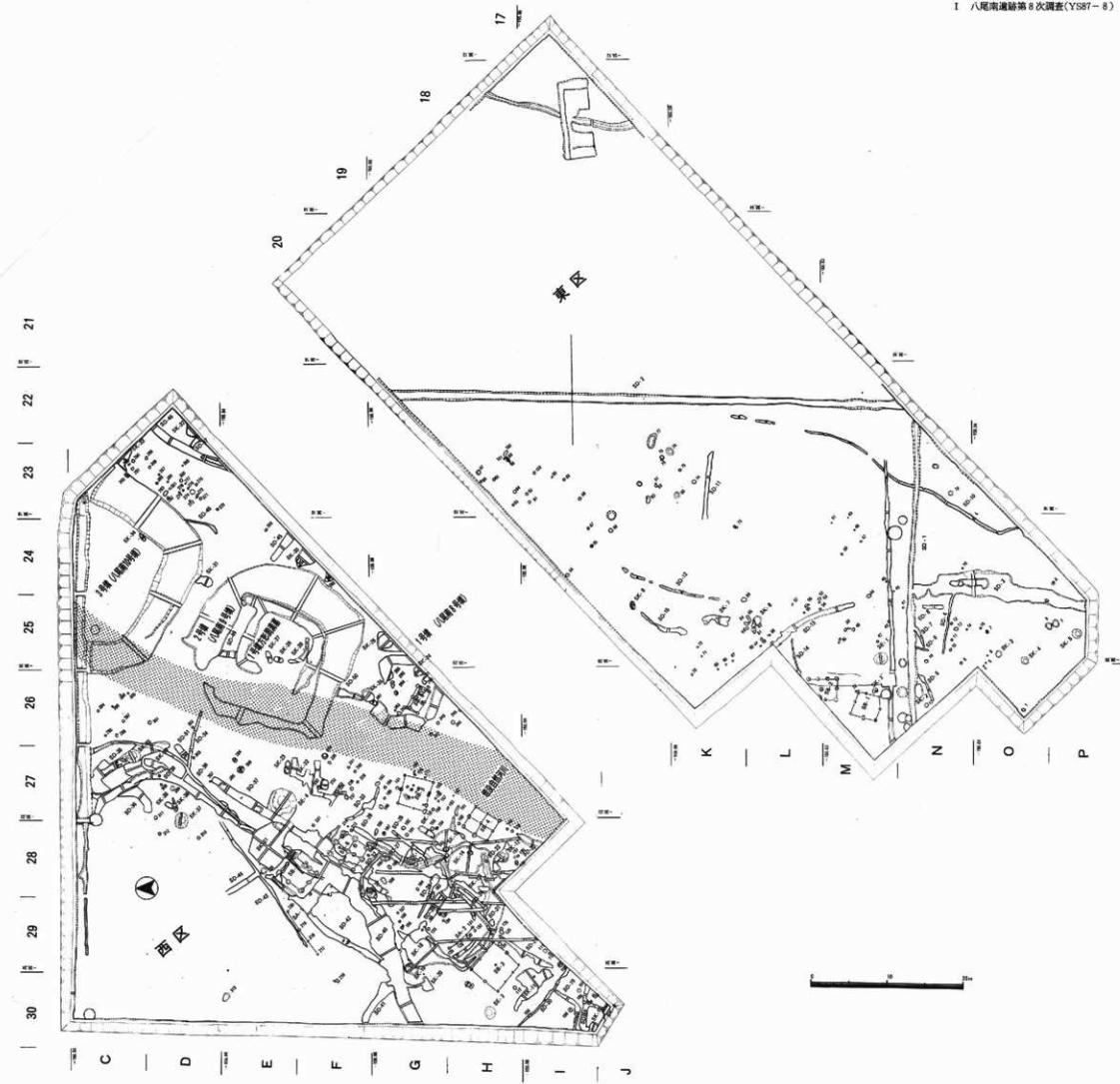
26M地区で検出した。SP-20～SP-27で構成されている。東西2間（3.1～3.2m）×南北2間（3.2～3.4m）の規模を有する。主軸方位はN-12°-Eで床面積は約10m²を測る。柱穴は上面の形状が円形および楕円形を呈しているもので、径0.2～0.56m、深さ0.08～0.26mを測る。埋土は、茶褐色砂質土の单一層のものと、上層に茶褐色砂質土、下層に暗灰色砂質土が堆積するものとに二分できる。遺物はSP-22から土器の小片が極少量出土しているが時期は明確でない。

SB-2

SB-1の北側に隣接している。SP-29～SP-37で構成されている。北部が調査区外に至るため、全容は不明であるが壁面に掘られた柱穴を含めて東西2間（2.8m）×南北3間（3.3m）の規模を有する。主軸方向は座標北を示す。柱穴はすべて円形を呈し、径0.5m前後、深



第4図 SB-1 平断面図



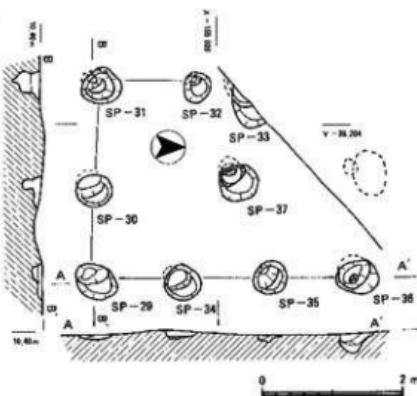
第5図 掘出遺構平面図

さ0.15~0.8mを測る。埋土は、上部においては淡灰色の細砂を主体とする土層で、下部では茶~灰色の砂質ないしは粘土の堆積が認められた。遺物が出土した柱穴は、SP-29・31~34・36・37で古墳時代中期に比定される土師器の小片が出土している。なお、SP-29・33以外の柱穴底部は一様に南西部へ深く入り込んでおり、柱が抜きとられたことを示している。

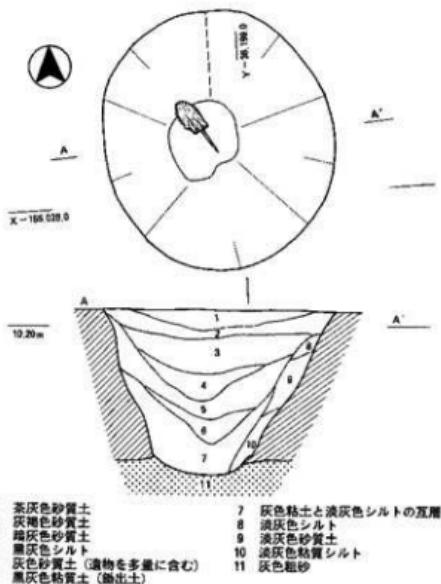
井戸 (SE)

SE-1

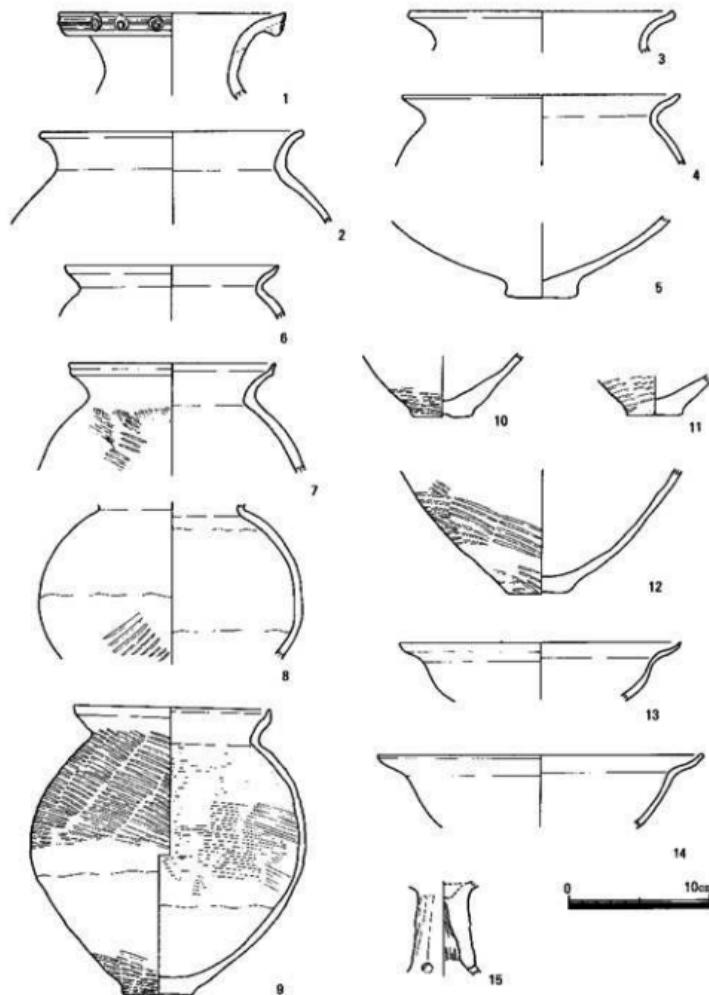
25M地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈し、長径1.83m、短径1.64mを測る。断面の形状は逆台形状を呈し、深さ1.2mを測る。埋土は第1層茶灰色砂質・第2層灰褐色砂質・第3層暗灰色砂質・第4層黒灰色シルト・第5層灰色砂質・第6層黒灰色粘質・第7層灰色粘土と淡灰色シルトの互層・第8層淡灰色シルト・第9層淡灰色砂質・第10層淡灰色粘質シルトの10層で最下層は湧水層ある第11層灰色粗砂に達している。一部の層を除いて中央部が厚く周辺部が薄いレンズ状の堆積がみられることから、井戸廃絶後は漸移的に推移したことが窺われる。遺物は、第1層~第7層の各層からコントナ箱にして約半分程度出土したが、そのうち第5層・第6層か



第6図 SB-2 平断面図



第7図 SE-1 平断面図

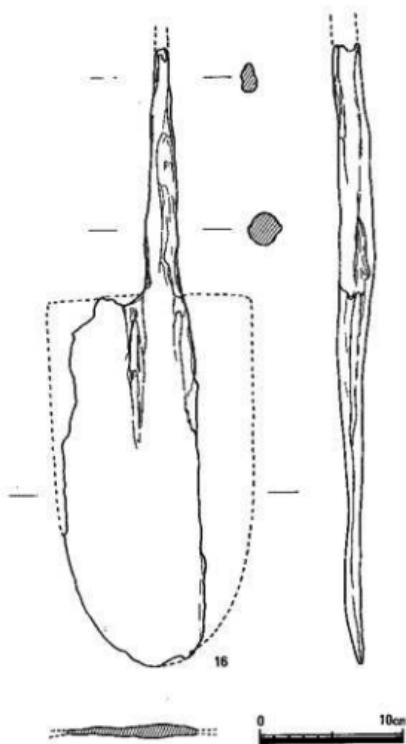


第8図 SE-1出土遺物実測図

ら出土したものが全体の5割程度を占めた。出土した土器類はすべて弥生時代後期に比定されるもので、壺（1～5）・盤（6～12）・鉢（13・14）・高杯（15）がある。土器類以外では、第6層から鍔（16）が出土している。

（1）は口縁部が垂下し、外面に面をもつ広口壺である。口縁端部には2条の凹線と3個一

対の円形浮文が施されている。焼成は良好で色調は灰白色である。胎土には石英・長石・赤色酸化粒が含まれている。(2) は頸部が上外方に伸びた後、口縁部が外反する広口壺である。焼成は良好で色調は淡橙色である。器壁の表面に大粒の石英・長石が多量に浮き出しており、やや難な作りの土器である。(3・4) は広口壺である。色調は(3) が灰白色、(4) が橙色である。ともに胎土中に大粒の石英・長石を多量に含んでいる。(5) は突出した平底をもつもので、体部内外面ともにナデ調整が施されている。(6・7) は口縁端部が上外方に尖り気味で終る壺である。(7) の体部外面にタタキと上半にはハケナデが施されている。(8) は体部の約半分が遺存しているもので、体部の中位以下にタタキが施されている。色調は(6) が淡橙色、(7) が灰白色である。胎土には(8) が石英・長石粒を多量に含んでいるのに比して



第9図 SE-1出土陶実測図

(7) は少なめで精良な粘土が使用されている。(9) は口径13.7cm、器高20.6cm、体部最大径19.3cmを測る壺である。球形の体部を有するもので、口縁端部は(6・7) と同様つまみ上げられ尖り気味で終っている。底部は突出しない平底である。体部外面上半と底部は左上がりのタタキ、中位はナデが施されている。体部内面は横方向にハケナデが施されている。色調は灰白色～淡橙色で、体部上位と下位に黒斑が認められる。胎土は石英・長石・チャート粒が多量に含まれている。(10～12) は壺底部で、(10) はドーナツ底を呈している。色調は淡橙色～橙色を呈する。胎土には石英・長石・チャートの小粒が多く含まれている。(13・14) は大きく開く体部から二段に屈曲する口縁部が付く鉢である。色調は(13) が灰白色、(14) が淡褐色で、ともに胎土には石英・長石・チャートの小粒が多量に含まれている。(15) は高杯の柱状部である。スカシ孔は3個である。(16) はスコップ状を呈する一本造りの踏み鉢である。

遺存部分で長さ43.8cm、幅9.7cmを測る。柄は途中で折れており、検出部分で長さ17cmを測る。柄の断面形は円形で径3.5cmを測るが、先端部分はやせて細くなっている。刃部は柄の延長部分の跡起部を境に半分が欠損している。遺存状況が悪く使用痕等は明確でない。樹種はカシ類である。

土坑（SK）

SK-1

26M地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.53m、南北幅0.7m、深さ0.7mを測る。埋土は茶褐色砂質土の単一層で、内部から弥生時代後期に比定される壺（17～20）のほか、甕（21）・鉢等の小片が少量出土している。

SK-2

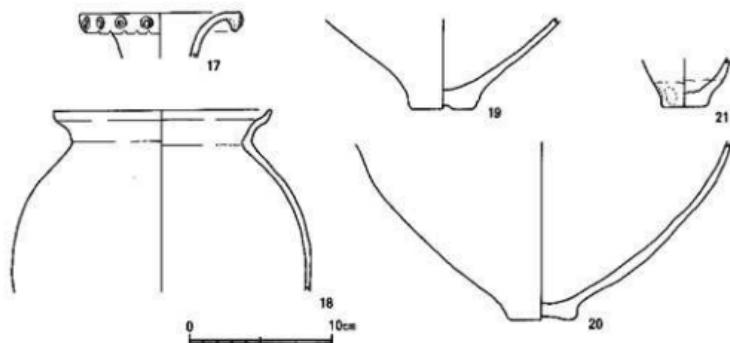
26N地区で検出した。北部がSD-1に切られているため全容は不明であるが、検出部で東西幅2.0m、南北幅1.03m、深さ0.1mを測る。埋土は、茶褐色砂質土の単一層で、内部から弥生時代後期に比定される甕等の小片が小量出土している。

SK-3

25O地区で検出した。円形状を呈し東西径0.84m、南北径0.94m、深さ0.11mを測る。埋土は茶褐色砂質土の単一層で、内部から土器の小片が極少量出土しているが時期は明確でない。

SK-4

25O地区で検出した。東西方向に長い椭円形を呈するもので、長径1.8m、短径0.98mを測る。断面の形状は逆台形を呈し深さ0.33mを測る。埋土は茶褐色砂質土の単一層で、内部から弥生時代後期に比定される甕の小片が極少量出土している。



第10図 SK-1 出土遺物実測図

SK-5

25P地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.18m、南北幅1.32m、深さ0.5m前後を測る。埋土は茶褐色砂質土の単一層で内部から弥生時代後期に比定される壺の小片が少量出土している。

SK-6

25L地区で検出した。不定形を呈するもので、最大幅1.77m、最小幅0.45mを測る。断面の形状は逆台形状で深さ0.1m前後を測る。埋土は灰褐色粘土の単一層で、内部から土器の小片が極少量出土したが時期は明確でない。

SK-7

25K地区で検出した。南北方向に溝状に伸びるもので、東西幅0.65~1.15m、南北幅3.68mを測る。深さは0.05m前後で、埋土は暗灰褐色粘土の単一層である。遺物は出土しなかった。

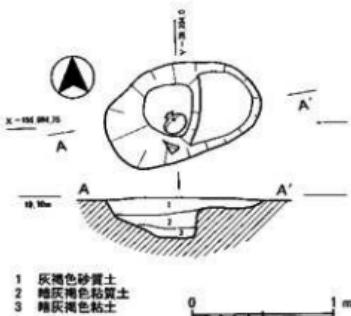
SK-8

25J地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東部にテラス状の平坦部を有する。東西径1.14m、南北径0.68m、深さ0.07~0.29mを測る。埋土は上層より第1層灰褐色砂質土・第2層暗灰褐色粘質土・第3層暗灰褐色粘土である。遺物は第1層から古墳時代中期に比定される須恵器壺の小片のほか、瓦(22)が出土している。(22)は口縁部を除けばほぼ完存しており、現存高15.0cm、体部最大径16.5cmを測る。口縁部に比して体部が大きく球形に張るもので、頸部に波状文、体部中位に2本の沈線間に列点文を施している。色調は体部上半が紫灰色、下半が灰白色でそのほかは青灰色である。また、体部下半には線状の痕跡が乱方向に広がる火燐が認められる。TK216型式に属するものであろう。

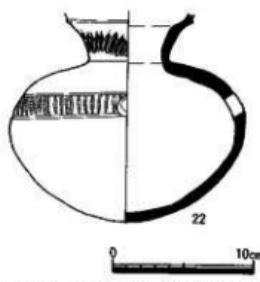
溝(SD)

SD-1

26N地区と22N地区の北部を東西方向に伸びるもので、検出部で幅0.5m~0.8m、深さ0.15



第11図 SK-8 平断面図



第12図 SK-8 出土遺物実測図

m前後を測る。丹北郡の条里区画に合致している。埋土は淡灰色砂質土の單一層である。遺物は、近世～近代に比定される陶磁器・瓦等の小片が少量出土している。

SD-2

22M地区と22N地区の中央部付近を南北方向に伸びるもので、検出部分で幅0.9～1.4m、深さ0.05～0.2mを測る。SD-1と同様条里区画に合致する溝である。埋土は淡灰色砂質土の單一層である。遺物は近世～近代に比定される陶磁器の小片が少量出土している。

SD-3

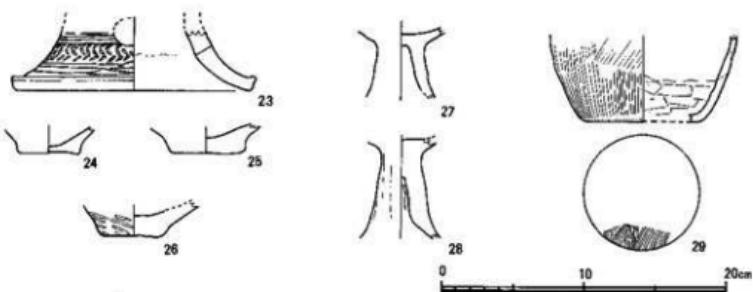
調査区の南部で検出した。南北方向に伸びるもので北端はSD-1に切られている。検出長22.8m、幅1.2～3.8m、深さ0.07～0.2mを測る。埋土は、大半が茶褐色砂質土であるが、分流部付近では溝底付近に茶褐色粘土が堆積する部分が認められた。出土した遺物はすべて上器類でコンテナ箱に約半分程度出土したが、大半が小片であった。時期的には弥生時代後期に比定されるものと、古墳時代中期に比定されるものがある。そのうち、岡化したものは弥生時代後期の器台(23)・壺(24・25)・甕(26)と古墳時代中期の高杯(27)である。(23)は裾部の1/4程度が遺存しているもので、スカシ孔の存在から器台とした。裾部外面にはヘラ先による不規則な沈線器の間に下段に刺突文、上段に刺突羽状文を施文している。全体に器肉が厚く、色調は内面が淡褐色で外側が灰黄色である。胎土には石英・長石粒が多い量に含まれている。

SD-4

25N地区で検出した。東西方向に伸びるもので東端はSD-3と合流している。検出長8.0m、幅0.25～0.4m、深さ0.05m前後を測る。埋土は上層の暗灰色粗砂と下層の茶褐色粘土の2層である。遺物は古墳時代中期に比定される甕・高杯(28)等の小片が少量出土している。

SD-5

26N地区で検出した。南西～北西方向に伸びるもので、北東端はSD-1により切られてい



第13図 SD-3 (23~27)、SD-4 (28)、SD-5 (29) 出土遺物実測図

る。検出長4.0m、幅0.22~0.72m、深さ0.04~0.11mを測る。埋土は上層の茶褐色砂質土と下層の暗褐色細砂混粘土の2層である。遺物は古墳時代中期に比定される半底鉢(29)等が出土している。(29)は体部外面から粗目のハケナデを施すものである。内面は底部から体部下半にかけて指ナデが顕著であるほかは、ナデが施されている。焼成は良好で色調は内面が赤褐色で外側は暗灰色~褐色である。胎上には長石、チャートが多量に含まれている。

SD-6

25N地区で検出した。南北方向に伸びるもので北端はSD-1に切られている。検出長1.8m、幅0.25m、深さ0.07m前後を測る。埋土は茶褐色砂質土の單一層である。遺物は弥生時代後期に比定される甕等の小片が極少量出土している。

SD-7

25N地区で検出した。SD-6の東側に位置する。SD-5と同様南西~北西方向に伸びるもので、北端はSD-1に切られている。検出長2.96m、幅0.2~0.58m、深さ0.02~0.08mを測る。埋土は茶褐色砂質土の單一層である。遺物は弥生時代後期に比定される甕の小片が極少量出土している。

SD-8

25N地区で検出した。南北方向に伸びるもので検出長2.28m、幅0.38~0.54m、深さ0.05m前後を測る。埋土は茶褐色砂質土の單一層である。遺物は上器類の小片が極少量出土したのみで時期は明確でない。

SD-9

SD-1の北側に並行して伸びるもので、検出長38mを測る。東端付近でSD-10を切っている。幅0.5~0.7m、深さ0.05~0.2mで、検出部両端の標高値から西から東への流路方向が推定できる。埋土は灰褐色砂質土の單一層である。遺物は土器類の小片が極少量出土したが、時期は明確でない。

SD-10

24O地区から北東部に伸びるもので、一部とぎれる部分もあるが清端は22K地区に至る。SD-1・SD-9に一部切られている。検出長40m、幅0.2~0.4m、深さ0.1m前後を測る。検出部分の両端の標高値からみて北流したものと推定できる。埋土は灰褐色粗砂の單一層あるいは灰褐色粗砂の下層に灰褐色粘土が堆積しているものに二分される。遺物は土器類の小片が少量出土したのみで、時期は明確でない。

SD-11

23K・24K地区で検出した。東西方向に伸びるもので検出長9.6m、幅0.5m、深さ0.05m前後を測る。埋土は灰褐色粗砂一層である。遺物は土器類の小片が小量出土したが、時期は明確

でない。

SD-12

25K・24J地区で検出した。東西一北東方向に伸びるもので、一部とぎれ小穴状を呈する部分があるが、これらを含めて検出長10.6mを測る。幅0.4m前後、深さ0.05m前後を測る。埋土は上層の暗灰褐色シルトと下層の灰褐色粘土の2層である。遺物は弥生時代後期に比定される壺(30)が出上している。壺(30)は突出しない小さな平底を有する。色調は淡灰色～淡褐色で、焼成は良好で、胎土に石英、長石の小粒を多量に含んでいる。

SD-13

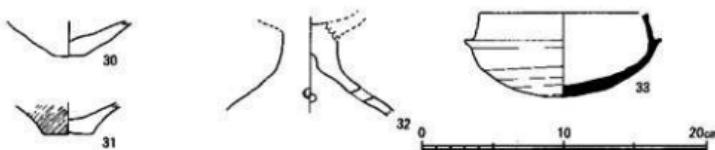
25M～25L地区の北東部から北西方向に伸びる。検出長11.7m、幅0.7m前後、深さ0.05～0.12mで、溝端の標高値からみて、北西方向に流路を持つものと推定できる。埋土は上層より暗灰褐色粗砂混質土・灰褐色粘質土・灰褐色粘土の3層である。遺物は弥生時代後期の壺(31)・高杯(32)の小片が少量出土した他、古墳時代中期の須恵器杯身(33)が出土している。壺(31)はドーナツ底を呈するもので、底径3.4cmを測る。(32)は腕形の杯部が付く高杯と推定される。スカシ孔は4個である。(31・32)の色調は赤褐色で、胎土中にやや大粒の石英、長石を多量に含んでいる。須恵器杯身(33)は口径11.9cm、器高6.0cm、受部径13.9cmを測る。立ち上がりはやや内傾しながら上方に伸び、口縁部は平で内傾している。受部は水平で端部は尖っている。体部の2/3近くを逆時計回りにヘラケズリで調整している。色調は灰色を呈する。TK23型式に對比できよう。

SD-14

25L・26L地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長5.0m、幅0.15m～0.75m、深さ0.05～0.1mを測る。埋土は灰色粗砂混粘質土と灰褐色粗砂混粘質土の2層である。遺物は出土していない。

SD-15

25J・25K地区で検出した。南北方向に弧状を呈して伸びるもので全長6.6m、幅0.2～0.84m、深さ0.05m前後を測る。埋土は暗灰茶褐色粗砂混粘質土の單一層である。遺物は土師器・



第14図 SD-12 (30)、SD-13 (31～33) 出土遺物実測図

須恵器の小片が極少量出土したが時期は明確でない。

SD-16

調査区の北西隅18J地区と18II地区の西部間を南北方向に伸びるもので、検出長20.5mを測る。断面の形状がV字形を呈し、幅0.5~1.0m、深さ0.6m前後を測る。埋土は上層より茶灰色シルト・淡灰茶色細砂・淡灰褐色細砂・黄灰色粗砂・淡灰色シルトである。遺物は出土しなかった。なお、この溝は昭和55年度に八尾市教育委員会が八尾南遺跡範囲確認調査で実施した第2調査区で検出された溝と符合する。

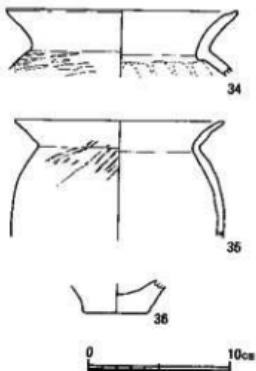
小穴 (SP)

小穴 (SP-1~SP-102)

東区では掘立柱建物を構成する柱穴を含めて、全体で102個 (SP-1~SP-102) の小穴が検出されている。検出位置は、調査区の南部および中央部の西部付近が中心でその他は散発的な広がりを持っている。上面の形状では円形ないしは楕円形のものが多く、径0.1~0.3m前後の小型のものから、1m前後の大型のものがあるが数量的には前者が多い。深さは0.1m前後のものが大半を占めている。遺物は36個の小穴から出土している。そのうち、時期を明確にし得る遺物が出土したのは8個である。時期別には弥生時代後期の遺物が出土したもの SP-3 (36)・SP-7・SP-17・SP-38 (34)・SP-48 (35) と古墳時代中期の遺物が出土した SP-2・SP-9・SP-28 に区別できる。

第2表 東区小穴 (SP) 一覧表

番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
SP-1	26O	楕円形	60×40	11.8		弥生土器
SP-2	25P	不定形	110×90	2.7		"
SP-3	25O・P	"	103×75	9.6		"
SP-4	26O	円形	23×22	5.9		土師器
SP-5	26O	"	23×21	5.4		
SP-6	25O	"	23×22	4.7		
SP-7	25O	楕円形	50×37	9.2		弥生土器
SP-8	24P	円形	50×45	21.4		"
SP-9	26N	"	40×36	11.4		土師器
SP-10	25N	楕円形	42×34	7.7		弥生土器
SP-11	25N	円形	34×30	9.3		土師器・須恵器
SP-12	25N	"	39×32	10.4		弥生土器
SP-13	25N	楕円形	62×50	12		弥生土器・土師器
SP-14	25N	円形	25×25	10.1		土師器
SP-15	25O	"	30×28	12.9		
SP-16	24N	"	24×25	14.6		



第15図 SP-3 (36)・SP-38 (34)・SP-48 (35) 出土遺物実測図

番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S P -17	26N	円形	55×55	31.5	土篋器	
S P -18	25・26N	"	50×40	11.8	"	
S P -19	23N	"	60×65	17.6	弥生土器	
S P -20	26M	"	28×25	4.6		S B -1
S P -21	26M	"	35×30	8		S B -1
S P -22	26M	不定形	42×37	29		S B -1
S P -23	26M	橢円形	56×42	7.8		S B -1
S P -24	26M	円形	37×32	7.1		S B -1
S P -25	26M	"	36×32	6.2		S B -1
S P -26	26M	不定形	58×46	4.7	土篋器	S B -1
S P -27	26M	円形	34×32	3.1		S B -1
S P -28	26M	"	23×20	6.3	土篋器	
S P -29	26M	"	60×51	21.4	弥生土器・土篋器	S B -2
S P -30	26M	"	47×46	33.1		S B -2
S P -31	26M	"	52×50	41.3	弥生土器・土篋器	S B -2
S P -32	25M	不定形	40×38	29.2	土篋器	S B -2
S P -33	26M	"	68×34	39	"	
S P -34	26M	円形	50×48	25.6	弥生土器	S B -2
S P -35	26M	"	48×42	17.8		S B -2
S P -36	26L	"	56×53	34.3	弥生土器・土篋器	S B -2
S P -37	26L	不定形	55×52	44	"	S B -2
S P -38	25M	橢円形	81×20	10.8	弥生土器	
S P -39	25M	不定形	95×34	18.8		
S P -40	25M	橢円形	56×38	18.4		
S P -41	25M	圓丸方形	30×26	3.3		
S P -42	25M	円形	34×34	10.9		
S P -43	25M	"	38×36	9.5		
S P -44	25M	不定形	66×44	5.4	土篋器	
S P -45	25M	円形	19×15	8.7	弥生土器	
S P -46	24M	"	21×20	4.5		
S P -47	24M	"	34×27	12.6		
S P -48	24M	"	25×21	3.2	弥生土器	
S P -49	24M	"	15×15	6		
S P -50	24M	橢円形	39×28	9.5		
S P -51	24M	円形	22×18	9.3		
S P -52	25L	不定形	50×34	6.1		
S P -53	25L	円形	30×24	2.7	土篋器	
S P -54	25L	不定形	37×36	26.9	"	
S P -55	25L	円形	31×21	11.6		
S P -56	25L	不定形	70×25	3.5		
S P -57	25L	円形	32×21	4.9		
S P -58	25L	橢円形	45×29	6.8		
S P -59	25L	"	30×16	7.8		
S P -60	25L	不定形	51×28	6.5		
S P -61	25L	圓丸方形	40×38	8		
S P -62	25L	不定形	81×64	21.5		
S P -63	25K	円形	42×37	4.9		
S P -64	25K	不定形	70×40	4		
S P -65	25K	"	105×35	5.7		
S P -66	25K	"	76×60	7.7		
S P -67	25K	円形	25×25	4.6		
S P -68	26K	円形	27×24	3.7		
S P -69	26K	円形	24×21	4.2		

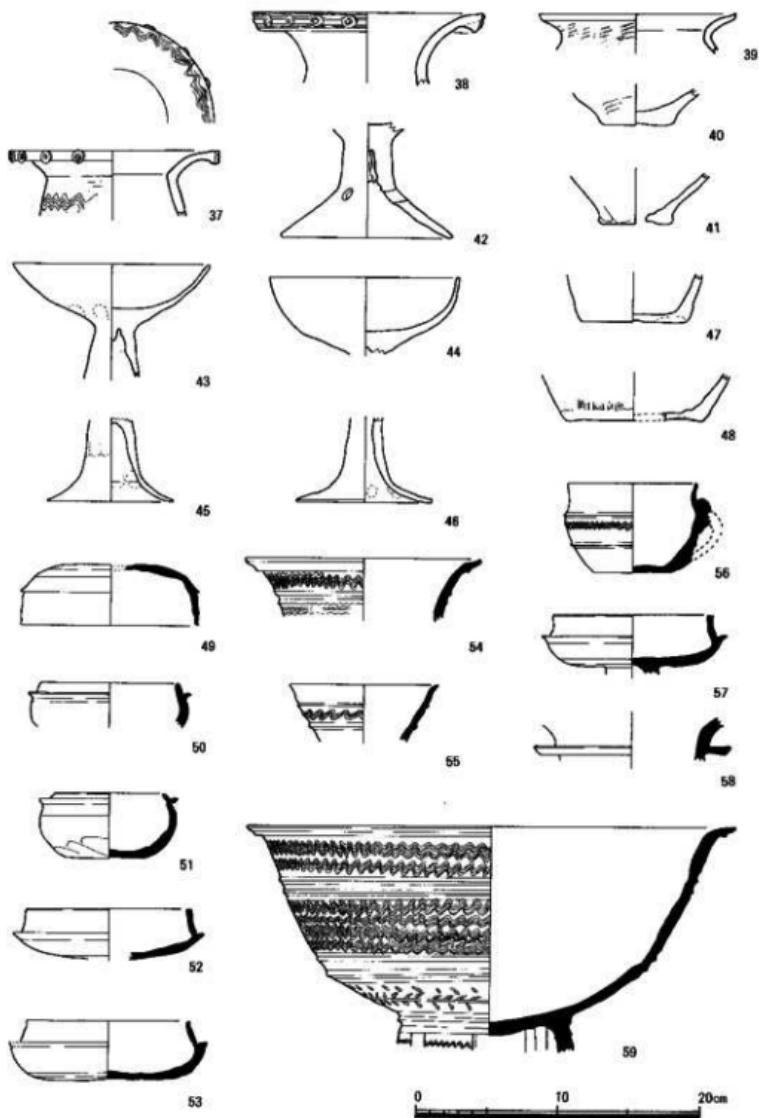
番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S P - 70	26K	円形	30×28	3.7		
S P - 71	25K	"	24×24	6.6		
S P - 72	25K	圓丸方形	28×25	8.9		
S P - 73	24K	不定形	67×30	16.1		
S P - 74	23K	円形	60×55	10.1		
S P - 75	23K	"	42×39	13.5		
S P - 76	23J・K	"	109×91	23.6		
S P - 77	23J	不定形	214×102	21.1		
S P - 78	23J	円形	61×51	8.8		
S P - 79	23J	"	35×25	9		
S P - 80	23J	不定形	84×76	21.8	土師器	
S P - 81	23J	円形	24×21	6.2		
S P - 82	23J	"	40×34	6.5	土師器	
S P - 83	23J	椭円形	101×55	3.5		
S P - 84	24I	不定形	56×55	12.9		
S P - 85	24J	円形	28×24	11.1		
S P - 86	24J	"	62×56	13.6	弥生土器	
S P - 87	24I	"	40×37	10.4	"	
S P - 88	23I	"	45×44	8.4		
S P - 89	23I	"	40×32	5.8		
S P - 90	23I	"	30×27	3.8		
S P - 91	23I	"	41×40	8.8		
S P - 92	23I	"	42×39	15.2	土師器	
S P - 93	23H	"	34×29	8.4		
S P - 94	23H	"	50×48	14.9		
S P - 95	23H	"	41×38	7.7		
S P - 96	23H	"	40×37	7.7		
S P - 97	23H	"	68×66	23.1	土師器	
S P - 98	23H	圓丸方形	26×24	9.3		
S P - 99	23II	不定形	55×52	14.4		
S P - 100	23H	"	91×34	5.9		
S P - 101	23H	円形	27×26	4.8		
S P - 102	23I	"	42×41	22.4		

第4層出土遺物

遺物は、弥生時代後期と古墳時代中期の遺構を検出した調査区南部の第4層を中心に出土している。遺物は上器類が主であるが、一部を除けば大半が小破片であった。量的にはコンテナ箱5箱程度で、西区に比して出土量は少ない。図化したものは弥生時代後期では、器台(37)、広口壺(38)、甕(39・40)、底部有孔土器(41)、高杯(42) 古墳時代中期では土師器高杯(43~46)、平底鉢(47・48)、須恵器杯蓋(49)、杯身(50~53)、壺(54・55・60)、把手付鉢(56)、高杯(57)、器台(58・59)がある。

弥生土器

(37)は大きく外反する口縁部を有する器台である。口縁部端面に2個一对の円形浮文、体部上位および口縁部内面に波状文を施文している。色調は灰白色~赤褐色で、胎土に石英・長



第16図 第4層出土遺物実測図-1

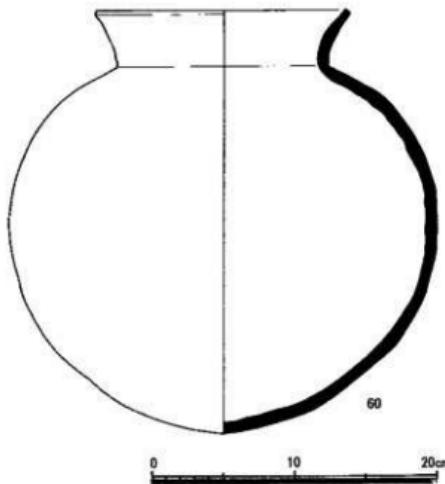
石粒を多量に含んでいる。(38)は広口壺の口縁部で、垂下する口縁端部に凹線文と円形浮文を施文している。明橙色の色調で焼成は良好である。胎土には石英・長石・赤色酸化土粒が多量に含まれている。(39)は口縁端部が尖り気味に終る壺の口縁部である。(40)は突出気味の平底を有する壺底部である。(41)は平底で突出した底部を有する底部有孔上器である。穿孔は焼成後である。(42)は高杯の裾部で、スカシ孔は3個である。

土師器

(43)は水平な杯底部から内済気味に口縁部が斜上方に伸びる杯部を有する高杯である。高杯(44)は杯部が完存しているもので、杯部径13.2cm、杯部高5.4cmを測る。(43・44)ともに淡赤灰色の色調で、胎土には石英・長石・赤色酸化土粒が含まれているが概ね精良で焼成も良い。(45・46)は高杯の裾部である。(47・48)は平底を有する小型の鉢で、小片のため全容は不明であるが、底部の形状から韓式系土器の平底鉢に比定される。(47)は底部外面をヘラケズリで調整している。(48)は体部下半の一部に平行クタキが認められる。色調は(47)が乳灰色、(48)が灰白色～黒灰色である。胎土には、石英・長石が多量に含まれている。

須恵器

(49)は杯蓋である。大井部はやや偏平で縁は鋭く、口縁部はほぼ垂直に下る。(50)は立ち上がりが短く内傾する杯身で、端部は丸く終る。受部は水平方向に短く伸びる。(51)は口以上が遺存している。口径7.6cm、器高4.7cm、底径5.0cmを測る。立ち上がりは内傾して伸びるもので、口縁端部は薄く尖り気味である。受部は水平方向に伸びており、端部は尖っている。体部は立ち上がりを含めて球形を呈しており、底部と体部の境には不整方向に静止ヘラケズリが行われている。底部はやや上げ底気味の平底である。(52・53)は立ち上がりが内傾する杯身で、口縁端部は(52)が水平、(53)が内傾している。受部はとともに水平方向に伸びている。(54)は頸部外面に波状文を施す広口壺である。色調は灰白色で焼成はややあまい。(55)は直口壺の口縁部で、口縁端部は



第17図 第4層出土遺物実測図-2

薄くシャープな作りである。頸部には2本の凸帯間に6本で1条の波状文が施文されている。(56)は平底の底部を有する把手付碗で全体の約1/2が遺存している。体部外面には2本の凸帯間に5本で1条の波状文がやや難に施文されている。色調は底部内面が灰紫色であるが、他は青灰色で、底部外面に火燐と想われる灰紫色を呈する条線が認められる。(57)は有蓋高杯で杯部の約1/4が遺存している。立ち上がりはほぼ直立して伸びるもので、口縁端部は水平で1条の沈線が回る。(58)は器台の一部と推定されるが小片のため詳細は不明である。(59)は杯部の約1/2が遺存している大型の器台で、口径34.4cm、杯部高13.2cmを測る。杯部外面には2条一対からなる凸帯により、上中下段の3段に区分している。上段には2条の波状文、中段には4条の波状文、下段には沈線を境に上部に羽状列点文、下部に列点文が施文されている。色調は淡青灰色で、体部内面全体に灰かぶりが認められる。広口壺(60)は球形の体部からゆるやかに外反する口縁部が付くもので、全体の約1/2が遺存している。復元口径17.6cm、器高30.1cmを測る。体部外面上位の一部にタキ調整が認められる以外は、全体に丁寧なナデ調整が行われている。体部中位に内側へくぼむ部分がある。胎土は精良で灰白色の色調で焼成も良い。出土した須恵器類はTK85型式～TK208に対比できよう。

2) 西区

西区は調査区の形状が三角形を呈するもので、面積は4,373m²を測る。調査の結果、現地表下1.8～2.1m付近で、弥生時代後期・古墳時代中期～後期に比定される遺物を包含する第4B層を検出した。第4B層を取り除くと、弥生時代後期・古墳時代中期～後期の遺構ベース面である第5層（標高－南部10.20m、北部9.90m）を検出した。ただ、第5層上面では調査地の中央部を南北に伸びる埋没河川が確認されており、この部分については粗粒砂の広がりが認められた。遺構は調査区の北西部を除いた全域で検出されている。検出した遺構は方形周溝墓1基・古墳3基（1号墳～3号墳）・掘立柱建物7棟（SB-3～9）・井戸3基（SE-2～SE-4）・土坑31基（SK-9～SK-39）・溝35条（SD-17～SD-51）・櫛列2ヶ所（SA-1・SA-2）・小穴211個（SP-103～313）である。時期別では、大半が古墳時代中期～後期に比定されるが一部、方形周溝墓、土坑（SK-16・25・28）、溝（SD-22・36・38・48・49）等が弥生時代後期の遺構である。後期旧石器時代相当層を対象とした下層調査では、東西方向の調査基準線に沿って6本のトレンチ（Cトレンチ～Hトレンチ）を設定した。第13層を対象に調査を実施した結果、C・E・Fトレンチから剥片・有舌尖頭器等が出土している。

掘立柱建物（SB-3～SB-9）

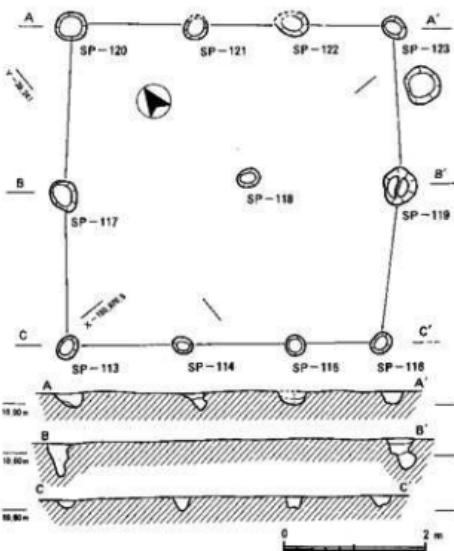
SB-3

29H・30H地区で検出した。SP-113～117・SP-119～123で構成されている。東西3間（4.45～4.55m）×南北2間（4.50～4.55m）の規模を有する。主軸方向はN-40°-Eで、床面

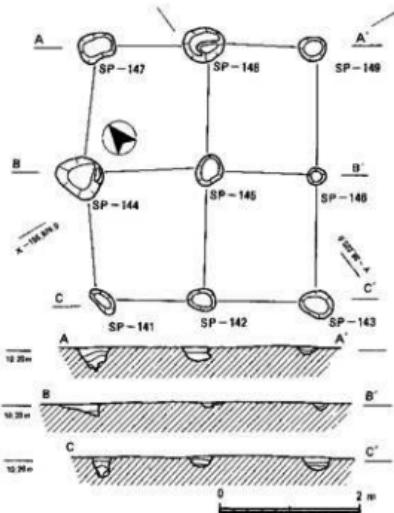
積は約20m²を測る。柱穴は上面の形状がすべて円形を呈するもので、径0.24~0.53m、深さ0.12~0.45mを測る。埋土はSP-119を除けば、淡灰褐色砂質土の單一層のもの(113~117・120・123)と上層に淡灰褐色砂質土、下層に灰褐色砂質土が堆積するものとに二分できる。遺物はSP-122から古墳時代中期に比定される土師器の小片のほか、須恵器高杯の小片が出土している。

SB-4

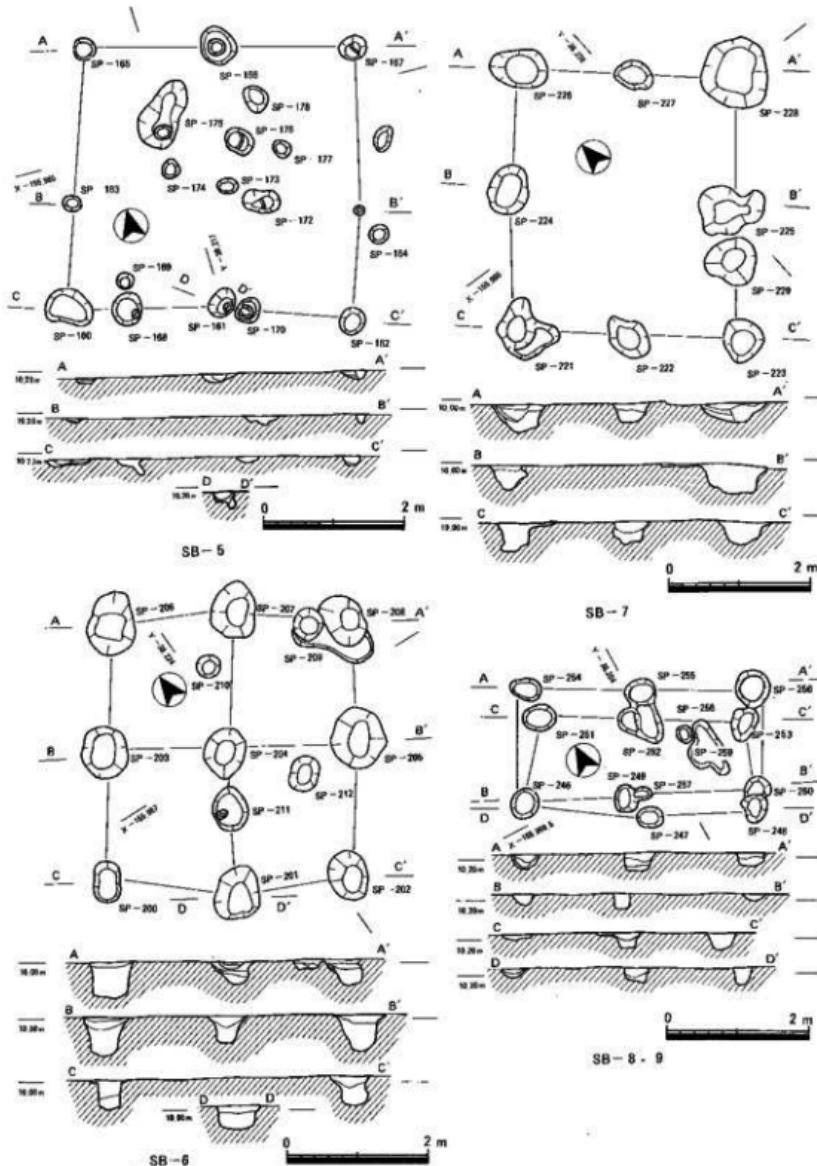
27H・28H地区で検出した。SP-141~SP-149で構成されている。東西2間(3.1m)×南北2間(3.7m)の規模で、中央部に東柱を有する。主軸方向はN-39°-Eで、床面積は約11.5m²を測る。柱穴は円形ないしは楕円形を呈するもので、径0.23~0.66m、深さ0.05~0.36mを測る。柱穴内の埋土は6層から成るが水平堆積のものが多い。遺物はSP-141・144・148から土器の小破片が極少量出土したが時期は明確でない。なお、掘立柱建物の構築に際しては、南北柱列の東側は埋没河道の西岸とほぼ一致させており、構築場所としては不向きな埋没河道内に堆積する粗砂部分を避けている。



第18図 SB-3 平断面図



第19図 SB-4 平断面図



第20図 SB-5~SB-9 平断面図

SB-5

27G地区で検出した。SP-160~SP-167で構成されている。東西2間(3.82~4.05m)×南北2間(3.7~3.9m)の規模を有する。主軸方向はN-18°-Eで床面積は約14.8m²を測る。柱穴は上面の形状が円形ないしは楕円形を呈するもので、径0.14~0.65m、深さ0.06~0.24mを測る。遺物はSP-160・166・167から出土している。このうち時期が明確なものはSP-166で古墳時代中期に比定される土師器壺の小片が出土している。

SB-6

28F地区で検出した。SP-200~SP-208で構成されている。東西2間(3.4~3.5m)×南北2間(3.7m)の規模で、中央部に束柱を有する。主軸方向はN-34°-Eで床面積は約12.8m²を測る。柱穴は上面の形状がすべて南北方向に長い楕円形を呈するもので、径0.34~0.92m、深さ0.33~0.55mを測る。遺物はSP-200~SP-208のすべての柱穴から出土している。そのうち、時期を明確にし得る資料が出土したのはSP-200(土師器壺)、SP-201(土師器壺)、SP-202(土師器壺・製塙土器・須恵器高杯)、SP-207(土師器壺)ですべて古墳時代中期に比定される。

SB-7

28E・F地区で検出した。SP-221~SP-228で構成されている。東西2間(3.1~3.2m)×南北2間(3.7~3.8m)の規模を有する。主軸方向はN-41°-Eで床面積は11.8m²を測る。柱穴は上面の形状が楕円形ないしは不定形を呈するもので、径0.3~1.0m、深さ0.27~0.4mを測る。遺物はSP-221・224・226・227から出土している。そのうち、時期が明確なものが出土したのはSP-227で古墳時代中期に比定される土師器壺の小片が出土している。

SB-8

26G地区で検出した。1号墳の墳丘部に位置する。SB-9を切っている。SP-246・249・250・254~256で構成されている。東西2間(3.20~3.28m)×南北1間(1.5~1.63m)の規模を有する。主軸方向はN-18°-Eで床面積は約5m²を測る。柱穴は上面の形状が楕円形を呈するもので径0.28~0.53m、深さ0.08~0.25mを測る。遺物はSP-249・255・256から出土している。このうちSP-256からは古墳時代中期に比定される製塙上器の小片が出土した。

SB-9

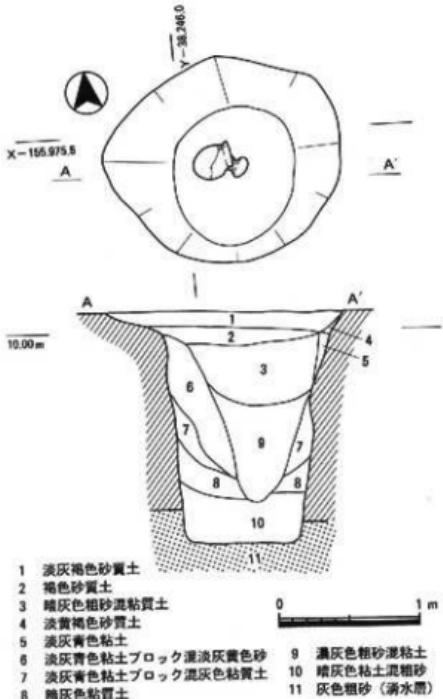
26G地区で検出した。SP-246~248・SP-251~253で構成されており、SP-246はSB-8と共に用いている。東西2間(2.95~3.25m)×南北1間(1.25m)を測る。主軸方向はN-30°-Eで床面積は約3.9m²を測る。柱穴は上面の形状が円形ないしは楕円形を呈しており、径0.28~0.5m、深さ0.07~0.25mを測る。遺物はSP-248から古墳時代中期に比定される土器の小片出土している。なお、出土した遺物からみてSB-8・9の廃絶後に1号墳が構築され

たものと考えられる。但し、SB-8・SB-9ともに南西部が1号墳の南周溝にあたるため、本来は2間×2間規模の建物であった可能性がある。

井戸 (SE-2～SE-4)

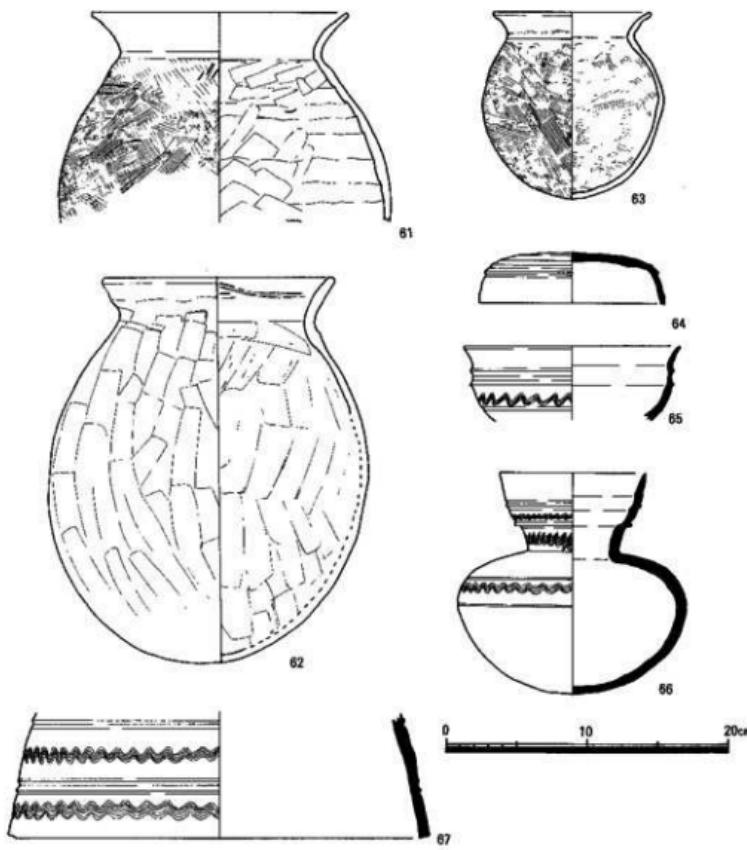
SE-2

30H地区で検出した。東西方向に長い梢円形を呈する素掘井戸で、断面の形状は上部がやや開いた筒状である。上面径1.43～1.7m、底径0.8m、深さ1.65mを測る。埋土は第1層淡灰褐色砂質土・第2層褐色砂質土・第3層暗灰色粗砂混粘質土・第4層淡黄褐色砂質土・第5層淡灰青色粘土・第6層淡灰青色粘土(淡灰黄色砂のブロック)・第7層淡灰青色粘土(灰色粘質土のブロック)・第8層暗灰色粘質土・第9層濃灰色粗砂混粘土・第10層暗灰色粘土混粗砂で最下部は湧水層である灰色粗砂に達しており調査中にも多量の湧水が認められた。遺物は各土層内で小片が散見して認められたが、主に遺物が出土したのは最下層の第10層で、古墳時代中期に比定される土師器壺・甕(61～63)、須恵器杯蓋(64)・無蓋高杯(65)・壺(66)・器台(67)



第21図 SE-2 平断面図

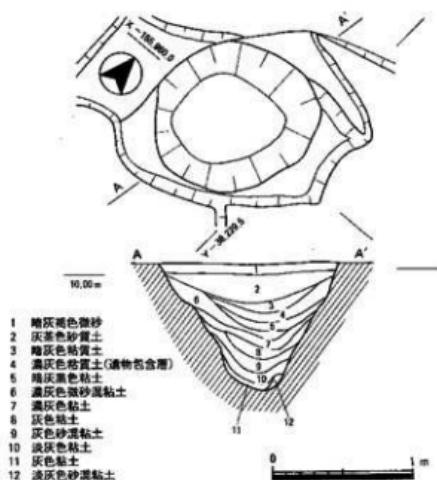
が出土している。(61・62)は長胴壺で(62)は完形品である。(61)は体部外面に左上上がりに粗いハケナデの後、乱方向に細いハケナデを施している。体部内面はヘラケズリとナデを多用して粘土縫の接合部を消しているが不完全である。胎土は精良で灰白色の色調を呈する。(62)は口径16.1cm、器高27.7cm、体部最大径22.6cmを測る。体部外面は煤と炭化物が全面に付着しており調整は不明瞭であるが、概ね板ナデにより平滑にされている。内面にも全面に炭化物が付着しているが調整は外面と同様板ナデである。淡褐色の色調で、胎土には長石・石英・角閃石を含んでいる。(63)は口径11.0cm、器高13.6cmを測る。甕としたが、外面に火炎を受けた痕跡はない。体部中位に最大径をもつもので、底部は丸底である。体部外面は極細のハケナデを乱方向に施している。胎土は精良で灰色の色調を呈する。(64)は全体の1/6程度が遺存している。天井部は水平で、稜は鋭く口縁部は下外



第22図 SE-2出土遺物実測図

方に下る。天井部に灰かぶりが認められる。(65)は無蓋高杯の杯部の $\frac{1}{2}$ 程度が遺存している。杯部外面中位に波状文が施文されている。杯部内面全体に灰かぶりが認められる。(66)は体部最大径がやや上位にある扁形の体部に内済気味に伸びる口頭部が付く直口臺で、口線端部の一端の欠損を除けばほぼ完形品である。口径10.4cm、器高15.9cm、体部最大径16.3cmを測る。口頭部中位の2条の凸帶間および下位と体部中位の沈線間に波状文が施文されている。灰青色の色調で、体部上位の一部と口頭部内面に灰かぶりが認められる。(67)は器台裾部である。内面が青灰色、器肉が紫灰色の色調で、外面は全面に灰かぶりが認められる。須恵器類はTK

216型式に対比されよう。



第23図 SE-3 平断面図

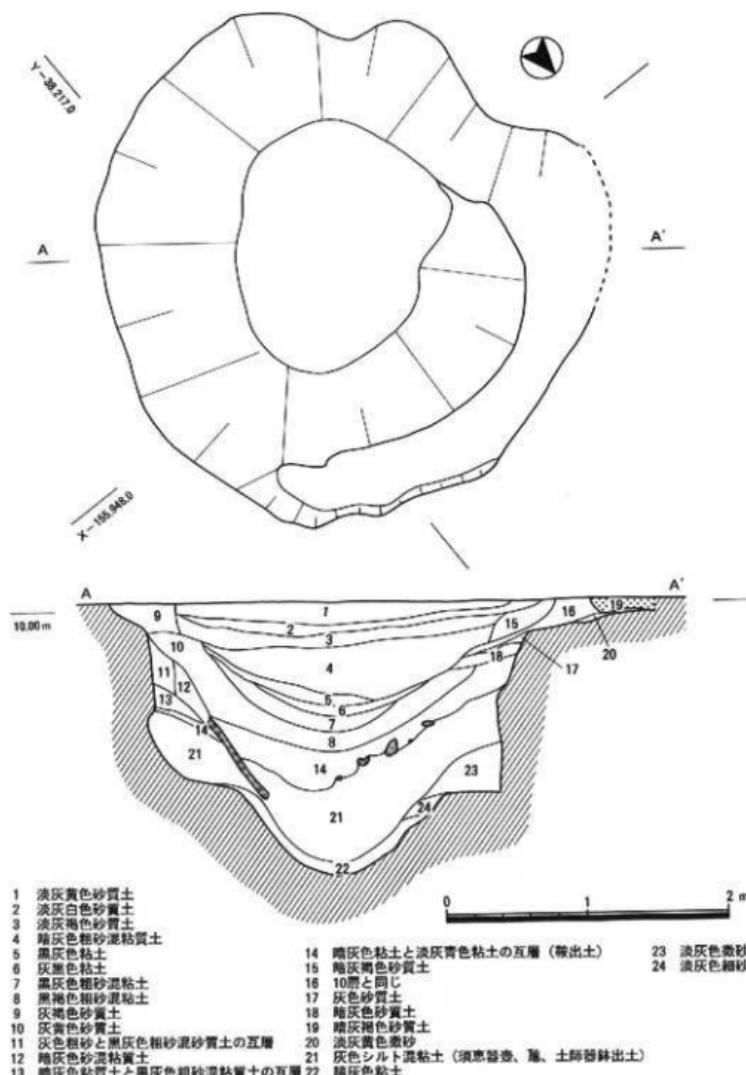
SE-3

28F・G地区、29F・G地区を区画する交点付近で検出した。西側上面の一部はSD-32により削平を受けている。南北方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸で、掘形の断面形状は摺鉢状である。長径1.18m、短径1.08m、深さ0.9mを測る。埋土は12層が掘形の断面形に沿ってレンズ状に堆積しており、漸移的な堆積状況が窺われる。遺物は第4層から弥生時代後期に比定される甕の小片が少量出土しているが同化し得たものはない。

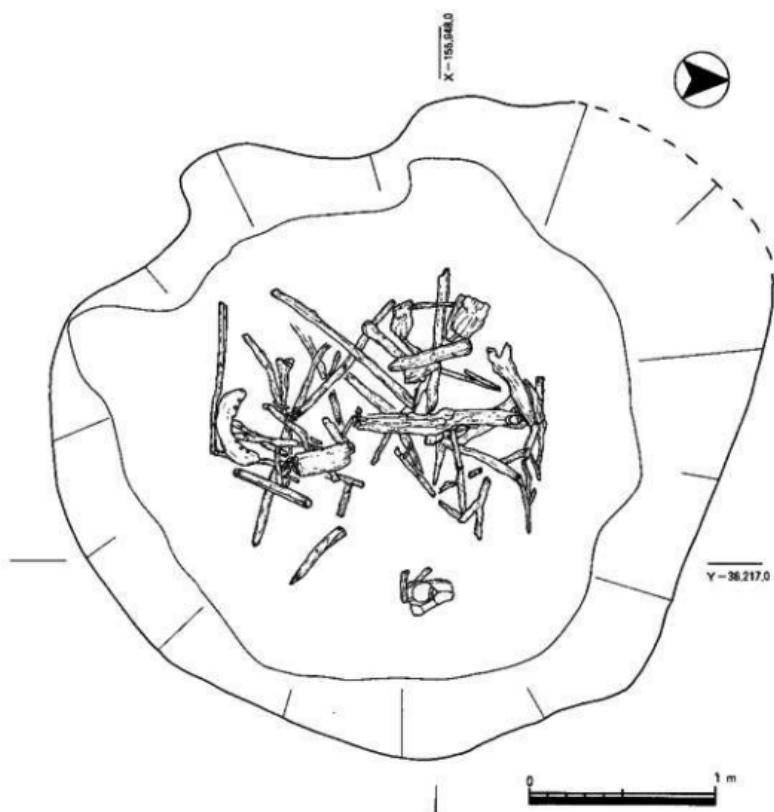
SE-4

27E地区で検出した。西側の一部がSD-37により削平されている。凹形を

呈する大型の素掘り井戸で、掘形の断面形状は逆台形でさらに中央部は0.3m程度くぼんでいる。上面径3.75m、底径1.7m前後、深さ2.15mを測る。埋土の状況をみれば、底部に粗砂および粘土を半とする上層が水平に堆積した後、掘形の断面に沿ってレンズ状に堆積しており、廃絶後の漸移的な堆積状況が窺われる。遺物は第14層および第21層から占墳時代中期に比定される遺物がコンテナ箱約1箱程度出土している。第14層の下部からは多量の自然木が錯綜した状況で出土しており、これらの自然木に混じって(76)木製轍(前輪)が出上している。第21層からは上師器壺(68・69)・壺(70)、須恵器広口壺(71)・直口壺(72~74)・甕(75)が出上している。(68)はゆるやかに外反して伸びる口縁部を有する土師器の小型甕で、体部の器肉に比して口縁部の器肉が厚い。灰白色の色調で、胎土には長石粒が散見されるが緻ね精良で焼成も良い。(69)は「く」の字に屈曲する口縁部を有する上師器の長胴甕と推定される。胎土は精良で淡褐色の色調を呈する。(70)は球形の体部から上外方に直線的に伸びる口縁部が付く土師器の壺で端部は肥厚気味に終る。完形品で口径10.6cm、器高12.4cmを測る。黄灰色の色調で焼成は良好である。胎土には石英・長石・チャート粒が散見される。(71)は須恵器の広口壺である。口縁端部直下に鋭い凸帯が1条回るほか、口部外面にやや端部が丸い凸帯が2条回る。さらに凸帯間に雜な波状文が施文されている。色調は淡青灰色で、胎土精良である。焼成はややあまい。(72・73)は体部最大径が中位上半にある扁球形の体部から、口部が上

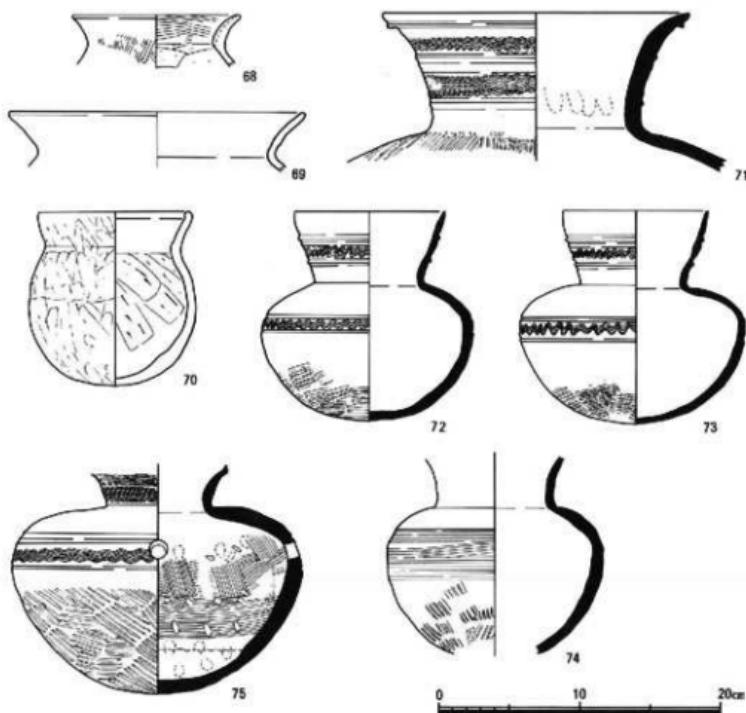


第24図 S E - 4 平断面図



第25図 SE-4 稲出土状況 (第14層下部)

外方へ直線的に伸びる須應器直口壺である。共に口縁部の一部が欠損しているが、そのほかは完存している。(72) が口径10.6cm、器高15.0cm、体部最大径15.1cm、(73) が口径10.2cm、器高15.2cm、体部最大径17.0cmを測る。共に口頸部外側の2本の凸帯間と体部中位の2本の沈線間に波状文が施されているほか、底部から体部下半にかけてタタキ調整が行われている。口頸部および底部内面と体部外面上半に自然釉・灰かぶりが認められ、焼成時には正位に置かれていたようである。淡灰色の色調で、焼成は良好である。(74) は扁球形の体部からやや外反気味に口頸部が伸びる。体部外面上位には横方向のカキ目調整が行われているが、器面は平滑でなく凹凸が目立つ。底部外面はタタキ調整である。青灰色の色調で焼成は良好である。(75)

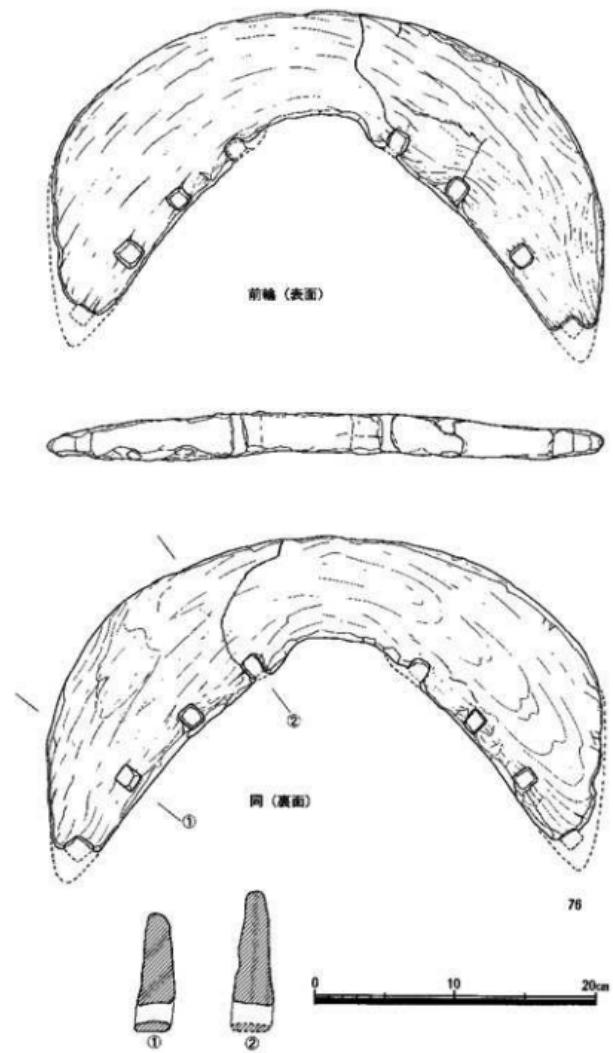


第26図 SE-4 出土遺物実測図

は大型の瓶で、口縁部を除いて完存している。肩部が大きく張る扁球形の体部を有する。体部最大径を測る位置に、平行に2本の沈線を描きその間に波状文を施している。波状文帯を切るかたちで円孔スカシ（径1.5cm）が穿たれている。出土時点では、この円孔スカシに木製の栓（径1.5cm、長さ1.5cm）が詰められていた。色調は黒灰色で、焼成は良好である。口頸部内面および体部上半に灰かぶりが認められる。なお、類例としては大阪府寝屋川市寝良郡条里遺跡（1区-井戸2）で検出されている。本調査地山土品と同時期のもので、遺構も井戸からの出土である。この資料には頸部に紐が巻かれ



写真2 木製の栓を有する瓶（75）



第27図 木製鞘実測図

ており、釣瓶の役割を果たした可能性が想定されることから、本資料も同様の機能が推定される。出土した須恵器類は(71)がやや古い様相を示すが他はTK216型式に対比できよう。

(76)は木製鞍の前輪である。現存高22cm、最大幅39cm、馬狭36.5cm(推定)、上端厚さ1.5cm、下端厚さ2.7cmを測る。鞍面はほぼ平坦に仕上げられている面と、礎から山形に向かって餘々に幅を減じる面がある。後者が表面と推定され、この面が裏面に比して木地面の調整が丁寧である。出土時点では、裏面を上にした状態で出土している。木目の方向からみて、枝分かれした部分の又木が素材として使用されている。用材は堅木と推定されるが樹種は不明である。現状では、表面から加えられた力によりほぼ中央部を境に二つ割れになっているほか、両端の爪先が欠損している。外形の形状は、平坦な山形からゆるやかに曲線を描いた後、垂下し爪先に至るもので概ね横楕形を呈している。内形は礎のはば中央部が外側に僅かに膨らみを持つもので、馬の背骨と触れる頂点は幅6.2cm、深さ1.5cmにわたってえぐられている。居木を連結する方形孔は両端の爪端部分が欠損しているが、左右4個づつを貫通させている。方形孔は一辺1.5cm前後を測るもので、ノミ状工具等により穿たれたものと推定される。方形孔が左右4個づつ存在していることから、居木は左右2対と推定される。また、裏面を除く各部分に黒漆の痕跡が認められる。

出土した鞍は前述のごとくTK216型式段階に比定され、木製鞍としては最古級のもので、我が国における初期段階の馬具の様相や馬の飼養集団を推定するうえで、示唆に富む資料を提供している。

古代の木製鞍橋については、山田良三氏が『古代の木製鞍橋』の中で、変遷や形態を詳細に論じられている。鞍橋の形態分類に付いては、24遺跡の31例の出土例から、2種類(第Ⅰ類・第Ⅱ類)に区別されている。それによれば、第Ⅰ類は、馬膺と鞍橋の縁の間が広く、全体的に横幅が広く、両端が丸味を帯びて、横幅に対して高さが低いもの。第Ⅱ類は、鞍橋の雉子股が外開きになり、横幅に対して高さの比率が高いものに区別されている。ここでは、これらの分類を踏襲したうえで、さらに鞍橋と居木との連結部分の形状や方形孔の配置・数量等の特長から、古墳時代中期から後期の資料が出土した19遺跡の25例で、形態が明瞭な資料を中心に細分を試みたい。

第Ⅰ類

A:型 鞍橋の内側の輪郭に沿って、等間隔に貫通する方形孔が左右に4~5孔穿たれている。八尾南遺跡、吉武遺跡、下田遺跡。

A:型 方形孔が上下2段に4孔づつ左右に穿たれている。讃良郡条里遺跡。

A:型 鞍橋の内側の輪郭に沿って、等間隔に貫通する長方形の孔が左右2孔づつ穿たれている。二之宮宮下東遺跡。

- B型 鞍橋の内側から穿たれた方形孔が、逆L字状に曲り下端部にぬけるもの。石木遺跡、谷遺跡。やや形態を異にするが長柄遺跡出土例もこの型式に分類されよう。
- C型 鞍橋の内側に台形状の突起部を有し、居木に連結する方形孔を穿つもの。百舌鳥城南遺跡の2例・神宮寺遺跡。

第II類

- A型 第II類の特長に更に、馬膚と接する磯部分の左右4ヶ所に蟻巣ぎのための欠き取りとそれに付随する形で左右4個の方形孔があるもの。西河原森ノ内遺跡(19-1)・山西遺跡。
- B型 居木と結着する部位が設置されていないもの。これについては、未完成の可能性が高い。下川津遺跡・山崎遺跡2例・古野ヶ里遺跡2例。

さて、各型式の鞍橋と居木と連結方法については、両輪の設置角度や鞍橋全体の姿勢を保う上で重要であるが、居木そのものが出土した例が無く不明な点が多い。ただ、第I類C型に分類した百舌鳥陵南遺跡出土例については、神谷正弘氏により鞍橋の復元が試みられている。^{註2}それによれば、鞍橋の内側に突出した部分の下部に居木先を盈き、突出部分に穿たれた方形孔に皮紐を通して結着する方法が推定されている。従って、この型式のものについては、居木先が鞍橋に隠れる構造になっている。第I類B型に分類したものについては、表面から方形孔が見えない工夫が成されているもので、居木との結着法については、居木先の木口の上角を段状に加工し、その上に鞍橋を置き、鞍橋と居木先の両方に穿たれたL字状の孔を通じて両者を皮紐等で縛ったものと推定される。この場合においては、居木先が表面から見えることになり、居木の木口が両輪に隠れる第I類C型とは構造を異にしている。一方、第I類A₁型・第I類A₂型とした2型式は、居木孔が貫通するもので、外面からみて方形孔が見える点で他型式とは区別される。この型式の鞍橋と居木との連結方法については、柄をもって切り組む方法も考えられるが、八尾南遺跡および古武遺跡の両例ともに、方形孔の下部から磯端までが5mm前後と薄く強度的に問題があるほか、八尾南遺跡出土例では方形孔の内部にも黒漆が喰布されている点から見てもこの方法は首肯し難い。これら型式のものについては、おそらく居木先の木口の上角を鞍橋の底面幅に合わせて段状に加工し、その部分に鞍橋を置き、鞍橋と居木とを貫通する方形孔を通じて結着したものと推定されるが、細部においては不明な点が多い。なお、第I類について一部、金銅装の鞍橋に影響されたと推定されるものが含まれており、第I類B型とした鞍橋の結着法や第I類B型の谷遺跡・長柄遺跡例、第I類C型の神宮寺遺跡例に見られる磯金具を表現した線刻の存在等がそれらを物語っている。

第II類A型式のものについては、馬膚に左右4個の欠き取りがあることから、4本居木と考えられる。これらの結着法は欠き取り部分と、居木先を蟻巣ぎにより組み更に、欠き取りに付

隨する方形孔に皮紐を通して結束したものと考えられ、居木先は突出するものと推定される。

以上、第Ⅰ・第Ⅱ類に分類した7型式のうち、本製品である第Ⅱ類B型を除く6型式について鞍橋と居木との結合法を推定してみた。なお、各型式の帰属時期を共伴遺物から推定すれば、第Ⅰ類A₁型・第Ⅰ類A₂型が5世紀中頃、第Ⅰ類A₃型が6世紀中～後期、第Ⅰ類B型が5世紀後半から6世紀前半、第Ⅰ類C型が5世紀後半、第Ⅱ類A型が6世紀末から7世紀初頭には成立していたものと推定される。

註

- 註1 山川以三 1994「古墳時代の木製鞍」『櫛原考古学研究所論集 第十二』吉川弘文館
- 註2 神谷正弘 1987「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元」『考古学雑誌』第72巻 第3号 日本考古学会
- ・木製鞍山七文献（第3表木製鞍出土一覧表の番号と符合している）
 - 1. 本書掲載
 - 2. 福岡市教育委員会1985調査
 - 3. 西口陽一 1991「讃良群条里遺跡発掘調査概要・II」大阪府教育委員会
 - 4. 長野県埋蔵文化財センター 1993「長野県埋蔵文化財センター 年報9」 資料提供に際しては、長野県文化財センターの臼田直之・賀田 明両氏にご協力を受けた。
 - 5. 埼市教育委員会 1974「陵南遺跡現地説明会要旨」
 - 6. 松本洋明 1985「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査報告1984年度』櫛原考古学研究所
 - 7. 丸山雄二 1993「神宮寺遺跡の調査」『滋賀考古第9号』滋賀考古学研究会
資料提供に際しては、長浜市教育委員会の森口訓男氏にご協力を受けた。
 - 8. 群馬県新田郡新田町教育委員会1990調査
 - 9. 未報告 資料提供に際しては、御所市教育委員会の藤田和尊氏にご協力を受けた。
 - 10. 佐賀県教育委員会 1976「石木遺跡調査報告」『佐賀県文化財調査報告 第35集』
 - 11. 佐賀県教育委員会 1994「古野ヶ里本文編」吉川弘文館
 - 12. 辻本和美・竹原一彦 1987「石木遺跡」『京都府遺跡調査報告書 第8回』御京都府埋蔵文化財調査研究センター
 - 13. 未報告 資料提供に際しては、輪群馬県埋蔵文化財調査事業団の関晴彦氏にご協力を受けた。
 - 14. 西村尋文ほか 1990「下川井遺跡」『漸戸大橋に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』香川県教育委員会・御香川県埋蔵文化財調査センター
 - 15. 片山 洋ほか 1988「山西遺跡」豊川市教育委員会
資料提供に際しては、豊川市教育委員会の前田清彦・林 弘之両氏にご協力を受けた。
 - 16. 浜松市教育委員会 1978「伊場遺跡 遺物編1」『伊場遺跡発掘調査報告書第3番』
 - 17. 田原町教育委員会 1993「山崎遺跡」田原町埋蔵文化財調査報告書 第6集
 - 18. 福井県教育厅 1978「北陸自動車道関係遺跡調査報告書 第十五集」 資料提供に際しては、仁科章（福井県立博物館）・赤澤徳明（福井県立朝倉氏遺跡資料館）の両氏にご協力を受けた。
 - 19-1・2 德網克己・山田謙吾 1987「内河原森ノ内遺跡 第1・2次発掘調査概要」中主町文化財調査報告書第9集 中主町教育委員会・中主町埋蔵文化財調査会
 - 19-3・4 中主町教育委員会1989年調査
資料提供に際しては、中主町教育委員会の山田謙吾氏にご協力を受けた。

第3表 木製出土一覧表

表()は推定値

番号	遺跡名	所在地	出土遺物	編目	的 壊	的 壊	數 量 (m)			起 木 孔 敷	縦 深	見 面○ 存無	備 考	型式	
							高さ	横幅	上端						
1	八幡南 大阪府八尾市	井戸	薪箱	5 C 中	22.1	39 (36.5)	1.5	2.1	左右4個	正面樹	有	14.1形	—	I-A1	
2	古武 河内 淀川某所付	河川	薪箱	5 C 中	(21.2)	(40) (37.6)	0.5	2	左右5個	背面	無	14.1形	—	I-A1	
3	淀川某所付	河川	薪箱	5 C 後?	(18.5)	(38.5)	32	1.5	左右4個	—	無	14.1形	—	I-A3	
4	橋田 長野县长野市	河川	薪箱	5 C 中	22.7 (47.3)	(33)	2.7	9.1	ナシ	未発見	兩面に台形切妻	木製舟檻	—	I-C	
5-1	百合繩滑 大阪府岸和田市	河川	薪箱	5 C 後	23	36.3	36	1	左右4個、床2個	正面樹	有	台形切妻	—	I-C	
5-2	"	薪箱	5 C 後	5 C 後	21	41.6	39	0.9	左右4個、床2個	背面	有	台形切妻	木製舟檻	—	I-C
6	谷	奈良県御所町	河川	薪箱	5 C 後	(11.5)	(46.5)	—	1.2	4.5 左右3個、床1個	有	万葉記か字形、背面に鍍金具装した底面	木製舟檻	—	I-B
7	神宮寺 奈良県御所町	河川	薪箱	5 C 後	(19)	(39)	—	0.5	2 2個連柱	背面樹	有	半円火拂、台形状突起、外には鍍金具装した底面	木製舟檻	—	I-C
8	下田	奈良県御所町	河川	薪箱	5 C 後	—	—	—	—	2個連柱	無	半圓火拂	木製舟檻	—	I-A1
9	長所 奈良県御所町	河川	薪箱	6 C 後	(20)	—	—	2.2	左右4個、床2個	背面	有	台形孔外側に小帶	—	I-B	
10	石本 佐賀県三日月町	河川	薪箱	6 C 前	20.5	38.5	38.5	1.4	6.7 左右3個	背面?	有	14.1形 完形 方形孔少し字状	木製舟檻	—	I-B
11-1	古海ヶ原 佐賀県神埼町	土坑	薪箱	6 C	26.5	35.3	30	5	5.5 ナシ	—	無	未発見品	—	I-B	
11-2	"	土坑	薪箱	6 C	31	51.6	32.5	4.6	6.6 ナシ	—	無	半圓火拂	—	I-B	
12	石本 京都府福知山市	大溝	薪箱?	5 C 中	(20)	(38)	—	1.5	2.5 不明	—	無	半圓火拂	—	—	
13	二之宮下塚 群馬県邑楽郡	谷	薪箱	6 C	(22.5)	(45.5)	(42)	1	左右2個 (長方形)	—	無	半圓火拂	—	I-A3	
14	下川津 香川県高松市	河川	薪箱	6 C 後~7 C 前	23.3	40.3	36	1	3.6 ナシ	—	有	台形孔外側に小突起	木製舟檻	II-B	
15	山西 愛媛県川辺市	河川	薪箱	6 C 前~7 C 后	20	(30)	(27)	—	2.5 左右2個、欠き取り左右2個	ナシ	有	15.5直角	木製舟檻	II-B	
16	伊浦 静岡県浜松市	河川	薪箱	6 C 前~7 C 前	—	—	—	1.8	左右2個、欠き取り左右2個	正面樹	無	半圓火拂	木製舟檻	II-A	
17-1	山崎 愛媛県西条市	河川	薪箱	7 C	18.7	—	—	1.5	3 欠き取り左右2個	クリ	無	半圓火拂	木製舟檻	II-B	
17-2	"	薪箱	7 C	19.1	37.2	33	2	3.8 欠き取り左右2個	クリ	正	14.1形	木製舟檻	II-B		
18	伊東北 静岡県伊東市	河川	薪箱	7 C	(28)	(49)	(36)	1.9	1 ナシ	斜面樹	無	半圓火拂	木製舟檻	II-B	
19-1	内河頭 奈良県御所町	匂合箱	薪箱	7 C 後~8 C 前	21.5	44.3	42.7	2	3.1 左右2個、欠き取り左右2個	ヤマガタ	無	14.1形	—	I-A	
19-2	"	匂合箱	薪箱	7 C 後~8 C 前	20.3	—	(41)	3	3.2 左右2個、欠き取り左右2個	—	無	半圓火拂	—	I-A	
19-3	"	匂合箱	薪箱?	7 C 後~8 C 前	—	—	—	2	2.5 不明	—	無	半圓火拂	木製舟檻	II-A	
19-4	"	匂合箱	薪箱?	7 C 後~8 C 前	—	—	—	1.3	2.1 不明	—	無	半圓火拂	木製舟檻	II-A	

土坑 (SK-9~SK-39)**SK-9**

30J地区で検出した。南部および東部が調査外のため全容は不明である。検出部で東西幅1.25mを測る。深さは0.1m前後で、坑底は凹凸が著しい。埋土は細砂ないしは砂質土を主とする3層から成る。遺物は土師器の小片が極少量出土している。

SK-10

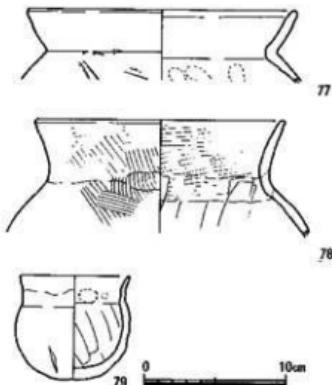
30I地区で検出した。南部および西部が調査区外のため全容は不明である。検出部で東西幅1.25m、深さ0.15mを測る。埋土は砂質土を主とする3層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される上師器壺(77)、製塙土器等の小片が少量出土している。(77)は口縁部が%程度残存するやや大型の壺である。口縁端部内面が強いヨコナデにより段状を呈している。灰白色の色調で、胎土には大粒の石英・長石粒が散見される。

SK-11

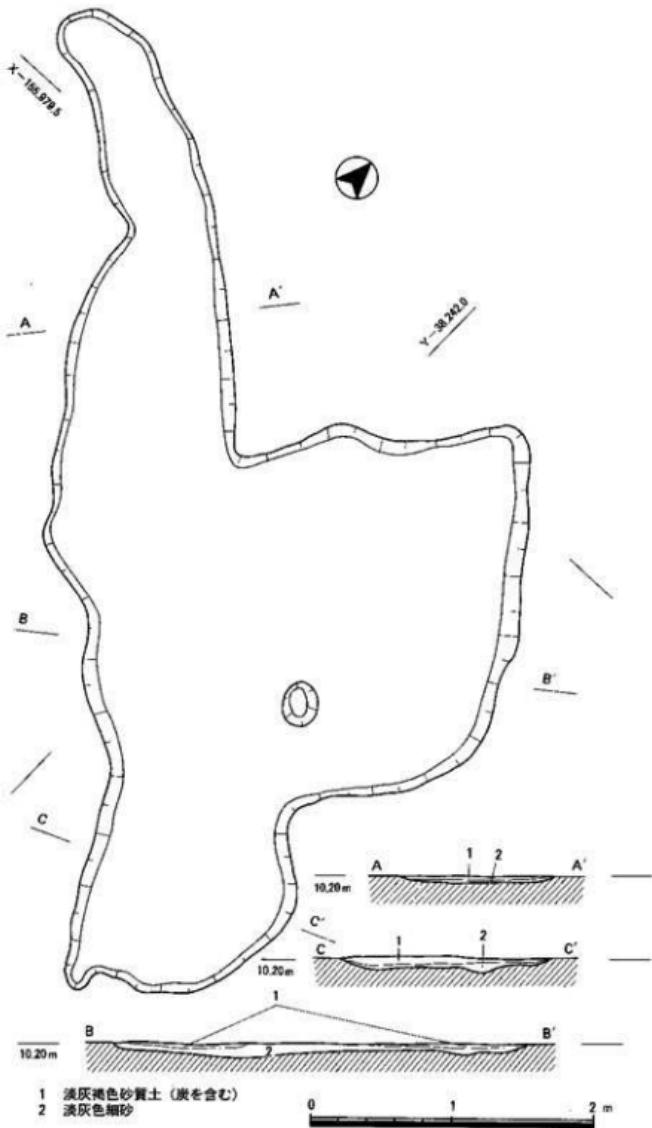
30H・30I地区で検出した。不定形を呈し、東西幅7.0m、南北幅2.8m、深さ0.05~0.1mを測る。壺形の断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は2層から成り、上層には炭が含まれている。遺物は古墳時代中期に比定される土師器長胴壺(78)、須恵器壺・杯身、製塙土器等の小片が少量出土している。(78)は口縁部が%程度残存する大型の長胴壺である。器面調整は、外面口縁部および体部上半と口縁部内面が粗いハケナデ、内面体部がヘラケズリである。淡灰褐色の色調で、胎土にはやや大粒の石英・長石・チャート粒が多量に含まれている。

SK-12

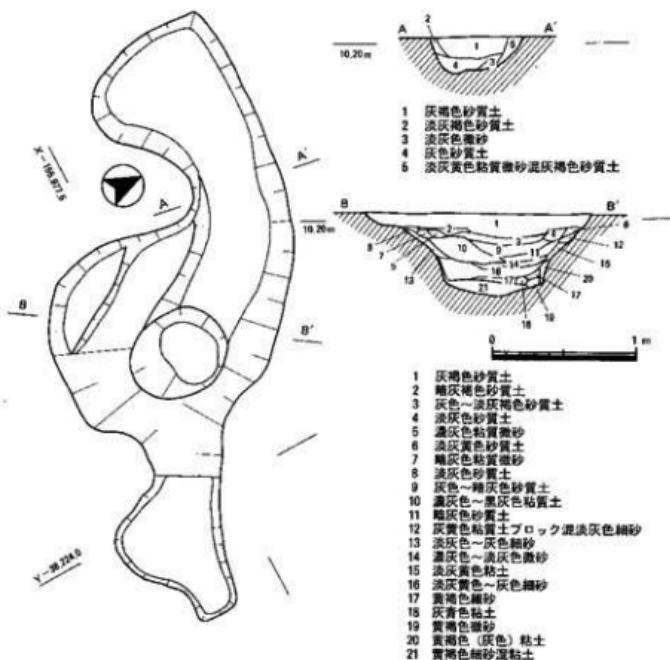
28H地区で検出した。不定形を呈するもので、中央部付近に深く落ち込む部分があり、井戸であった可能性がある。東西幅4.2m、南北幅0.45~1.6m、深さ0.24~0.58mを測る。壺形の断面形状は中央部付近が逆台形であるが、他は半円形を呈する。中央部付近の埋土は21層に分層され、漸移的な堆積状況が推定される。遺物は古墳時代中期に比定される土師器小型壺(79)の他、須恵器壺等の小片が少量出土している。(79)は完形の小型壺で口径7.6cm、器高7.4cmを測る。半球形の体部からほぼ直上に口縁部が伸びるもので、成形は手づくねで全体に難である。色調は灰白色で胎土には長石粒が散見される。



第28図 SK-10 (77)、SK-11 (78)、SK-12 (79) 出土遺物実測図



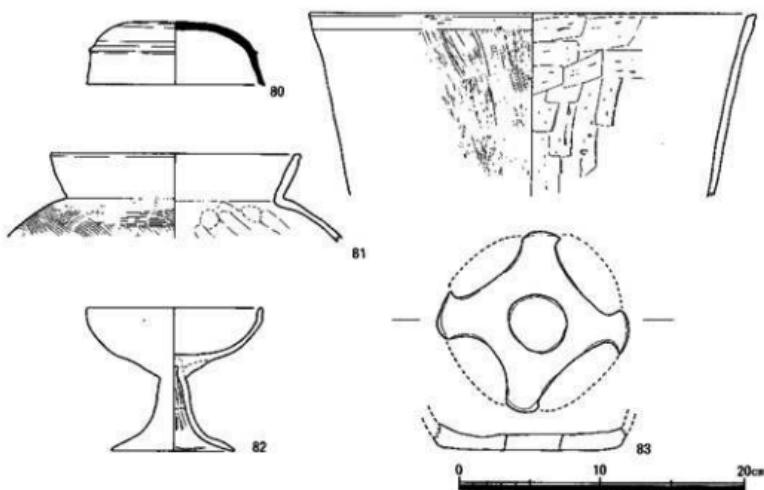
第29図 SK-11平面図



第30図 SK-12平面断面図

SK-13

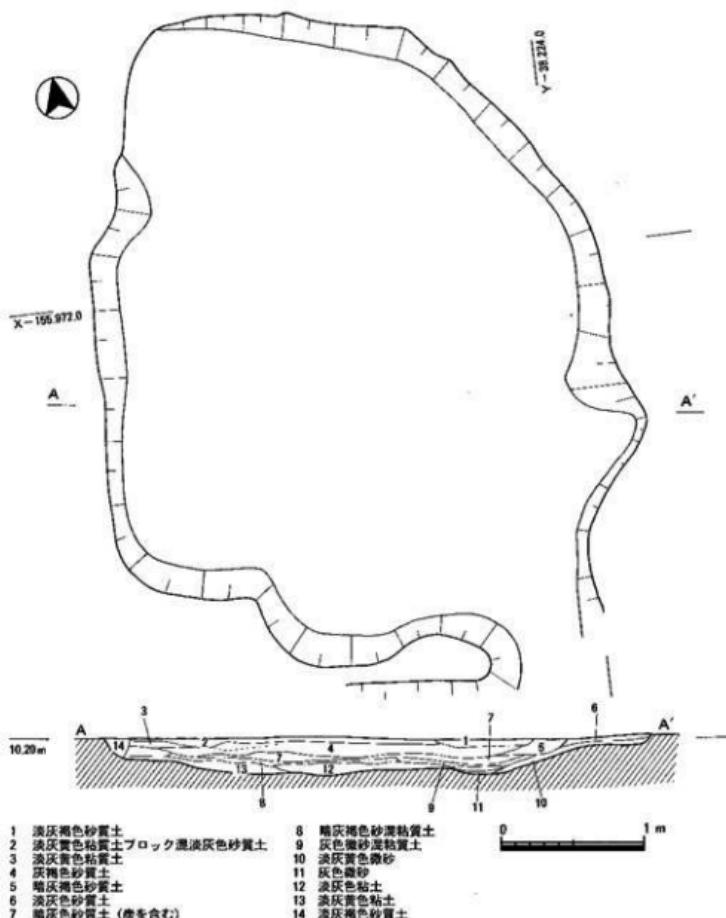
28II地区で検出した。南北方向に長い溝状を呈するもので、東西幅0.9~2.4m、南北幅3.8m、深さ0.37mを測る。埋土は砂質土を主体とする4層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器壺(81)・高杯(82)・瓶(83)、須恵器壺・杯蓋(80)等が出土した。(80)は須恵器杯蓋で1/2が遺存している。天井部は偏平で稜は鋭く口縁部が外下方に下がるもので、口縁端部は段を有し内傾している。灰白色の色調で焼成は良好である。天井部全体に灰かぶりが認められる。TK216型式に対比できよう。(81)は土師器壺である。色調は淡褐色で胎土には石英・長石粒が多量に含まれている。(82)は楕形の杯部に小さく開く脚部が付く。調整は全体をナデにより仕上げている。色調は赤褐色で胎土は精良である。(83)は体部から口縁部にかけて上外方へ直線的に伸びる。平坦な底部には、中央部が円形でその周辺に梢円形を4個配する蒸気孔が設けられている。淡灰~淡褐色の色調で焼成は良好である。胎土には長石粒が多量に含まれている。



第31図 SK-13出土遺物実測図

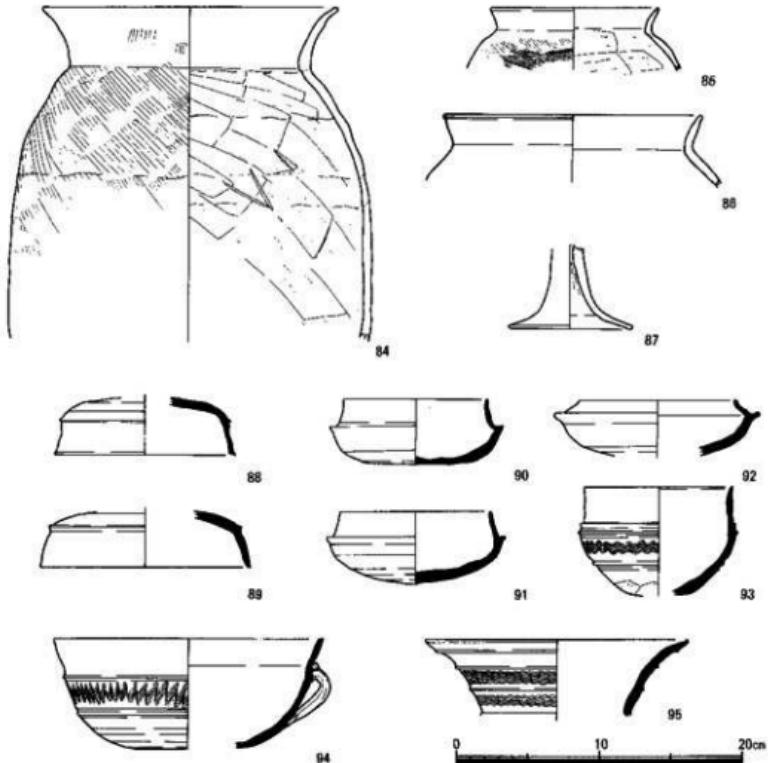
SK-14

28号地区で検出した。SK-13の東側に位置するもので、南北方向に長い不整の楕円形を呈するもので、東部中央に小穴を有する。東西径3.8m、南北径4.62m、深さ0.27mを測る。坑底に凹凸が認められるものの、掘形の断面形状はほぼ皿状を呈する。埋土は14層に分層され、下部の第12層・第13層が粘土層、第2層にブロックを含む不均質の土層がある以外は砂質を主とする土層が堆積している。遺物は古墳時代中期に比定される土師器壺(84~86)・高杯(87)、須恵器広口壺(95)・壺・杯身(90・91)・杯蓋(88・89)・有蓋高杯(92)・無蓋高杯(94)・把手付き碗(93)等が出土した。(84)は長胴の体部に外反して伸びる口縁部が付く長胴壺である。体部外面は左上がりのハケナデ、内面はヘラケズリ調整が行われている。赤褐色～黒灰色の色調で、焼成は良好である。胎土には石英・長石粒が多量に含まれている。(85)は球形の体部にやや小型の口縁部が付く。赤褐色の色調で胎土は精良である。(86)は「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので、口縁端部は外側にわざかに肥厚して終る。灰白色の色調で、胎土には石英・長石・チャート粒が含まれている。(87)は上師器高杯の脚部である。(88・89)は共に須恵器杯蓋で全体の1/6程度が遺存している。天井部は平で縁は鋭く口縁部は下外方に下る。口縁端部は(88)が小さな段、(89)が平坦な面を有する。(88)の天井部には灰かぶりが認められる。(90・91)は須恵器杯身で(90)がほぼ完形、(91)が1/2遺存している。共に受部は水平方向に伸びるもので、端部は(90)が鋭く、(91)が丸い。立ち上がりは内傾しており、



第32図 SK-14断面図

端部は(90)が平坦(91)が細く丸い。体部は(90)が $\frac{1}{2}$ 程度、(91)が $\frac{1}{3}$ 程度を逆時計回りにヘラケズリで調整している。(92)は有蓋高杯の杯部である。ほぼ水平方向に伸びる受部から、強く内傾して伸びる立ち上がりが付くもので、端部付近で小さく外反し端部は丸味を持って終る。(94)は無蓋高杯で $\frac{1}{4}$ 程度が遺存している。杯部外面には2条の凸帯間に6本で1条の波状文が施文されている。把手の上部には径5mmの粘土瓦を貼り付け装飾性を高めている。

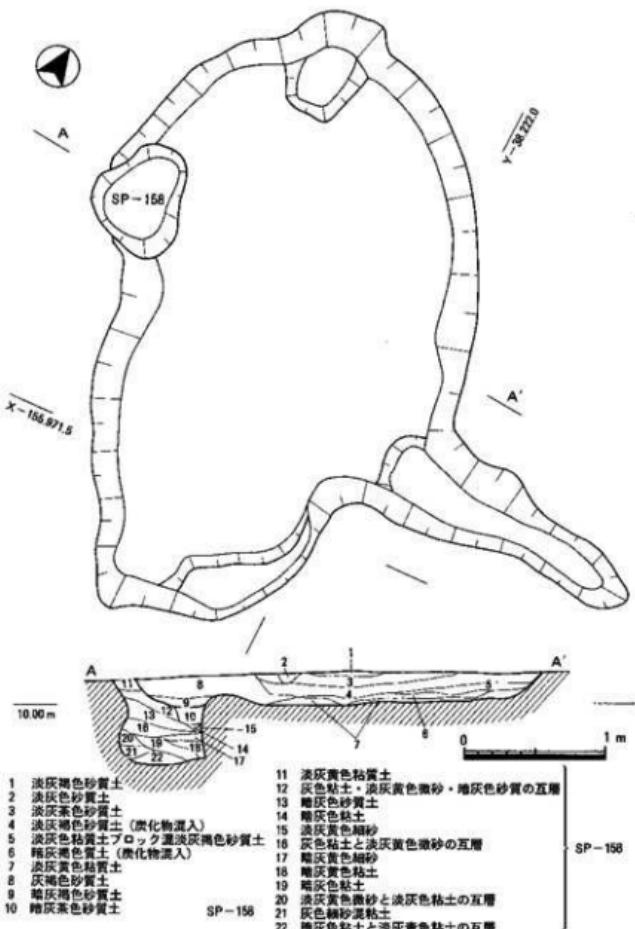


第33図 SK-14出土遺物実測図

(93) は把手付き瓶で $\frac{1}{2}$ 程度が遺存している。体部上半に2条、下半に1条の凸帯を設けた間に波状文が施文されている。底部は静止ヘラケズリで調整している。(95) は広口壺の口頭部である。口縁部下半に1条と口頭部外面に2条の凸帯を有し、口頭部の凸帯間に波状文が施文されている。黒灰色の色調で内面は全面に灰かぶりが認められる。須恵器類の中心はTK-216型式に対比できる。

SK-15

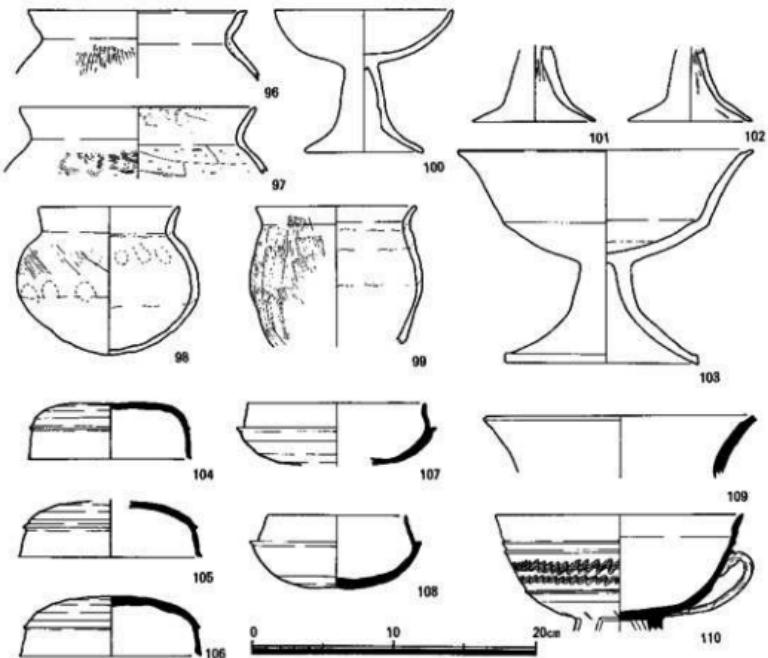
28G・H地区で検出した。SK-14の北西側に位置する。南北方向に長い梢円形を呈するもので、南東部に東西方向に伸びる溝状部分が付くほか、西部ではSP-182を切っている。東西幅3.0m、南北幅4.55m、深さ0.23mを測る。掘形の断面形状は皿状で、坑底はほぼ水平である。埋土は9層に分層され、堆積状況からみて、西部付近の堆積が進んだ後、東部におよんだ



第34図 SK-15 平断面図

ようである。第6層・第4層には炭化物が多量に混入されており、第5層は淡灰色粘質土のブロックを含む不均質の十層である。遺物は主に溝状を呈する部分付近から古墳時代中期に比定される上師器壺(98)・甕(96・97・99)・高杯(100~103)、須恵器壺(109)・杯身(107・108)・杯蓋(104~106)・無蓋高杯(110)等の完形を含んだ遺物が出土している。(98)は中型の土師器壺で、口径9.8cm、器高10.7cmを測る。体部外面にハケナデが認められるが、全体

に風化が著しく調整は不明瞭である。赤褐色の色調で胎土には石英・長石・チャート粒が多量に含まれている。(96・97・99)は土師器甕で(96・97)が大型、(99)は小型品である。(96)の体部外面には平行タキが施されており、韓式系土器と推定される。土師器高杯(100~102)は楕円形の杯部を有するもので、いずれも赤褐色系の色調を呈する。(103)は大型の高杯でほぼ完存している。口径20.8cm、器高15.2cm、杯部高8.1cm、裾部径13.8cmを測る。形態的には縦内彌生V様式の高杯に類似するが、本例は杯部が大きく拡張するもので、須恵器出現段階に盛行するものである。赤褐色の色調で焼成は良好である。胎土には石英・長石粒が多量に含まれている。(104~106)は須恵器杯蓋で、(104・106)は完形である。(104)は口径11.4cm、器高4.0cmを測る。天井部内面の約半分にわたって黒漆が薄く付着していることから、漆を塗布する際に使用された容器と考えられる。(105・106)は天井部が丸味を持つもので、稜は鋭く口縁部は下外方に下る。(106)は口径12.6cm、器高4.2cmを測る。天井部から口縁部にかけて灰かぶり、自然釉が認められる。(107~108)は須恵器杯身で(107)が1%、(108)が1%程度遺存して



第35図 S K-15出土遺物実測図

いる。共に受部は水平方向に伸びるもので、立ち上がりは内傾して伸び端部は丸い。体部外面には(107)が%、(108)が%にわたってヘラケズリ調整が行われている。色調は(107)が青白色、(108)が暗青灰色を呈している。(109)は須恵器壺で口縁部の%程度が遺存している。灰白色の色調を呈する。(110)は無蓋高杯で脚部が欠損している。脚部のスカシ孔は三方である。杯部下半に脚部のスカシ孔を切り抜いた際に付いた工具痕が線状に残る。

SK-16

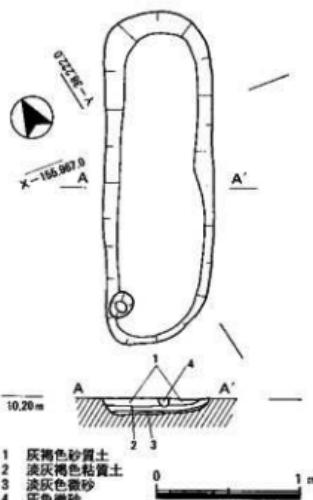
28G地区で検出した。南端部がSK-15と接している。南西方向から北東方向に長い椭円形を呈するもので、長径2.38m、短径0.76m、深さ0.1mを測る。掘形の断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は4層で、第4層以下は水平堆積である。遺物は弥生時代後期に比定される甕(111)等が出上している。(111)は口径10.8cm、器高12.9cmを測る小型の甕である。口縁部はタタキ出し技法によるものである。色調は灰白色で焼成は良好で、胎土には石英・長石粒が多く含まれている。

SK-17

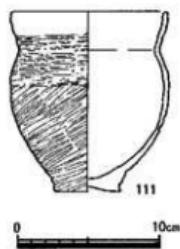
28G地区で検出した。東西方向に長い椭円形を呈するもので、西端はSD-27に切られている。東西径1.4m、南北径0.7m、深さ0.07mを測る。埋土は3層である。遺物は出土しなかった。

SK-18

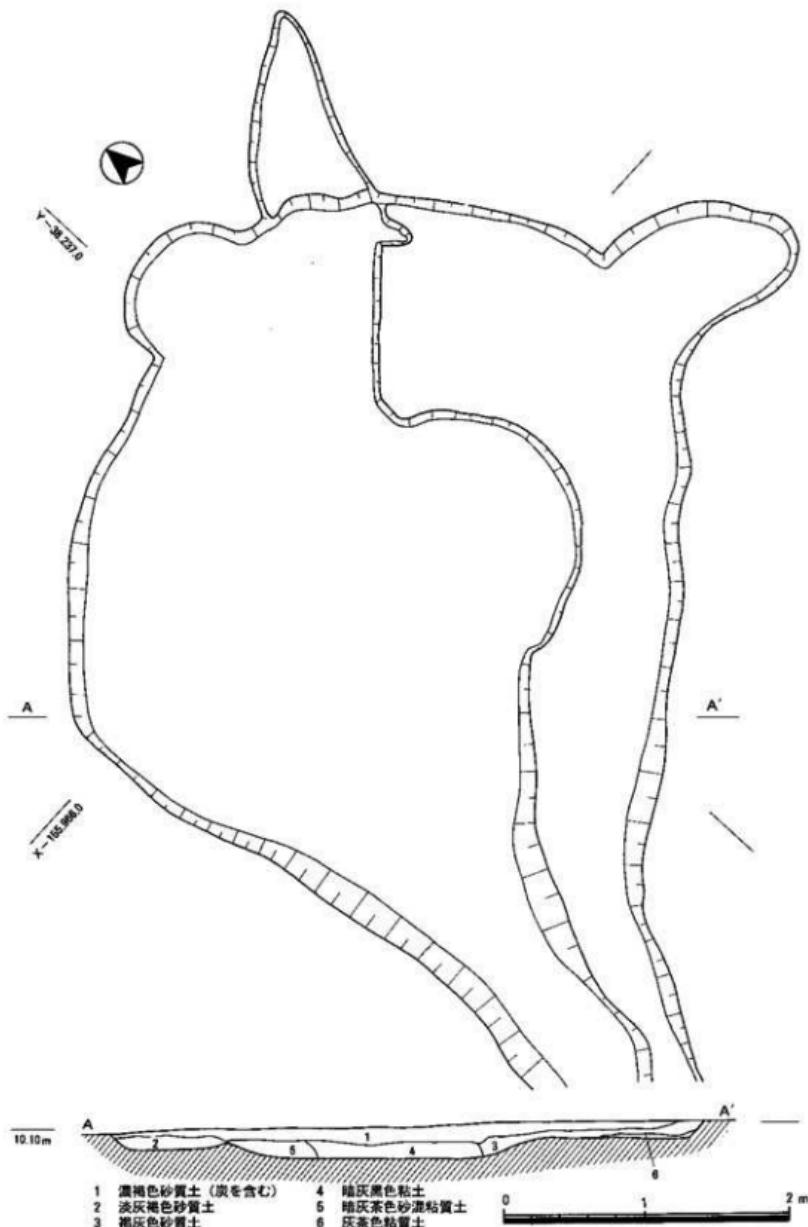
29G地区で検出した。不整の隅丸方形を呈するもので、西部でSK-19を切っており、南部ではSD-31に合流している。最大幅4.15m、深さ0.22mを測る。坑底は東部付近がやや高くテラス状を呈している。埋土は6層から成り、中央部の最下層は粘土層が堆積している。遺物は古墳時代中期に比定される土師器直口壺(112)・甕(113~115)・高杯(116~118)・鉢



第36図 SK-16平面断面図



第37図 SK-16出土遺物実測図



第38図 SK-18平面図

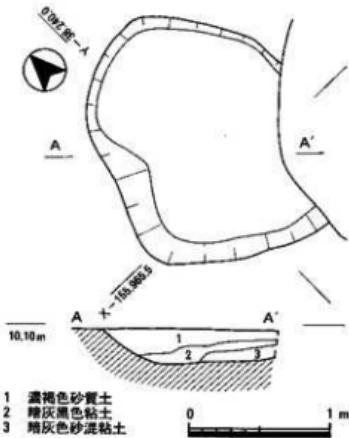
(121)・瓶(119・120)、須恵器杯蓋(122・123)・甌(124)・把手付き椀(125)が出土している。(112)は小型の直口甌である。色調は淡褐色で、胎土はやや粗く石英・長石粒が多量に含まれている。(113・114)は中型甌、(115)は大型の長胴甌である。いずれも風化が顕著で調整は不明である。(116・117)は楕円形の杯部を有する小型高杯、(118)は大型高杯で脚部のみの資料である。(120)は角状の把手が付く瓶で、把手にはヘラによる深い切り込みがある。(121)は平底の底部を有する中型の鉢で、口径20.4cm、器高12.6cm、底径7.2cmを測る。体部外面はハケナデ調整が行われている。体部内面および体部外面上位に炭化物が付着している。赤褐色～黒灰色の色調で、胎土には大粒の長石粒が散見される。(122・123)は須恵器杯蓋で、(122)の稜は鋭く、(123)は明瞭な稜を持たない。(124)は扁球形の体部を有する甌で体部は完存している。体部上半に灰かぶり下部に火たすきが認められる。(125)は小型の把手付き椀で口径8.0cm、器高5.5cm、底径4.0cmを測る。体部下部は静止ヘラケズリによる調整が行われている。

SK-19

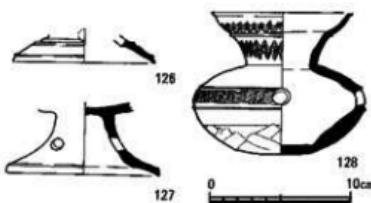
29G・30G地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、東部はSK-18に切られている。最大幅1.75m、深さ0.25mを測る。埋土は3層である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甌、須恵器高杯(126・127)・甌(128)が出土している。(127)は脚部が完存しておりスカシ孔が3個穿たれている。(128)は扁球形の体部にラッパ状に開く口頭部が付く甌で、口頭部の一部を欠くが、その他は完存している。口径10.1cm、器高10.2cm、体部最大径12.3cmを測る。口頭部外面および体部中位に波状文が施文されている。円孔スカシは体部中位に穿たれており、径1.3cmを測る。口頭部内面と体部上半に灰かぶりが認められるほか、底部には焼成時に植物が敷かれたため生じたものと考えられる条線状の火縄が認められる。

SK-20

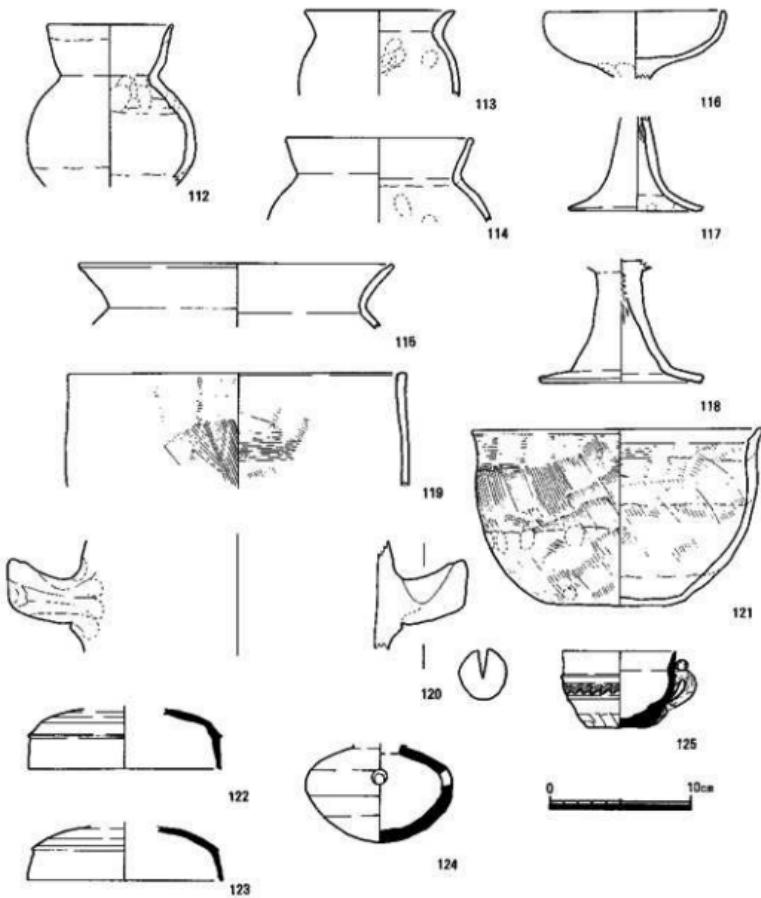
30G地区で検出した。不定形を呈し、北部



第39図 SK-19平面図



第40図 SK-19出土遺物実測図

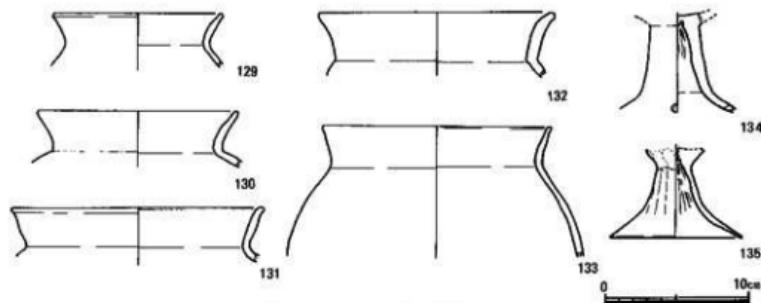


第41図 SK-18出土遺物実測図

から南北方向に溝が2m程度伸びてSD-40に合流している。東西幅1.95m、南北幅1.3m、深さ0.18mを測る。埋土は2層から成る。遺物は占墳時代中期に比定される土師器高杯、須恵器杯蓋の小片が極少量出土している。

SK-21

28B地区で検出した。SB-7の北側に位置する。不整の方形を示すもので、SD-37に東部を切られ、SD-39が派生している。坑底はほぼ水平である。東西幅6.0m、南北幅5.28m、深さ0.15mを測る。埋土は砂混じり粘質土を主とする4層から成る。遺物は占墳時代中期



第42図 SK-21出土遺物実測図

に比定される土師器甕（129～133）・高杯（134・135）、須恵器高杯等が出土したがいずれも小片で量は少ない。

SK-22

27E・F地区で検出した。不定形を呈する。東西最大幅4.6m、南北幅4.6m、深さ0.07mを測る。埋土は砂質土を主とする2層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕、須恵器杯蓋等の小片が極少量出土している。

SK-23

27E地区で検出した。SK-22の北に位置する。東西方向に長い梢円形を呈するもので、長径1.8m、短径0.68m、深さ0.18mを測る。埋土は砂質土を主とする3層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕の小片が極少量出土している。

SK-24

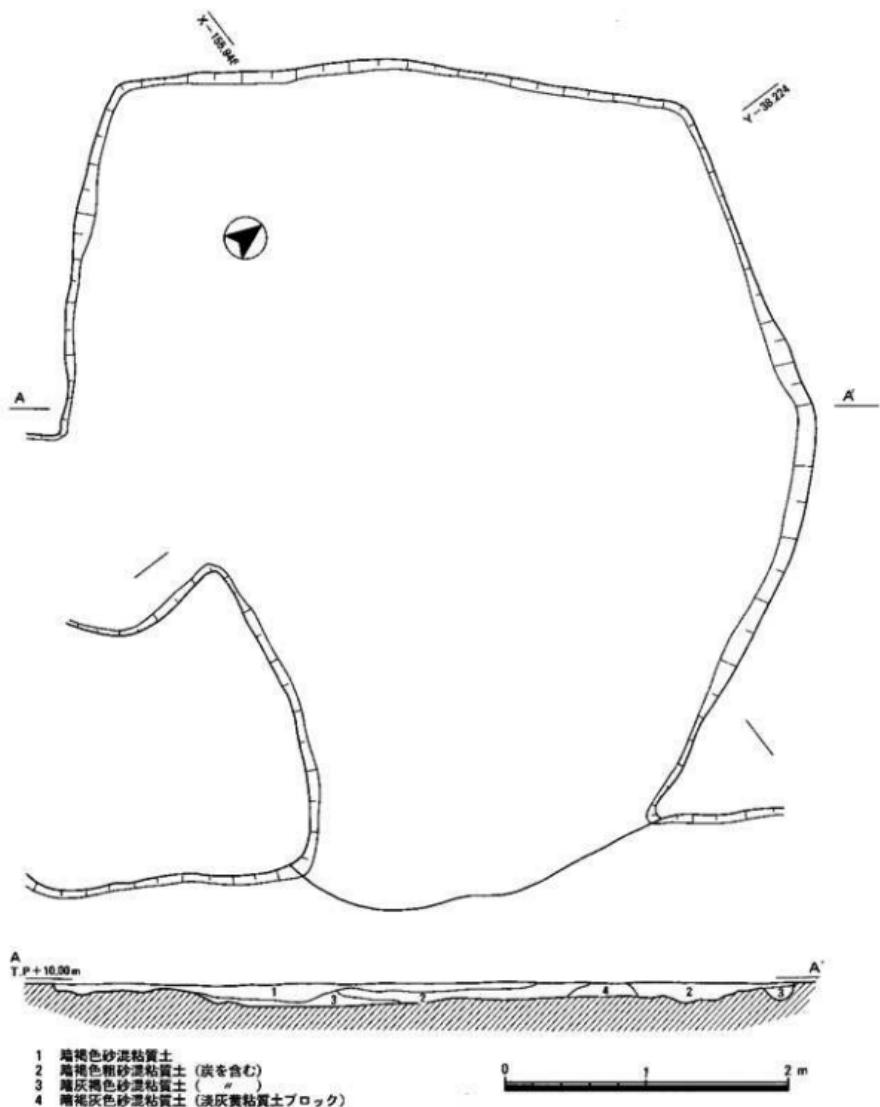
26G地区で検出した。東部が調査区外のため全容は不明である。検出部で東西幅1.18m、南北幅1.54m、深さ0.18mを測る。埋土は4層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕・高杯（136）、須恵器高杯の小片が少量出土している。

SK-25

25G地区で検出した東部が調査区外のため全容は不明である。検出部の東西幅1.98m、深さ0.25mを測る。埋土は5層から成る。遺物は弥生時代後期に比定される甕の小片が極少量出土している。

SK-26

26F・G地区で検出した。SD-50およびSP-267を切っている。南北方向に長い梢円形を呈し、長径1.92m、短径1.35m、深さ0.44mを測る。掘形の断面の形状は逆円錐状を呈する。埋土は6層に分層される。遺物は古墳時代中期に比定される甕の小片が極少量出土している。



第43図 SK-21平面図

SK-27

25E地区で検出した。検出した位置は方形周溝墓の墳丘部にある。楕円形を呈し、長径1.68m、短径0.68m、深さ0.08mを測る。掘形の断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は2層である。遺物は土器片が極少量出土したが、時期は明確でない。

SK-28

SK-27の南側で検出した。南北方向に長い楕円形を呈し長径1.32m、短径0.7m、深さ0.1mを測る。掘形の断面形状は浅い皿状である。埋土は砂質を主体とする2層から成る。遺物は弥生時代後期に比定される甕の小片が極少量出土している。

SK-29

SK-28の南で検出した。弧状を呈しており、幅0.35~0.78m、深さ0.08~0.13mを測る。埋土は北部では2層に分層されるが南部では単一層となっている。遺物は土器の小片が極少量出土したのみで時期は明確でない。

SK-30

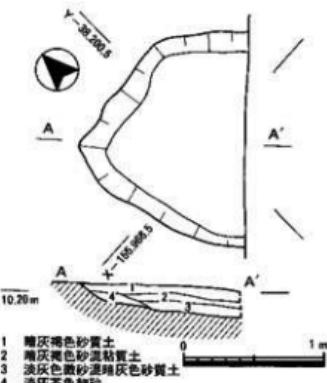
24F地区で検出した。東部が調査区外のため全容は不明である。検出部で最大幅2.33m、深さ0.16mを測る。埋土は4層から成る。遺物は占墳時代中期に比定される土師器片のはか、須恵器甕の小片が極少量出土している。

SK-31

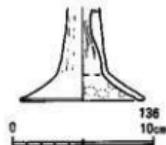
24D地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈し、最大幅1.5m、深さ0.05mを測る。埋土は砂質土を土とする2層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕の小片が極少量出土している。

SK-32

22D地区で検出した。東部が調査区外のため全容は不明である。検出部で最大幅2.0m、深さ0.18mを測る。埋土は3層から成る。遺物は出土していない。



第44図 SK-24平面図



第45図 SK-24出土遺物実測図

SK-33

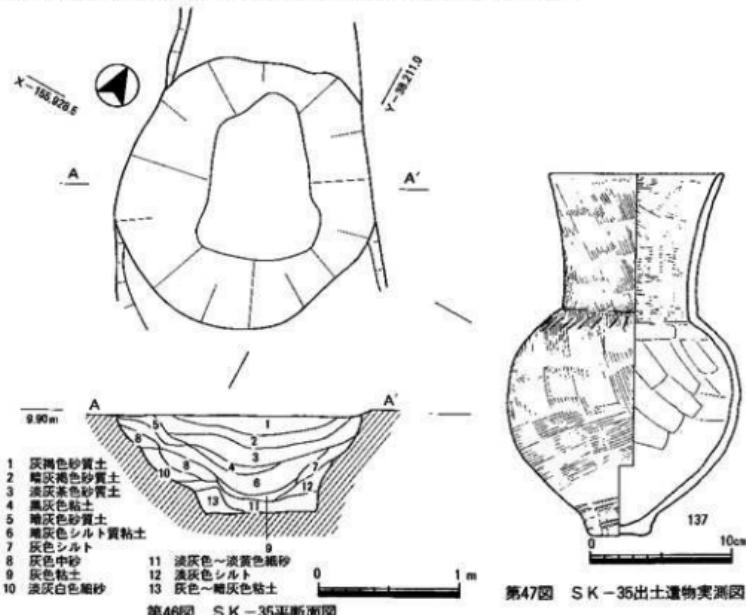
23C地区で検出した。西部は3号墳に切られ、北部は調査区外のため全容は不明である。検出部で最大幅2.6m、深さ0.2mを測る。埋土は砂質土を主とする6層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器片のほか、須恵器杯蓋の小片が極少量出土している。

SK-34

24C地区で検出した。検出した位置は3号墳の墳丘部の東端部分にあたる。楕円形を呈し、長径1.12m、短径0.5m、深さ0.15mを測る。埋土は淡灰色砂質土の單一層である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕の小片が出上している。

SK-35

27C地区で検出した。上部はSD-35により削平を受けている。円形を呈するもので径1.78~1.9m、深さ0.7mを測る。掘形の断面形状は逆台形を呈する。埋土は細かく分層されるが、一部を除けば中央部が厚く周辺部が薄くなるレンズ状堆積を示している。遺物は弥生時代後期に比定される長頸壺(137)が出土した。(137)は口径12.3cm、器高25.9cm、底径3.6cmを測る。外面は底部にタキ調整が行われている以外は、口縁部に至るまでハケナデの後、弱いナデが施されている。体部外面の上位に棒状の工具による沈線が放射状に巡る。灰白色の色調で、胎上には石英・長石粒が散見される程度の精良な粘土が使用されている。



第46図 SK-35断面図

第47図 SK-35出土遺物実測図

SK-36

27D地区で検出した。南部はSD-39に切られている。南北に長い溝状を呈し、検出部で東西幅1.0m、深さ0.05mを測る。掘形の断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は3層であるが斜行堆積が認められることから人為的に埋められたようである。遺物は出土していない。

SK-37

27D・28D地区で検出した。上面の形状は東西方向に長い楕円形を呈するもので、長径2.08m、短径1.68m、深さ0.67mを測る。掘形の断面形状は一部段を有するもののはば逆台形を呈する。埋土は10層に分層でき断面形状に沿って堆積しており、漸移的な堆積が窺われる。遺物は第1層・第2層を中心には

弥生時代後期の壺(138)・

鉢(139)・高杯(140・141)

の小片が少量出土している。

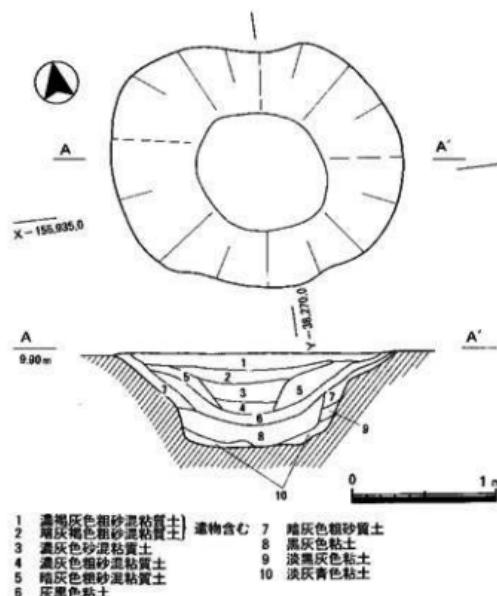
(138)は小さく突出する平底の底部である。全体にローリングを受けており調整は不明である。(139)は小さな平底を有するもので、鉢の底部と推定される。胎土はやや粗く長石・チャートが多い量に含まれている。高杯(140・141)は共にローリングを受けており調整は不明瞭である。

SK-38

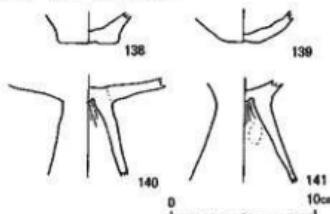
27D地区で検出した。上面の形状は南北方向に長い楕円形を呈するもので、南端はSK-39に切られている。検出部分で東西幅0.74m、南北幅0.99m、深さ0.07mを測る。埋土は淡灰色砂質土の単一層である。遺物は出土していない。

SK-39

SK-38の南端部を東西方向に切るもので、東



第48図 SK-37平面図



第49図 SK-37出土遺物実測図

西幅1.94m、南北幅0.59m、深さ0.16mを測る。埋土は淡灰色砂質土の單一層である。遺物は須恵器甕の小片が1点出土している。

溝（SD-17～51）

SD-17

30I地区で検出した。南北方向に伸びるもので、南端でSK-9、北端でSD-18と合流している。検出長2.0m、幅0.4m前後、深さ0.05mを測る。埋土は砂質土を主とする2層から成る。遺物は土器の小片が少量出土したが時期は明確でない。

SD-18

30I地区で検出した。東西方向に伸びるもので幅0.45m～1.05m、深さ0.05mを測る。埋土は砂質土を主とする2層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕の小片が少量出土している。

SD-19

30I地区で検出した。検出部分の形状はL字形を呈し、北端はSD-20に切られている。幅0.56～0.8m、深さ0.06mを測る。埋土は淡灰褐色砂質土の單一層である。遺物は古墳時代中期に比定される須恵器甕・製塙土器の小片が極少量出土した。

SD-20

30H・I地区で検出した。南東～北西方向の伸びるもので、一部SD-19を切っている。幅0.2～0.5m、深さ0.08mを測る。埋土は上層の淡灰褐色砂質土と下層の淡灰黄色微砂～細砂の2層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕の小片が極少量出土している。

SD-21

29H・I地区で検出した。南西～北東方向に直線的に伸びる。全長8.3m、幅0.9m前後、深さ0.08～0.2mを測る。埋土は砂質土を主とする3層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される須恵器杯蓋の小片が少量出土している。

SD-22

28H・I地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長3.45m、幅1.1m、深さ0.15mを測る。埋土は砂質土を主とする5層から成る。遺物は弥生時代後期に比定される甕の小片が極少量出土している。

SD-23

28H地区で検出した。SK-14の南東部から南北方向に伸びた後、屈曲して東西方向に流路を変え、西端はSD-31に切られている。全長5.3m、幅0.6～1.17m、深さ0.38～0.55mを測る。断面形状はV字状を呈する。埋土は断面形状に沿ってレンズ状に堆積しており、全体で11層に分層される。そのうち、第2層～第4層には炭化物が堆積していた。遺物は古墳時代中期

に比定される土師器長

副甕 (142・143)・瓶

(144)・高杯 (145)、

須恵器甕・杯蓋・杯身

(146)・高杯 (147・

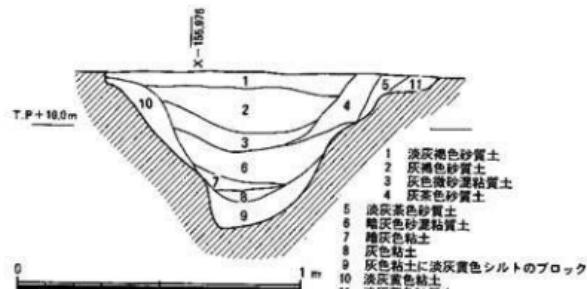
148)・器台 (149) の

小片が出土している。

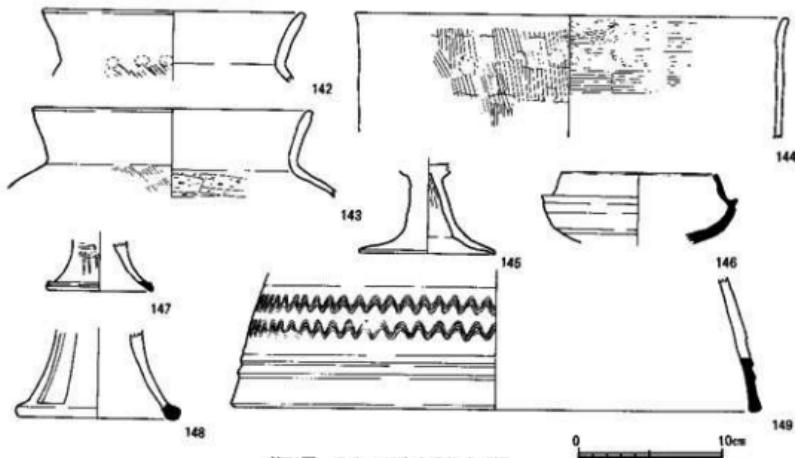
須恵器類は T K 216

型式に属するもので

ある。



第50図 SD-23断面図



第51図 SD-23出土遺物実測図

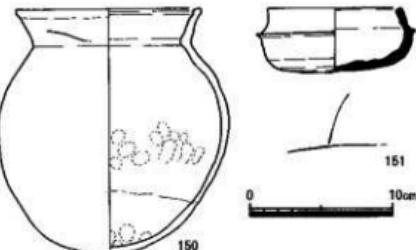
SD-24

28H・29H地区で検出した。北東-南西方向に直線的に伸びるもので、北東端はSD-27に接し、南西端はSD-31に切られている。全長5.3m、幅0.4m前後、深さ0.1mを測る。埋土は砂質土を主とする4層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕 (150)、須恵器杯身 (151) が出土している。(150) は中型の甕で、口径13.0cm、器高12.6cmを測る。口縁端部は肥厚しており布留式甕の特徴を残している。赤褐色の色調で、胎土はやや粗く長石・石英が多量に含まれている。(151) は完形品である。口径9.3cm、器高4.7cm、受部径11.2cmを測る。全体に器肉が厚いもので、やや雑な作りである。底部は平で体部はやや浅い。受部は水平方向に小さく伸び、立ち上がりは内傾し端部は段を有し内傾する。底部外面にヘラ記号が認められ

る。体部の少程度を逆時計回りにへらヶざりで調整している。

SD-25

28G地区で検出した。北東-南西方に直線的に伸びる。北東から南西方の流路を持つもので、南西端はSD-27に合流している。全長6.2m、幅0.33~0.6m、深さ0.05mを測る。埋土は2層から成る。遺物は上器片が極少量出土したが時期は明確でない。



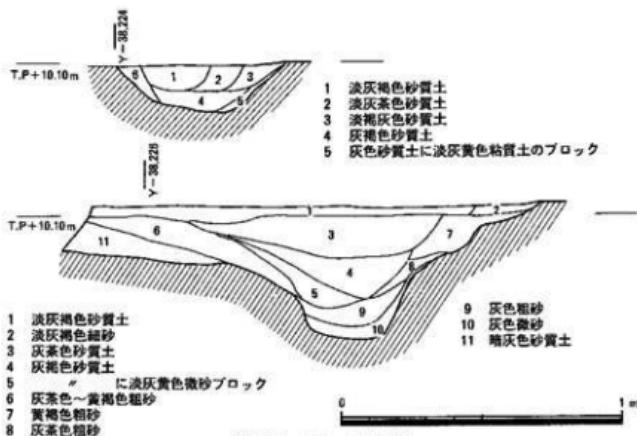
第52図 SD-24出土遺物実測図

SD-26

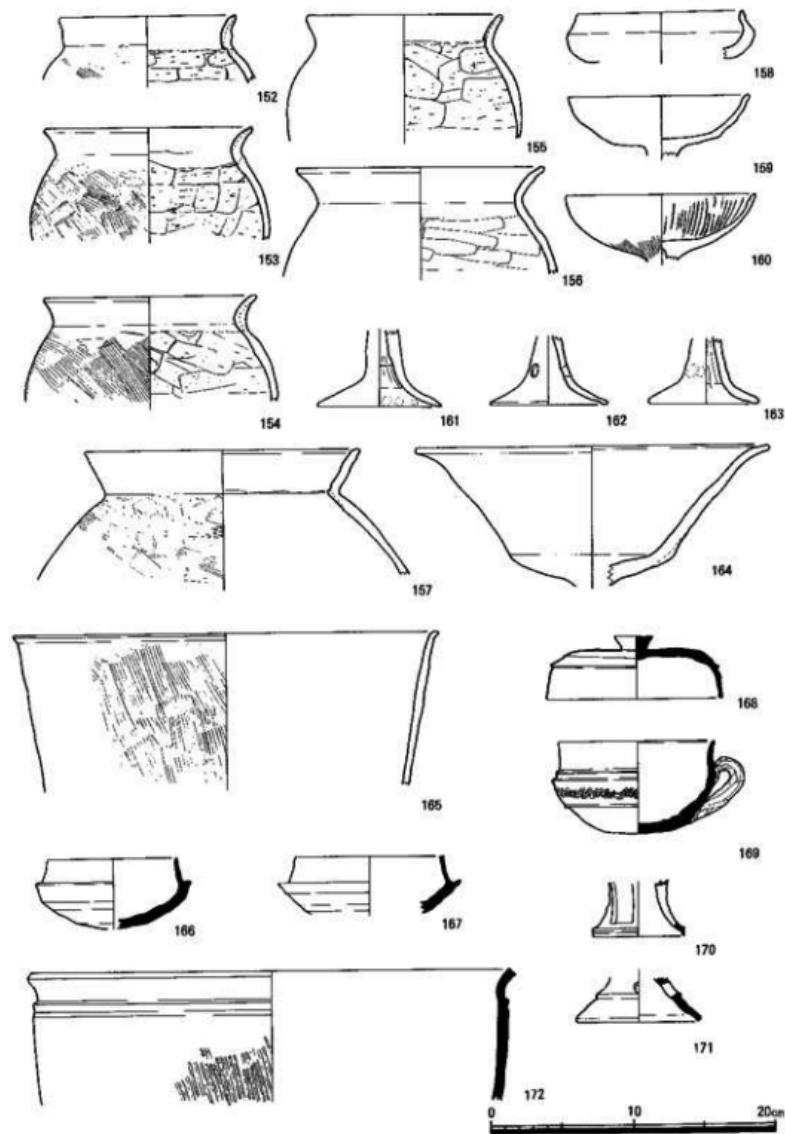
26F・G地区で検出した。北東から南西に流路を持つもので、南西端はSD-27に切られている。幅0.5~0.75m、深さ0.07~0.22mを測る。埋土は砂質土を主とする5層から成る。遺物は土器片が極少量出土したが時期は明確でない。

SD-27

28F地区から29H地区にかけて蛇行しながら南方に流下する溝である。各遺構との関係ではSD-25・SD-26・SD-29を切っており、SD-31・SD-32とは合流している。幅0.6~1.6m、深さ0.18~0.52mを測る。埋土は断面形状に沿ってレンズ状に堆積している。遺物は



第53図 SD-27断面図



第54図 SD-27出土遺物実測図

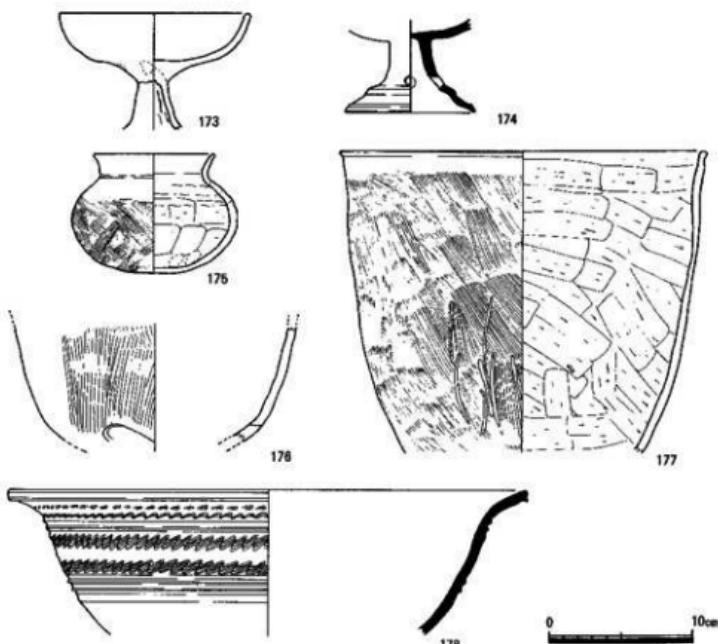
古墳時代中期に比定される土師器・須恵器がコンテナ箱に1箱程度出土している。そのうち、図化し得たものは土師器杯（158）・甕（152～157）・高杯（159～164）・瓶（165）、須恵器杯身（166・167）・有蓋高杯蓋（168）・把手付き椀（169）・高杯（170・171）・瓶（172）である。土師器甕（152～157）は（152～155）が中型、（156・157）が大型の長胴甕である。体部外面の調整は（152～154・157）がハケナデ、（155・156）がナデである。体部内面の調整は（157）が風化のため不明瞭であるほかは、ヘラケズリである。（158）は須恵器の杯身を模倣した土師器杯と推定されるが小片のため詳細は不明である。灰白色の色調で、胎土には石英・長石粒が多量に含まれている。土師器高杯は6点（159～164）で（159～163）が小型、（164）が大型である。杯部が遺存しているものには、杯部に段を有する（159）と椀形を呈する（160）ある。小型の高杯は赤褐色系の色調で、胎土には小砂粒が少量含まれている。大型の高杯である（164）は須恵器出現期に出自を持つもので、杯部が斜上方へ大きく拡張している。（165）は直線的に伸びる体部を有するもので、口縁端部は内傾する面を持つ。外面調整はハケナデである。赤褐色の色調で、胎土には小砂粒を含んでいるが概ね精良である。須恵器杯身（166・167）は（166）が1/2、（167）が1/4程度遺存している。（166）は短く水平に伸びる受部から、立ち上がりは内傾するもので口縁端部は丸く終る。（167）は受部が外上方に伸びるもので、口縁端部はわずかに段を有し内傾する。（168）は有蓋高杯蓋で、上部が平坦で逆台形状を呈するつまみが付く。天井部上面と口縁部の一部に灰かぶりが認められる。把手付き椀（169）は口縁部および底部の一部が欠損しているが他は完存している。口径11.2cm、器高6.5cm、底径4.1cmを測る。体部中位にやや雜な波状文が施文されている。（170・171）は共に須恵器高杯の脚部の小片でスカシ孔は（170）が方形、（171）が円孔であるが孔数は不明である。（172）は口径32.2cmを測る大型の器種で、体部の立ち上がりの角度から瓶と推定した。口縁部は強いヨコナデにより外反しており、端部は外傾する面を持つ。体部外面には上半に2本の凸帯を持つほか、綫方向に弱いタタキが認められる。

SD-28

28G・29G地区で検出した。北西-南東方向に直線的に伸びるもので、全長5.8m、幅0.3～1.1m、深さ0.3mを測る。埋土は砂質土を主とする5層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器高杯（173）、須恵器高杯（174）が出上している。土師器高杯（173）は椀形の杯部を有するもので、口径13.2cmを測る。赤褐色の色調で、胎土には石英・長石・赤色酸化土粒が多量に含まれている。（174）は脚部に円孔のスカシが4個穿たれている。

SD-29

28G・H、29G・H地区で検出した。北西から南東方向に伸びるもので、北西端はSK-18と合流し、南東端はSD-27に切られている。全長5.5m、幅1.12m、深さ0.35mを測る。

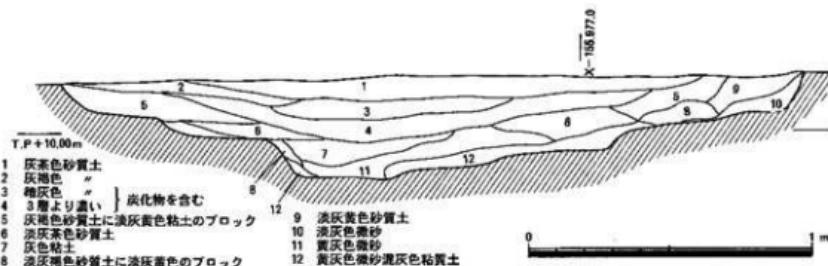


第55図 SD-28 (173~174)、SD-29 (175~178) 出土遺物実測図

埋土は10層から成る。遺物は第3層から古墳時代中期に比定される上部器壺（175）・瓶（176・177）、製塙土器、須恵器壺・壺・杯蓋・高杯・器台（178）等の破片が出土している。（175）は扁球形の体部に小さく外反する口縁部が付く小型の壺である。口縁部内面は二次焼成を受けしており、器壁の一部が剥離している。色調は外面が灰白色～黒灰色、内面が灰白色である。（176）は壺の底部で蒸気孔は楕円および円形であるが、小片のため配置や数量は明確でない。瓶（177）は底部が欠損しているが、おそらく砲弾形を呈するものと推定される。色調は（176）が淡灰色～淡褐色、（177）が灰白色である。器台（178）の杯部は大型で橢形を呈する。杯部外面に凸帯と波状文から成る装飾が行われている。色調は表面が青灰色で器肉は紫灰色である。

SD-30

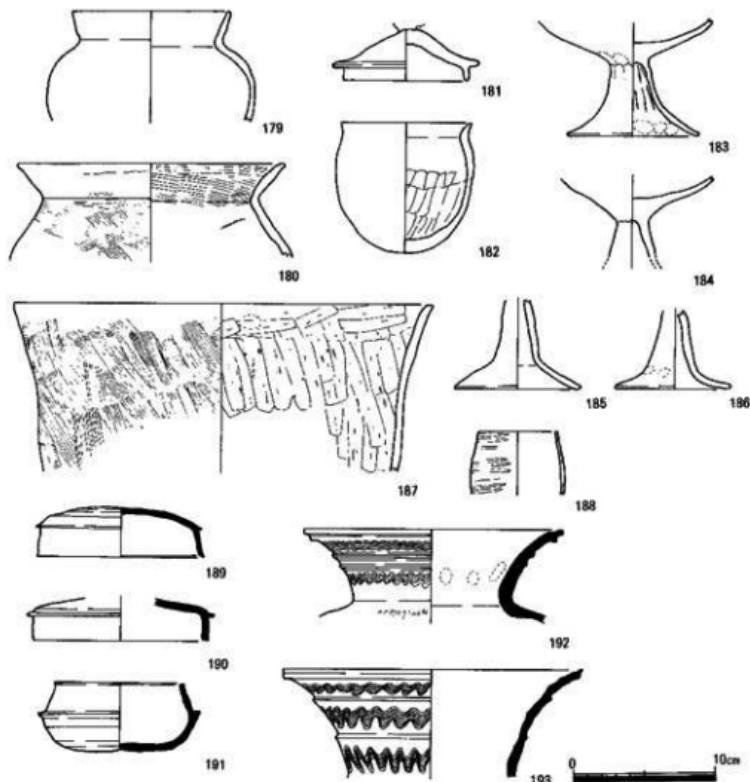
29H地区で検出した。北西～南東方向に直線的に伸びるもので、北西端はSD-31、南西端は中世溝に切られている。検出長3.65m、幅0.5m前後、深さ0.12mを測る。埋土は2層から成る。遺物は出土しなかった。



第56図 SD-31断面図

SD-31

29H地区で検出した。SK-18の南端から2m程度南北方向に伸びた後、角度を南東に変え流下している。各遺構との関係では、SD-23・SD-24を切っておりSD-27とは合流している。幅1.48m、深さ0.29mを測る。埋土は12層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器・須恵器の小片がコンテナ箱に約半分程度出土している。そのうち、図化し得たものは土師器壺(179)・高杯(183~186)・甕(180)・蓋(181)・鉢(182)・瓶(187)、製塙土器(188)、須恵器壺(192・193)・杯蓋(189・190)・杯身(191)である。(179)は小型の壺である。色調は灰白色で、胎上は粗く石英・長石・チャート粒が多量に含まれている。(180)は大型の長胴甕と推定される。体部外面と口縁部内面にハケナデ調整が行われている。灰白色~赤褐色の色調で、胎土には長石粒が多量に含まれている。(181)は土師器蓋で、つまみ部分が欠損している。初期須恵器の蓋を模倣したものと考えられる。灰白色の色調で胎土はやや粗い。(182)は小型の鉢で完形である。口径9.2cm、器高9.3cmを測る。色調は淡灰色で胎土には長石・チャート粒が含まれている。高杯(183~186)はいずれも小型で完形品はないが、杯部が楕形を呈するものと推定される。赤褐色系の色調で、胎土は精良である。(187)は瓶で外面は左上がりの密なハケナデ、内面はヘラケズリ調整が行われている。製塙土器(188)は薄手丸底式に分類されるもので、外面は二次焼成を受けたため一部剥離した部分が認められる。杯蓋(189)は天井部が丸味を持つもので、稜は鋭く水平に伸びる。口縁端部は段を有し内傾している。天井部の%程度を逆時計回りにヘラケズリが行われている。(190)は天井部の中央部分が欠損するが、おそらくつまみが付く有蓋高杯蓋と推定される。外面全体にベンガラが塗布されている。(191)は杯身で約1/2が遺存している。口径9.2cm、器高4.9cm、受部径11.5cmを測る。全体に器壁が厚い。広口壺は(192・193)の2点があり、口頭部の短い(192)と長い(193)がある。外面は共に凸帯と波状文からなる文様で構成されている。色調は(192)が青灰色、(193)が灰色である。須恵器類はTK73型式に対比されよう。



第57図 SD-31出土遺物実測図

SD-32

28F・G、29F・G地区で検出した。東西方向に弧状に伸びるもので、東端はSD-27、西端はSD-40に合流しSD-37を切っている。幅0.38~0.77m、深さ0.3mを測る。埋土は6層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される上師器甕(194)・高杯(195)、製塙土器、須恵器壺の破片が出土している。(194)は土師器甕の小片である。外面は全体剥離が顕著である。灰白色の色調で、胎土には長石・チャート・赤色酸化土粒が含まれている。(195)は楕円形の杯部を有する小型の高杯である。赤褐色の色調で焼成は良好である。胎土には、微細な砂粒が多量含まれているほか4mm前後の長石粒が散見される。

SD-33

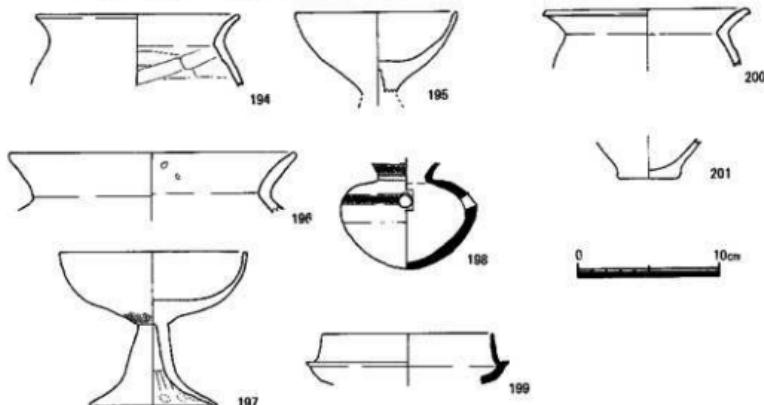
27F・G、28F地区で検出した。南東-北西方向に直線的に伸びるもので、一部はSD-37に切られ、北西端はSD-40に合流している。溝底の標高差からみて流路の方向は南東から北西と推定される。幅0.35~1.28m、深さ0.05~0.17mを測る。埋土は6層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕(196)・高杯(197)、須恵器甕(198)・杯身(199)・器台の破片が少量出土している。(196)は長胴甕の口縁部と推定される。外面は風化のため器壁の大半が剥離している。浅黄橙色の色調で、胎土には長石・石英粒が多量に含まれている。(197)は小型の脚部に椀形の杯部が付く高杯である。(196)と同様全体に風化が著しい。色調は器壁が遺存している部分が灰白色、そのほかは赤褐色である。胎土には白色の小砂粒が多量に含まれている。(199)は杯身で立ち上がりは直上に伸びる。(198)は甕で口頸部が欠損するが以下は完存している。体部は扁球形を呈する。体部最大径を測る位置よりわずか上部に細い単位の波状文を施文している。円孔スカシは波状文帯を切るかたちで穿たれており、径1.1cmを測る。TK208型式に対比されよう。

SD-34

26・27D地区で検出した。南東-北西方向に直線的に伸びるもので、SD-38・SD-50を切り北西端はSD-39に合流している。検出長9.5m、幅0.4m前後を測る。溝底の標高差からみて流路の方向は南東から北西であろう。埋土は2層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器甕の破片が少量出土しているが図化し得たものはない。

SD-35

27C・D地区で検出した。南-北西方向に直線的に伸びるもので、南部付近でSD-38、北



第58図 SD-32 (194・195)、SD-33 (196~199)、SD-36 (200・201) 出土遺物実測図

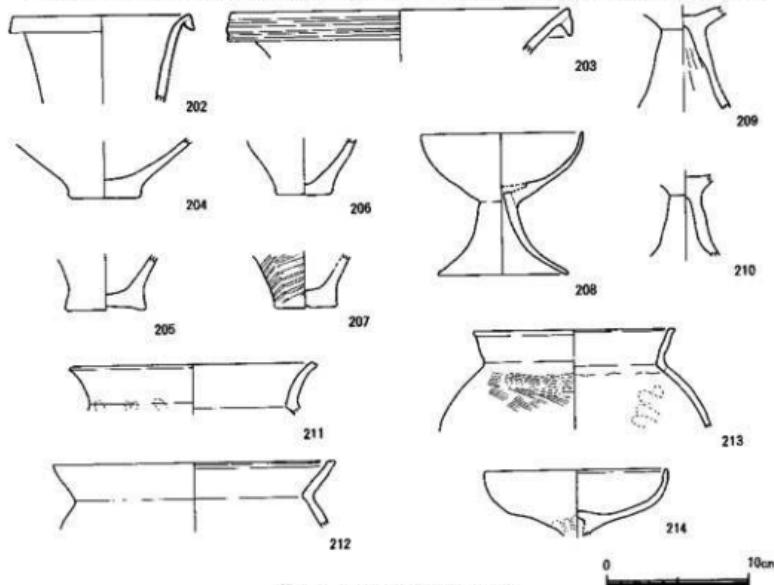
西端は近世溝に切られ、SK-35の上部を切っている。幅1.73m、深さ0.7mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される壺等の小片が極少量出土している。

SD-36

27C・D地区で検出した。北東方向に2m程度伸びた後、南北方向に角度を変えるもので、SD-39に切られ北端はSD-35に合流している。幅1.15m、深さ0.05mを測る。埋土は淡灰黄色粘質土の単一層である。遺物は弥生時代後期の壺(200)・壺(201)が少量出土している。

SD-37

27D地区南部から29C地区北東部にかけて直線的に伸びるもので、SE-4・SK-21・SD-33の一部を切りSD-32に一部切られている。全長26.5m、幅0.36~1.62m、深さ0.17~0.33mを測る。埋土は粗砂を主とする3層から成る。遺物は弥生時代後期に比定される壺(202~206)、壺(207)、高杯(208~210)のほか、古墳時代中期に比定される土師器壺(211~213)、高杯(214)、須恵器杯身等の土器片がコンテナ箱に約半分程度出土している。図示した遺物はいずれも小片で、大半がローリングを受けていた。(202・203)は広口長頸壺である。共にU縁端部が下部に肥厚するもので(203)には擬凹線が施されている。色調は共に灰白色で、胎内には石英・長石・チャートが含まれている。(204~206)は壺底部である。(207)は壺底部で外面にタタキ調整が施されている。(208~210)は高杯である。(208)はやや深めの



第59図 SD-37出土遺物実測図

楕形を呈している。(209・210)は高杯の脚部である。(211~213)は土師器壺である。(212・213)は口縁部が肥厚気味のもので、布留式壺の系譜を引くものである。(214)は楕形の杯部を有する高杯である。

SD-38

27C地区の東部から28E地区の西部に伸びる。北部は弧状を呈する部分がある以外は直線的に伸びる。他遺構との関係では、SD-34・SD-35・SD-39に切られている。検出長22.5m、幅0.28~0.45m、深さ0.12mを測る。埋土は砂質土を主とする2層から成る。遺物は弥生時代後期に比定される壺等の小片が少量出土しているが図化できるものはない。

SD-39

28E地区で検出したSK-21の北東部から27C地区にかけて伸びる。約15m程度直線的に伸びた後、屈曲して流路を北に変えている。他遺構との関係では、SD-36・SD-38を切り、SD-34と合流している。溝底の標高差から流路の方向はSK-21を起点として、南流するものである。幅0.8~1.3m、深さ0.2~0.3mを測る。埋土は2層から成る。遺物は古墳時代中期の土師器壺・高杯・須恵器杯蓋・杯身等の小片が少量出土したが図化できるものはない。

SD-40

28F地区から30G地区にかけてゆるやかに弧状を描いて伸びるもので、北端でL字状に屈曲するほか、一部二股にわかれる部分がある。幅1.9~3.5m、深さ0.1~0.2m程度を測る。他遺構との関係では、SD-32・41を切っており、SD-42と合流している。埋土は3層で最下層は粘質土である。溝幅に比して深度が浅く、底部がほぼ水平である点から溝としているが、道路状遺構の可能性が高い。遺物は古墳時代中期に比定される土師器・須恵器等の土器類が少量出土したが、図化し得たものはない。

SD-41

30F・G地区で検出した。北西南東方向に伸びるもので、南東端はSD-40に合流している。検出長6.0m、幅0.85~1.82m、深さ0.13mを測る。埋土は3層から成る。遺物は出土しなかった。

SD-42

28E地区から29G地区にかけて北東-南西方向に直線的に伸びるもので、南端はSD-40に合流している。検出長19m、幅0.82m、深さ0.12mを測る。埋土は3層から成る。遺物は土器の小片が極少量出土したのみで、時期は明確でない。

SD-43

28E地区から29F地区にかけて北東-南西方向に直線的に伸びるもので、28E地区でSD-44と合流している。検出長29m、幅0.15~0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は2層から成る。遺

物は出土しなかった。

SD-44

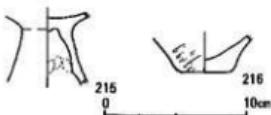
28E地区で検出した。北西-南東方向に伸びるもので、南東端はSD-43と合流している。検出長4.7m、幅0.7m、深さ0.05mを測る。埋土は2層で、上層が淡灰色褐色粗砂で下層が灰茶色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SD-45

24E地区で検出した。北西-南東方向に直線的に伸びる。検出長4.2m、幅0.7~1.32m、深さ0.05mを測る。埋土は砂質土を主とする3層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される上師器甕の小片が極少量出土している。

SD-46

22D・23D・E地区で検出した。北東-南西方向に直線的に伸びる。検出長12m、幅1.14m、深さ0.12mを測る。埋土は3層から成る。遺物は圓化した弥生時代後期の高杯(215)・甕(216)のほか、古墳時代中期に比定される上師器甕・高杯・須恵器杯身等の小片が少量出土している。



第60図 SD-46出土遺物実測図

SD-47

23D・22D地区で検出した。南東-北西方向に直線的に伸びる。検出長1.6m、幅0.58~0.9m、深さ0.11mを測る。埋土は細砂~砂質土を主とする4層から成る。遺物は上器片が少量出土したのみで時期は明確でない。

SD-48

24D地区で検出した。3号墳の南東隅に位置する。弧状に伸びるもので西端部は3号墳に切られている。検出長4.3m、幅0.26~0.5m、深さ0.07~0.11mを測る。埋土は1層から成る。遺物は弥生時代後期に比定される壺の小片が1点が出土したのみである。

SD-49

25E地区で検出した。南北方向に伸びており、方形周溝墓の北西部と2号墳の北周溝をつなぐ位置にあたる。検出長2.3m、幅0.85m、深さ0.13mを測る。埋土は砂質土を主とする3層から成る。遺物は弥生時代後期に比定される甕の小片が出土している。

SD-50

26F地区で検出した。北西-南西方向に伸びるもので、北東端は2号墳、南西端はSK-26に切られている。検出長3.5m、幅0.5~1.25m、深さ0.21mを測る。埋土は砂質土を主とする3層から成る。遺物は土器片が出土したが、時期は明確でない。

SD-51

27D地区で検出した。北東-南東方向に伸びるもので、南西端はSD-35と合流している。検出長2.38m、幅0.9m、深さ0.29mを測る。埋土は砂質土を主とする4層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される甕の小片が極少量出土している。

柵列(SA)

SA-1

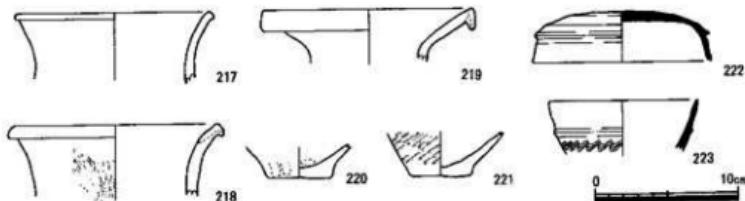
29E・F区で検出した。SD-43西部の東側に沿って構築されている。SP-217~220で構成されており、全長6.9mを測る。柱間の長さは、1.9~2.4mと不規則である。柵列を構成する柱穴は円形で、径0.29~0.48m、深さ0.11~0.18mを測る。遺物は出土していない。

SA-2

29H区で検出した。SK-18・SD-27・29・31で区画された方形区画の南部で検出した。SP-128~131で構成されており、全長は4.2mを測る。柱間の長さは1.2~1.6mと不規則である。柵列を構成する柱穴は円形ないしは楕円形で、径0.26~0.4m、深さ0.09~0.15mを測る。遺物はSP-131から上器の小片が極少量出土している。

小穴(SP-103~SP-313)

西区では掘立柱建物(SB-3~SB-9)を構成する柱穴を含めて、全体で211個(SP-103~SP-313)の小穴が検出されている。検出位置は、北東部を除けば、南北方向に走る埋没河川の西側に展開する居住域部分を中心に検出されている。上面の形状では、円形・楕円形・不定形がある。径は0.14~1.45mで深さは0.04~0.52mを測る。遺物は65個の小穴から出土している。そのうち、図化したものは7点(217~223)である。時期別には弥生時代後期と古墳時代中期に比定されるものに区別できる。弥生時代後期では、壺出土のSP-267(217)・SP-144(218)・SP-190(219)・SP-221(220)と甕出土のSP-189(221)がある。古墳時代中期ではSP-182から須恵器杯蓋(222)とSP-151から須恵器壺(223)が出土している。



第61図 SP出土遺物実測図

第4表 西区小穴(S P)一覧表

番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S P -103	30 I	円形	32×28	18.3		
S P -104	30 I	"	24×22	6.9	土師器	
S P -105	30 I	"	51×44	30.5	土師器	
S P -106	30 I	不定形	65×57	31.8		
S P -107	30 I	円形	57×52	24.6		
S P -108	29 I	"	67×67	10.9	土師器	
S P -109	30 I	"	42×37	11.6		
S P -110	29 I	不定形	36×31	12.3		
S P -111	29 I	円形	55×49	17.1	土師器	
S P -112	30II	"	58×46	16.7		
S P -113	30H	椭円形	34×26	11.8		SB-3
S P -114	30II	円形	27×24	10.8		SB-3
S P -115	30H	"	30×27	13.2		SB-3
S P -116	29H	"	32×27	14.2		SB-3
S P -117	30H	不定形	49×38	15.9		SB-3
S P -118	29II	円形	30×27	10.7		
S P -119	29H	不定形	53×46	31.9		SB-3
S P -120	29H	円形	42×40	4.1		SB-3
S P -121	29H	不定形	34×28	14.4		SB-3
S P -122	29H	"	38×34	21.6	土師器	SB-3
S P -123	29H	円形	31×29	12.7		SB-3
S P -124	29II	不定形	55×51	13.7		
S P -125	29H	椭円形	69×16	13.2	土師器・製塙土器	
S P -126	29II	円形	45×44	11.9	土師器	
S P -127	30H	"	76×71	13.9		
S P -128	29H	椭円形	38×38	14.1		SA-2
S P -129	29H	円形	33×40	12.4		SA-2
S P -130	29H	"	27×24	8.6		SA-2
S P -131	29H	"	35×32	15.9	土師器	SA-2
S P -132	29H	"	33×32	10.8	土師器	
S P -133	29G	"	45×36	12.4		
S P -134	29G	"	35×32	15.7		
S P -135	29G	不定形	46×32	19.2		
S P -136	28II	椭円形	68×43	36.4	土師器	
S P -137	28H	円形	31×31	6		
S P -138	28II	"	38×30	3.8		
S P -139	28H	"	41×36	12.6		
S P -140	28H	"	33×31	5		
S P -141	28H	椭円形	45×23	19.8	土師器	SB-4
S P -142	28H	円形	40×32	15.8		SB-4
S P -143	28H	"	50×39	19.3		SB-4
S P -144	28H	不定形	62×49	16.2	弥生土器-壺(218)	SB-4
S P -145	28H	円形	45×35	7.2		SB-4
S P -146	27H	"	25×25	6.8		SB-4
S P -147	28H	椭円形	50×37	12.9		SB-4
S P -148	27H	円形	57×52	23	土師器	SB-4
S P -149	27H	"	37×36	9.9		SB-4
S P -150	28H	椭円形	41×39	12.8		
S P -151	27H	不定形	145×38	10.7	須恵器-壺(223)	

番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S P - 152	27H	円形	24×19	8		
S P - 153	27II	楕円形	46×24	6.1		
S P - 154	28G	不定形	49×37	15.6		
S P - 155	28G	円形	52×50	4		
S P - 156	27G	"	41×39	11.6	土師器	
S P - 157	27G	"	27×22	12		
S P - 158	27G	"	27×25	11.5	土師器	
S P - 159	27G	"	35×32	11.9		
S P - 160	27G	不定形	66×47	8.9	弥生土器・土師器	S B - 5
S P - 161	27G	円形	42×32	14		S B - 5
S P - 162	27G	"	38×34	11		S B - 5
S P - 163	27G	"	26×22	9.2		S B - 5
S P - 164	27G	"	14×14	8.1		S B - 5
S P - 165	27G	"	32×32	9.8		S B - 5
S P - 166	27G	"	54×46	10.2	土師器	S B - 5
S P - 167	27G	"	37×34	21.9	土師器	S B - 5
S P - 168	27G	不定形	49×42	12.4	土師器	
S P - 169	27G	円形	23×22	13.7		
S P - 170	27G	"	39×32	13		
S P - 171	27G	"	28×26	10.9		
S P - 172	27G	不定形	53×33	19.1		
S P - 173	27G	楕円形	28×21	9.9		
S P - 174	27G	不定形	27×25	11.2		
S P - 175	27G	"	103×52	30.7	土師器	
S P - 176	27G	"	42×32	14.2		
S P - 177	27G	"	25×23	11.4		
S P - 178	27G	不定形	40×31	18.9		
S P - 179	27G	"	38×25	8.8		
S P - 180	27G	円形	26×24	10.9		
S P - 181	27G	隅丸方形	39×36	17.3	土師器	
S P - 182	28G・H	不定形	79×62	24.9	土師器・須恵器(222)	
S P - 183	28・29G	"	110×32	13.2	製塩土器	
S P - 184	28G	"	46×33	15.7	土師器	
S P - 185	29G	"	58×40	8.3		
S P - 186	29G	円形	36×34	11.3		
S P - 187	29G	円形	32×29	16.1	土師器	
S P - 188	28G	不定形	99×54	6.3		
S P - 189	28G	楕円形	61×41	22.9	弥生土器一甕(221)	
S P - 190	28G	不定形	135×74	17.9	弥生(219)・土師・須恵	
S P - 191	28G	円形	48×47	17.3		
S P - 192	28G	"	55×50	8		
S P - 193	27G	不定形	71×40	8.3		
S P - 194	27G	"	40×39	15.3	土師器	
S P - 195	27G	円形	34×31	12.3		
S P - 196	27G	不定形	62×51	19.1		
S P - 197	28G	円形	51×48	21.2		
S P - 198	28G	不定形	95×31	10.4		
S P - 199	28F	円形	31×30	11.6	土師器	
S P - 200	28F	楕円形	48×38	23.3	土師器	S B - 6

番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S P - 201	28F	不定形	81×61	34.2	土師器	SB - 6
S P - 202	28F	"	70×56	37.8	土師器・須恵器・製塙	SB - 6
S P - 203	28F	"	75×66	61.2	土師器	SB - 6
S P - 204	28F	"	72×56	40.6	土師器	SB - 6
S P - 205	28F	"	87×79	38.5	土師器	SB - 6
S P - 206	28F	"	90×67	52.4	土師器・製塙土器	SB - 6
S P - 207	28F	"	81×62	40.4	土師器	SB - 6
S P - 208	28F	"	72×54	31.9	土師器	SB - 6
S P - 209	28F	"	47×43	11.2		
S P - 210	28F	円形	34×33	10.2		
S P - 211	28F	不定形	62×50	6		
S P - 212	28F	円形	52×41	15.2		
S P - 213	28F	不定形	41×38	8.5		
S P - 214	28F	円形	22×19	6.3	土師器	
S P - 215	28・29F	不定形	52×49	16.6		
S P - 216	30F	"	86×41	5		
S P - 217	29F	円形	28×26	11.8		SA - 1
S P - 218	29F	"	32×30	10.9		SA - 1
S P - 219	29E・F	"	46×40	17.8		SA - 1
S P - 220	29E	"	33×32	12.8		SA - 1
S P - 221	28E・F	不定形	91×90	38.8	赤生土器・壺(220)	SB - 7
S P - 222	28F	"	74×51	21.4		SB - 7
S P - 223	28F	"	63×56	28.5		SB - 7
S P - 224	28E	"	71×45	24.9	土師器	SB - 7
S P - 225	28F	"	93×70	37.9		SB - 7
S P - 226	28E	"	81×54	48.5	土師器	SB - 7
S P - 227	28E	"	54×42	29.2	土師器	SB - 7
S P - 228	28E・F	"	103×94	14.8		SB - 7
S P - 229	28F	"	72×69	19.6		
S P - 230	28E	"	104×81	15.9		
S P - 231	28F	隅丸方形	38×32	8.7		
S P - 232	27F	不定形	49×44	33		
S P - 233	27F	隅丸方形	134×101	11.6	土師器	
S P - 234	27F	不定形	76×75	23.1		
S P - 235	27F	"	51×30	6.7		
S P - 236	27F	"	67×39	32.3	土師器	
S P - 237	27F	"	66×50	34.1	土師器	
S P - 238	27F	円形	46×46	10.4		
S P - 239	27F	"	34×30	8.5		
S P - 240	27F	"	40×36	13.4		
S P - 241	27F	"	35×35	27.4		
S P - 242	26G	"	45×42	3.8		
S P - 243	26G	"	44×42	11.6		
S P - 244	26II	"	55×50	10.8		
S P - 245	26H	"	55×20	19.7		
S P - 246	26G	"	44×37	12.7		SB - 9
S P - 247	26G	椭円形	35×29	12		SB - 9
S P - 248	26G	不定形	41×30	18.6	土師器	SB - 9
S P - 249	26G	"	40×26	12.2	土師器	SB - 9

番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S P - 250	26G	不定形	36×27	10.2		S B - 8
S P - 251	26G	円 形	46×38	5.8		S B - 9
S P - 252	26G	不定形	60×46	13.2		S B - 9
S P - 253	26G	"	49×36	24.8		S B - 9
S P - 254	26G	"	44×32	12.5		S B - 8
S P - 255	26G	"	45×31	15.2	土師器	S B - 8
S P - 256	26G	"	54×47	23.5	土師器	S B - 8
S P - 257	26G	"	31×18	8.5		
S P - 258	26G	不定形	25×25	3.5		
S P - 259	26G	"	86×50	4.1		
S P - 260	26G	"	75×51	9.7	土師器	
S P - 261	26G	円 形	26×22	6.3		
S P - 262	26G	不定形	69×52	5.1		
S P - 263	26G	円 形	28×21	3.3		
S P - 264	26G	不定形	52×51	3.5		
S P - 265	26G	"	101×45	3.9		
S P - 266	26G	円 形	131×45	2.5		
S P - 267	26F・G	不定形	99×61	18.7	弥生土器・壺(217)	
S P - 268	24F	"	110×101	5.9		
S P - 269	24E	椭円形	43×31	18.3		
S P - 270	23D	円 形	36×35	14.7	土師器	
S P - 271	23D	"	41×34	17.3		
S P - 272	23D	不定形	62×29	21.4		
S P - 273	23D	円 形	29×22	13		
S P - 274	23D	"	67×64	4		
S P - 275	23D	不定形	41×25	9		
S P - 276	23D	円 形	30×29	8.5	土師器	
S P - 277	23D	"	21×17	9.3		
S P - 278	23D	"	33×29	9.8		
S P - 279	23D	"	26×25	9.5	土師器	
S P - 280	23D	"	49×42	38.6		
S P - 281	23D	扁丸方形	36×29	4.6		
S P - 282	23D	椭円形	35×25	7.7		
S P - 283	23D	不定形	81×50	8.7		
S P - 284	23D	円 形	28×24	7.2		
S P - 285	23D	"	23×21	11.6		
S P - 286	23D	"	35×33	5.8		
S P - 287	23D	不定形	28×25	15.4		
S P - 288	23D	椭円形	44×32	16.8		
S P - 289	23D	"	51×36	12.6		
S P - 290	23C	円 形	47×43	11.5		
S P - 291	23C	不定形	44×36	7.3		
S P - 292	23C	椭円形	38×21	3.5	須恵器	
S P - 293	23C	不定形	68×45	21.3	土師器	
S P - 294	26C	円 形	33×32	10.2		
S P - 295	26C	"	32×27	12.3	土師器	
S P - 296	26C	不定形	46×37	4.6		
S P - 297	26C	円 形	39×36	12.5		
S P - 298	26C	"	28×24	9.5		

番号	地区	形状	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
S P -299	26C	円形	19×16	8.3		
S P -300	26C	楕丸方形	29×25	9.3	土師器	
S P -301	26D	不定形	53×47	13.1		
S P -302	26D	円形	35×34	10.7		
S P -303	27D	不定形	33×31	9.8		
S P -304	27E	"	65×53	11.4		
S P -305	27E	"	73×56	8.8	須恵器	
S P -306	27E	"	91×46	5		
S P -307	27D	円形	31×26	10.3		
S P -308	27D	"	38×29	4.4	土師器	
S P -309	27D	不定形	69×53	22.8	弥生土器・土師器	
S P -310	28D	円形	45×42	10		
S P -311	27D	不定形	48×42	6.1		
S P -312	28D	"	45×42	13.9	弥生土器	
S P -313	30E	"	122×81	9.7	土師器	

方形周溝墓

1号方形周溝墓

25・26E・F地区で検出した。弥生時代後期の方形周溝墓で、古墳時代中期後半築造の2号墳(八尾南9号墳)の周溝に一部切られている。墳丘部分は削平を受けており、主体部は確認できなかった。墳丘の西辺に陸橋部を有する。墳丘部の平面形状は方形を呈し、東西幅6.8~7.4m、南北幅7.5mを測る。主軸方向はN-24°-Eを示す。周溝は幅1.0~1.7m、深さ0.05~0.4mを測り、コーナー部分が全体に比してやや浅くなっている。断面形状は北周溝のように周溝内の一端が深くなるものや、全体が浅い皿状を呈するものに二分される。埋土は5層に分層したがいずれも微砂~粗砂を主体とするものである。遺物は、周溝内から弥生時代後期に比定される壺(224~228)の小片が少量出土している。なお、墳丘部分からは土坑3基(S K-27~S K-29)を検出している。検出した位置から土塙墓の可能性が高いが、同時期の遺物が出土したのはS K-28のみで、他の2基からは遺物が出土していない。

出土遺物

5点(224~228)を図化した。弥生時代後期に比定される壺の小片である。(224~226)は壺の口縁部である。口

縁端部が丸い(224・

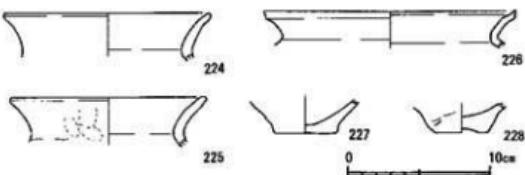
225)と端部が強いY

コナデにより面を持つ

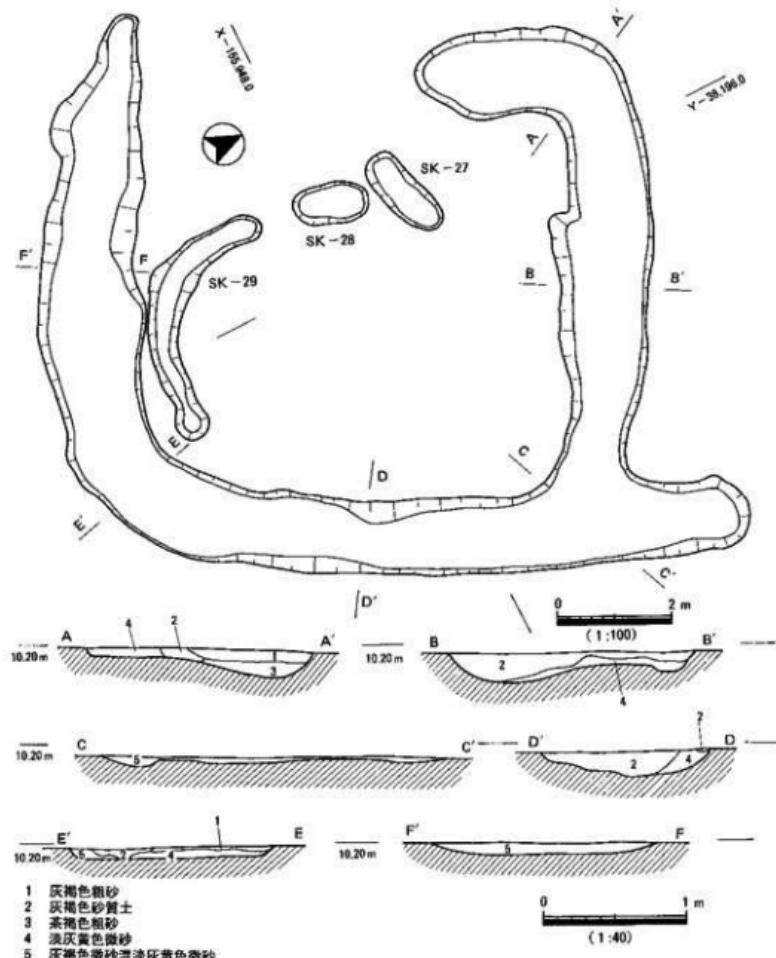
(226)がある。いず

れも淡褐色の色調で、

胎土には2mm程度の長



第62図 1号方形周溝墓出土遺物実測図



第63図 1号方形周溝墓断面図

石・石英粒が散見される。(227・228)は壺底部で、(228)はドーナツ底を呈している。明橙色の色調で非牛駒西麓産である。

方墳

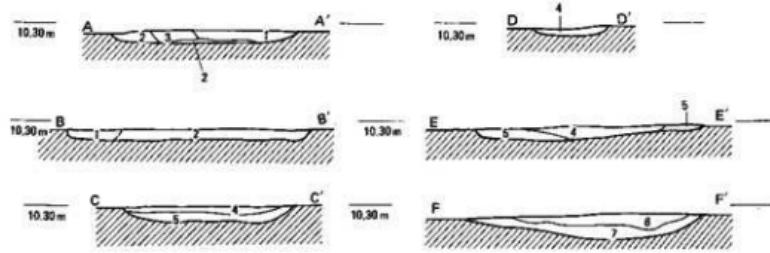
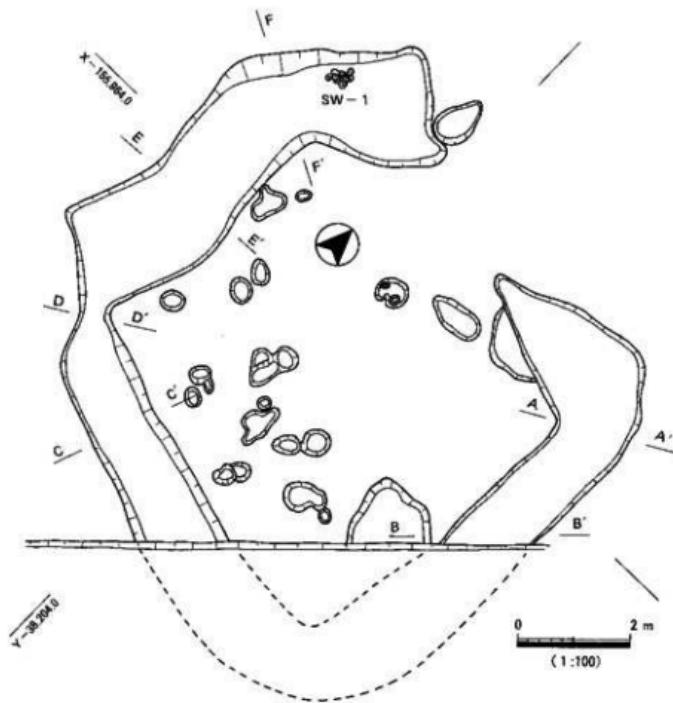
西区の北東部で3基（1～3号墳）の方墳を検出した。第5層上面を構築面としているが、西部においては、南北方向にのびる中粒砂～粗粒砂を主体とする埋没河川が存在しており、2号墳の西周溝幅が減少する等の制約を受けている。墳丘形態を知り得た1号墳、2号墳では、1号墳が北部、2号墳が北西部に陸橋部を有している。規模は、1号墳が一辺4.8～6.6mでやや小型であるのに比して2号墳、3号墳は13～14.5mを測る大型の方墳で、八尾南遺跡、長原遺跡で検出されている方墳の中でも中型の部類に入る。2号墳、3号墳からは埴輪類が多量に出土しており、埴輪が樹立されていた古墳であることが判る。出土した遺物から2号墳（TK23型式段階）→3号墳（TK23型式段階）→1号墳（TK47型式段階）に構築されたことが推定される。また、検出した集落との関係では、集落（TK216型式～TK208型式段階）が廃絶した後に古墳の築造が開始されたようである。

1号墳（八尾南8号墳）

26G・25G地区で検出した。墳丘部の大半が削平を受けており土体部は確認できなかった。南西部が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部の平面形状は方形を呈し、北辺に陸橋部を有する。墳丘幅は、西辺で南北幅4.8m、北辺で東西幅6.6mを測る。周溝幅は0.4～1.8mを測るが、南西隅では幅が狭くなっている。周溝の断面形状は浅い皿状で、深さ0.05～0.32mを測る。埋土は9層に分層されるが、微砂～粗砂が土で滲水を想定させる粘土層の堆積は認められない。遺物は周溝内から弥生時代後期の高杯（229）、古墳時代後期の須恵器杯蓋（230）のほか、北周溝の西部付近で須恵器の短頸壺・杯身・杯蓋の18点（231～248）から成る土器集積を検出した。構築時期はTK-47型式段階と考えられる。

土器集積（SW-1）

土器集積は西周溝北西部の最下部で検出された。須恵器類が概ね三角形状に配置されており、長辺で95cm、短辺で65cmを測る。検出した地点は西に向かってわずかに傾斜しており、配置されている上器群の底部での比高差は最大で8cmを測る。土器集積を構成する須恵器類の内訳は、蓋杯7組と杯蓋1点、杯身1点、直口壺1点、短頸壺1点の計18点である。これらの上器群を2段に積み重ねており、1段目は蓋杯5組（235・236）、（237・238）、（239・240）、（241・242）、（243・244）と杯身（246）に直口壺（247）を入れたものと単独で出土した短頸壺（248）の13点から成る。2段目は1段日のほぼ中央部に置かれており、2組の蓋杯（231・232）（233・234）と、さらに蓋杯（233・234）の上部に重ねられた杯蓋（245）の5点から成る。なお、1段目の蓋杯（235・236）、（239・240）、（241・242）、（243・244）については、検出時点では完全に密封状態を保っていたが、遺物は出土しなかった。



- | | |
|----------------|----------|
| 1 雖灰褐色微砂 | 6 波灰褐色粗砂 |
| 2 雖灰褐色微砂混灰黄色微砂 | 7 灰褐色粗砂 |
| 3 灰色沙質土 | |
| 4 灰褐色沙質土 | |
| 5 淡灰褐色沙質土 | |

0 1 m
(1:40)

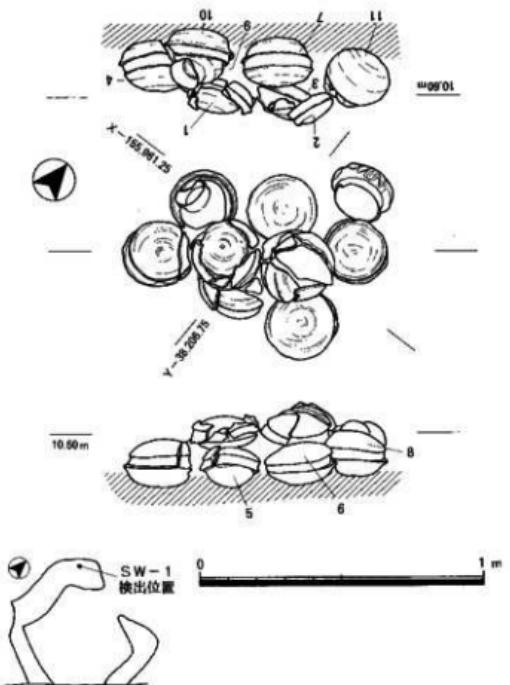
第64図 1号墳平面図

出土遺物

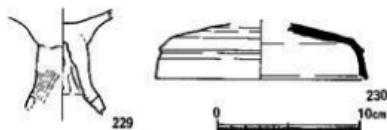
総数で20点を図化したが
2点(229・230)以外は上
器集積に伴うものである。
(229)は高杯の脚部で、柱
状部内面にはシボリ目が認
められる。スカシ孔は4個
である。灰白色の色調で胎
土には3■人の長石が散見
される。須恵器杯蓋(230)
は稜が丸味を持つもので、
型的には上器集積の土器
群より新しく位置付けられ
る。土器集積を構成する土
器群のうち蓋杯のセットで
出土したものは(231・232)、
(233・234)、(235・236)、
(237・238)、(239・240)
(241・242)、(243・244)

の7組である。セット関係
を成す杯蓋は口徑11.2~

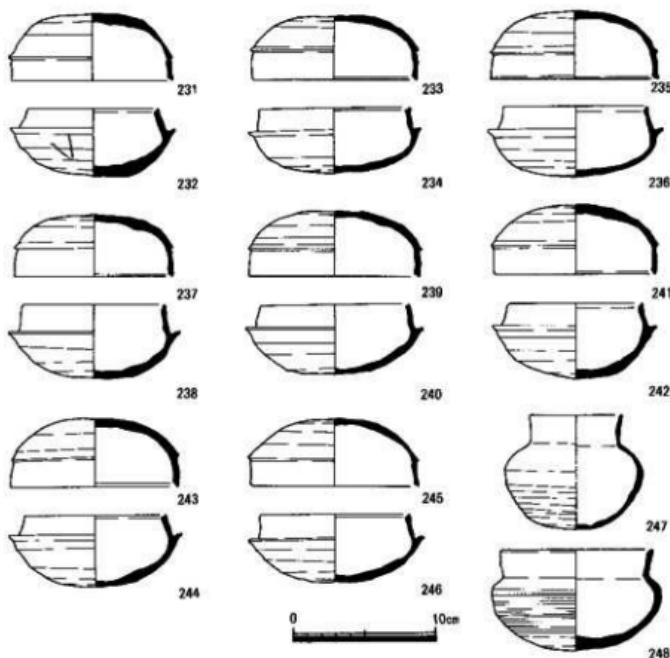
12.0cm、器高4.4~5.1cmを測る。天井部の
形態では、上面が平な(231)を除けば丸
味を持つものである。稜は鋭く水平に小さ
く伸びる。口縁部は垂直に下る(231)以
外は内湾気味に下る。口縁端部は段を有し
内傾している。色調は(231・239)が青灰
色、他は灰色である。自然釉が(231)に灰かぶりが(233・235・237・243)に認められる。
一方、杯身は口徑9.2~11.6cm、器高4.5~5.3cm、受部径11.6~12.4cmを測る。体部は丸味を持
ちやや深日のものが大半を占める。受部は外上方に小さく伸びる。立ち上がりは内傾して直立
するもので、長く伸びるもの(232・234・236・238・240・242)とやや短い(244)がある。
口縁端部は段を有し内傾している。色調は青灰色のもの(232・234・236・238・240)と灰白



第65図 1号墳SW-1平面図



第66図 1号墳出土遺物実測図

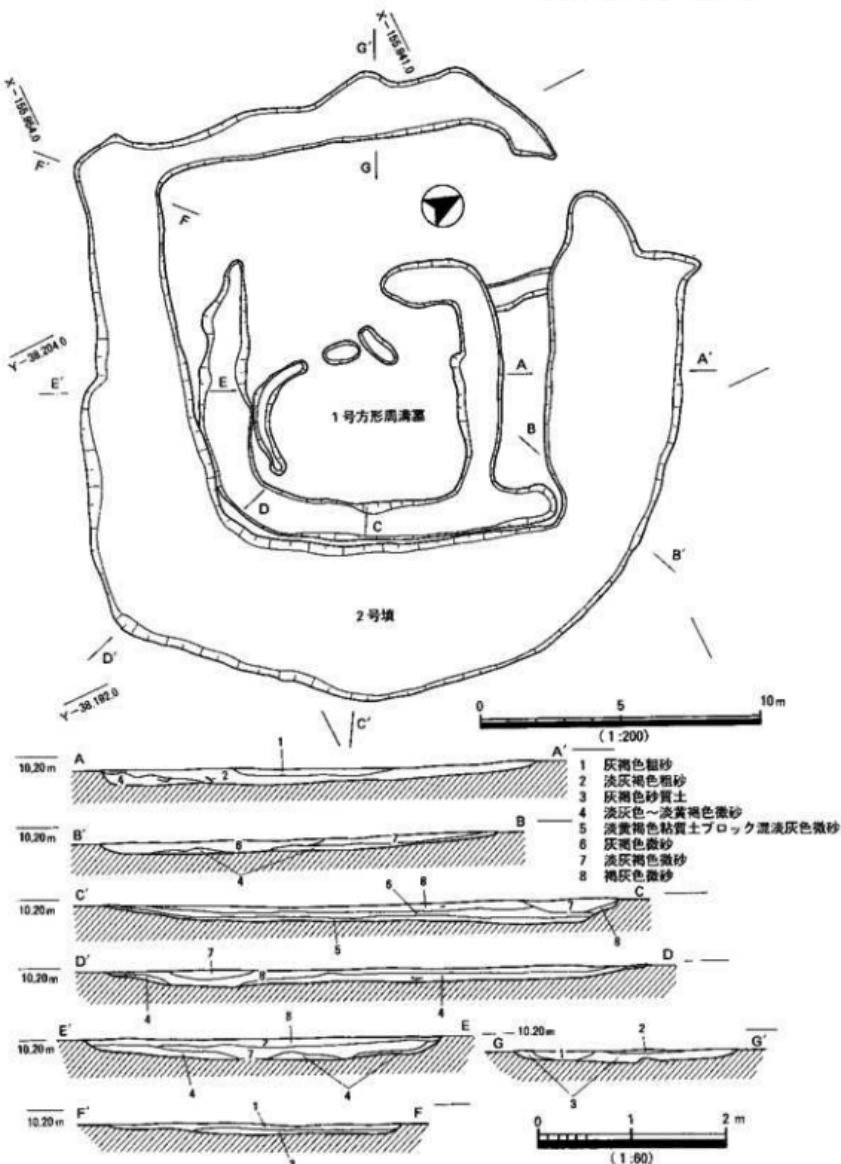


第67図 1号墳SW-1出土遺物実測図

色のもの（242・244）がある。自然軸が（232・234）に認められるほか、（234）には須恵器片が付着している。（232）の体部外面にはV字形のヘラ記号がある。単品で出土した杯蓋（245）および杯身（246）はセットを構成する蓋杯類と同形態である。（247）は球形の体部に直立する口縁部が付く直口壺で、「口径6.5cm、器高8.1cmを測る。淡青灰色の色調で体部の三分の二以上に灰かぶりが認められる。（248）は扁球形の体部に外反気味に立ち上がる口縁部が付く。口径10.8cm、器高7.2cmを測る。内面から外面体部上位にかけて自然軸が厚く付着している。上器集積から出土した須恵器類は、TK23型式～TK47型式に比定される。

2号墳（八尾南9号墳）

1号墳の北で検出した。墳丘内に1号方形周溝墓を取り込む形で構築されている。構築位置は南北方向に伸びる埋没河道および河道肩部に当ることから構築面の土質は西側が粗砂、東側がシルトに区別できる。北西隅に陸橋部を有するもので、墳丘の平面形状は楕円方形を呈する。主軸方向は東辺でN-24°-Eを示す。墳丘幅は東西幅13.5～14.5m、南北幅12～13.1mを測る。



第68図 2号填断面図

周溝は東・南・北周溝が幅3.2~5.4mと幅広なのに対して西周溝は構築面が粗砂であることが影響したものの幅が1.2~2.4mと極端に狭い。深さは各コーナー部分が浅く0.1mで他は0.15~0.2mを測る。周溝の断面形状は西周溝を除けば皿状で溝底は平坦である。なお、東・南周溝の構築に際しては墳丘部に存在する方形周溝墓の周溝を意識しているようであるが、東周溝では方形周溝墓の東周溝を一部切っている箇所が認められた。周溝内の埋土は8層に分層されるが、滯水を示す土層はなかった。

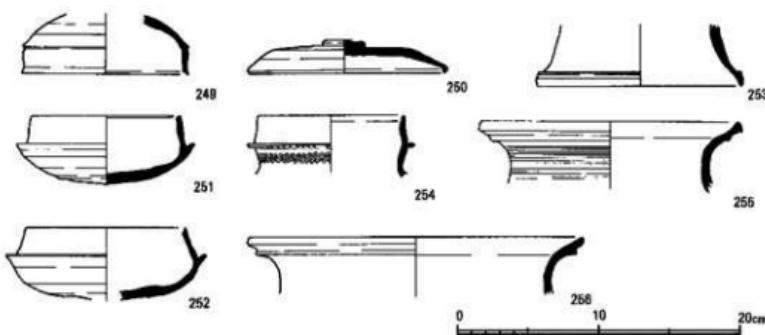
遺物は特に墳丘に沿った周溝の内側の第7層・第8層から古墳時代中期後半に比定される須恵器一壺（254）・甕（255・256）・杯蓋（249）・杯身（251・252）・高杯（253）、埴輪一円筒埴輪（257~266）・朝顔形埴輪（267~270）・形象埴輪（271~279）が出上している。

これらのことから、埴輪が存在した古墳であることが窺えるが、墳丘が完全に削平されており、現位置をとどめたものは皆無である。これら遺物に共伴して奈良時代に比定される須恵器杯蓋（250）の完形が1点出土しているほか、弥生時代のものと推定される敲石（280）が出上している。一部、扶桑遺物が含まれているが、古墳の構築時期はTK23型式段階と推定される。

出土遺物

須恵器

（254）は蓋が付く壺で口縁部の $\frac{1}{2}$ が遺存している。頸部に波状文が施文されている。（255・256）は甕の口縁部で、口縁端部に面を持つ（255）と丸く終る（256）がある。共に口縁部下半に一条の凸帯が巡る。杯蓋（249）は $\frac{1}{2}$ 程度が遺存している。穂はやや鈍いもので、口縁端部は段を有し内傾している。（250）は擬宝珠を有する杯蓋で口径14.2cm、器高2.1cm、つまみ径3.0cm、つまみ高0.4cmを測る。口縁端部が下方に垂下するものでMT21型式に対比されるもので、混入品と考えられる。杯身は2点（251・252）を図化した。共に $\frac{1}{2}$ 程度が遺存している。



第69図 2号墳出土遺物実測図-1

立ち上がりがほぼ直立して伸びる(251)と内傾する(252)があり、端部は(251)が内傾、(252)が段を有し内傾している。(251・252)がTK23型式に対比されよう。(253)は高杯の脚部である。

埴輪

埴輪類は埴丘上部ないしは周溝からコンテナ箱10箱程度が出土している。ただ、埴丘盛土が後世に改変され完全に削平を受けているため、埴輪樹立を示す痕跡等は認められない。山上位置でみれば、周溝内の埴丘ラインに近い部分に集中する傾向が認められた。出土した埴輪類は全て小片で、出土量の割には形状を把握できる資料が少なく、掘削の際に人為的に破砕されたものと考えられよう。また、全体に摩耗ないしは風化が著しく器面調整が確認できるものは全体の1割にも満たない。

2号墳から出土した埴輪の種類には、円筒埴輪・朝顔形埴輪のほか、形象埴輪には盾・人物・馬形埴輪がある。焼成で区別すれば、土師質のものと須恵質のものがあるが、量的には土師質のものが圧倒的多数を占める。

・円筒埴輪分類

I類 無黒斑で外面調整は1次調整のヨコハケ(B種ヨコハケ)が施されている。タガは台形で突出度が高い。土師質のものと須恵質のものがある。色調は土師質のものが赤褐色、須恵質のものが灰白色である。出土した円筒埴輪の比率からみれば極少量で、しかも包含層からの出土であることから2号墳、3号墳に関連するものとは考え難い。

II類 外面調整は1次調整のタテハケのみが施されるもので、細かいタテハケが右下方から左上方に施されている。土師質のものと須恵質のものがある。上師質のものは色調は橙色～灰白色で胎土は石英・長石の小砂粒が多量に含まれている。タガの断面形状から3類に区別した。

IIa類—タガが台形を呈するもの。IIb類—IIa類よりタガの突山度が低く、台形ないしは不整台形を呈するもの。IIC類—タガの断面形状が二角形を呈するもの。

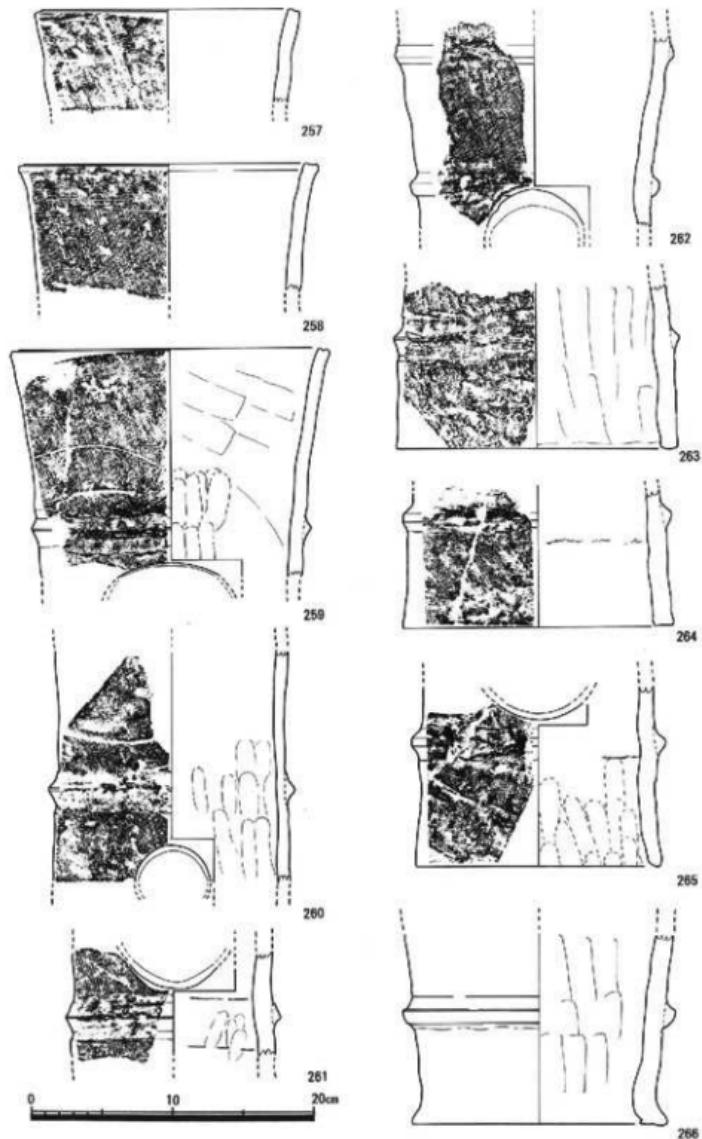
III類 外面に行われる1次調整のタテハケがII類に比して粗いもの。タガの断面形状では突出度の高い台形のものが多い。土師質のものと須恵質のものがある。I類と同様出土量は微量である。以上、I～III類に分類したが、全体の比率では、II類が大半を占めている。

2号墳出土埴輪

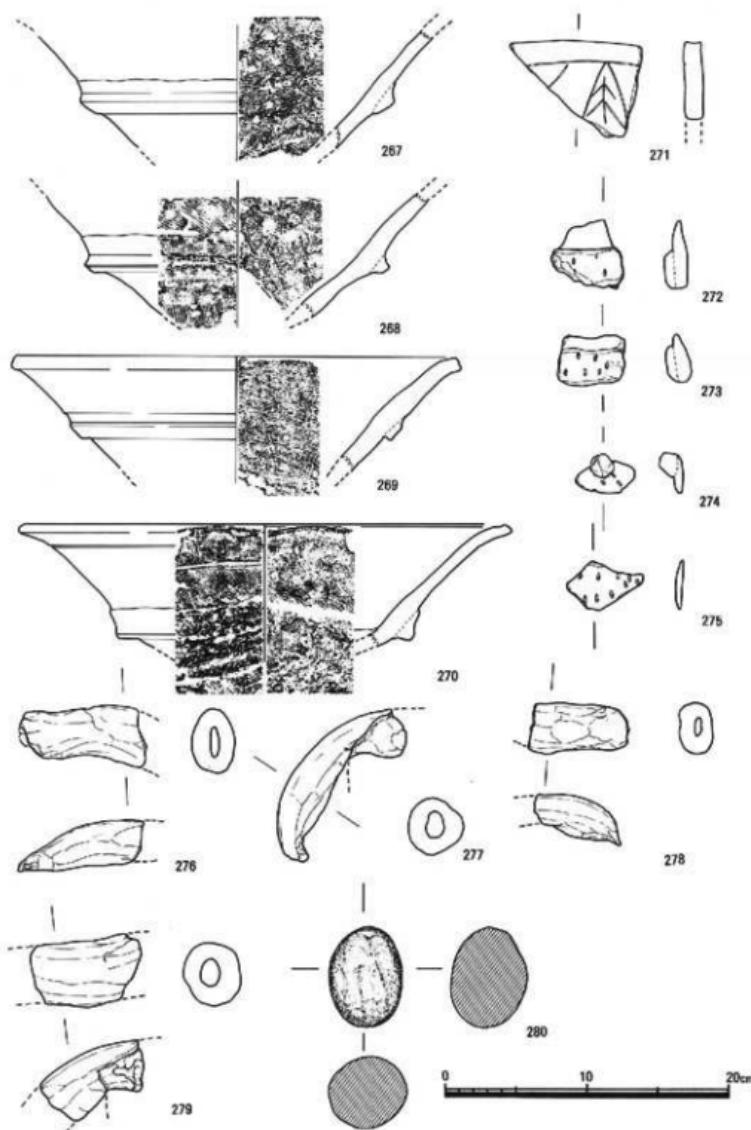
円筒埴輪

先述したように、全て小片のため全体が復元できるものはない。従って、一部形象埴輪の円筒部が含まれる可能性があるが、完全に識別できなかったため円筒埴輪として扱った。復元値でII径が19.5～22.4m、底径が18.2～19.9mを測る小型、中型を中心としている。

II縁部はゆるやかに外反して開くもので、端面の中央部がわずかに凹むものが多い。底部は



第70図 2号墳出土遺物実測図-2



第71図 2号墳出土遺物実測図-3

「ハ」の字形に聞くもの（264・265）のほか自重のため変形した（266）がある。

タガは台形のものと、突出度の低い三角形のものがある。外面調整は1次調整のタテハケのみが施されている。内面はユビナデを多用している。スカシ孔は全て円形である。焼成は土師質で無黒斑のものである。色調は灰白色の（260・263）以外は橙色である。円筒埴輪の分類で区別すれば、II a類が（262・264・265・266）、II c類が（259・260・261・263）である。なお、（259）の外面にはヘラ記号が認められる。

・朝顔形埴輪

4点（267～270）同化した。いずれも口縁部の資料で、図上復元できるもので、口径31.4～34.4cm前後を測る。タガの形状は三角形のもの（267）、不整台形のもの（268・269）があるほか（270）のように外面に面を有する大型のものがある。調整は外面が縱方向、内面が横ないしは乱方向にハケナデが施されている。色調は（267）が橙色で、他も本来は橙色と推定されるが風化のため灰白色を呈するものが多い。焼成は良好で、胎土に長石・石英の小砂粒が多量に含まれている。

・盾形埴輪

（271）は孤状に巡る1条の周線の内側に線刻で鐵の模様が描かれている。

・馬形埴輪

（272～275）は馬形埴輪の面繁の一部と推定される。4点は同一個体と推定される。革紐の表面には列点文を2段に配した装飾が行われている。明橙色の色調で、胎土には長石・石英・赤色酸化土粒が含まれている。

・人物埴輪

4個体（276～279）がある。いずれも、腕の部分で断面形状が梢円形で中空のものである。（276・277・279）が右腕、（278）が左腕である。（276）は筒状で厚みのある手首から薄くすることで手を表現したもので、指のうち小指、薬指以外が欠損している。（277）は右腕で、肩部から孤状を描いて手に至る。手は親指と他の指の区別が行われていて、指個々を分ける表現はされていない。腕の付け根に肩部と装着する部分が作られている。（278）は左腕の腕から手にかけてのもので、手には指の区別が表現されていない。（279）は右肩から腕に至るもので胸部との接合部は段状を呈している。

石器

石器類は敲石1点（280）が出土している。長径7.2cm、短径5.1cm、重さ250gを測る。使用痕が両エンド側に認められる。石材は砂岩である。混入品の可能性が高い。

3号墳（八尾南10号墳）

2号墳の北側で検出した。北部は調査区外に至るため全容は不明である。墳丘幅は南辺で13m前後を測る。周溝は幅4.2~5.3mを測るもので、2号墳と同様西周溝の幅が狭い。周溝の断面形状は皿状を呈し、深さ0.1~0.33mで、墳丘側が深く周溝の外側に行くに従って浅くなる傾向が認められる。周溝内の埋土は8層に分層できるが、そのうちの第1層・第2層については墳丘の削平に伴う堆積土層の可能性が高い。2号墳と同様墳丘部に沿った周溝の内側に堆積する第1・2層から土師器一隻（304）、須恵器一杯蓋（283~291）・杯身（292~301）・高杯（281・282・302・303）、埴輪・円筒埴輪（305~314）・朝顔形埴輪（315・316）・形象埴輪（317~325）の小片が多量に出土している。なお、須恵器の型式からみればTK23型式～TK209型式の新旧の型式が混在しているが、築造時期はTK23型式段階と考えられ、TK209型式段階まで、墓前祭祀が行われていたものと推定される。

出土遺物**土師器**

土師器で図化し得たものは壺1点（304）である。口縁部が完存しており、口径19.8cmを測る。体部外面に立ち上がりのタタキ、内面はナデ調整が行われている。胎上には長石・チャートの砂粒が多量に含まれている。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

須恵器

須恵器類は総数で23点（281~303）を図化したが、一部を除けばいずれも小片である。杯蓋は9点（283~291）を図化した。天井部が丸味を持ち稜を行する（283~287）とやや低い天井部で稜を持たない（288~291）に区別される。前者がTK23型式～MT15型式、後者がTK10型式～TK209に対比される。杯身は10点（292~301）を図化した。形態的には底部が平で深みのある体部を持ち、立ち上がりが内傾して長く伸びるもの（292~297）と浅めで丸い底部を持ち、立ち上がりが内傾して短く伸びる（298~301）に区別される。前者がTK23型式～MT15型式、後者がTK10型式～209型式に対比される。高杯は4点を図化した。（281・282）は有蓋高杯のつまみ部分で上部は内側にくぼんでいる。（302）は杯部、（303）が脚部である。

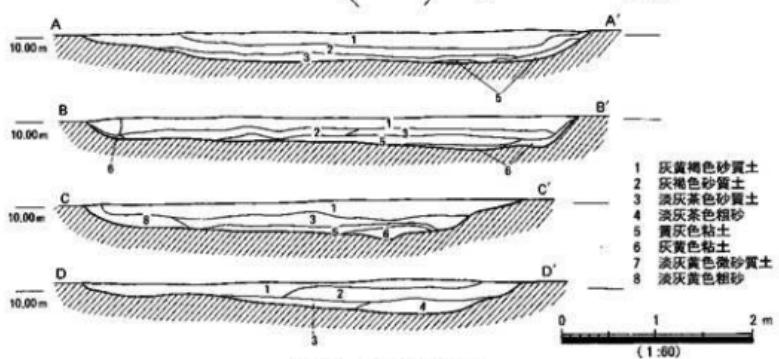
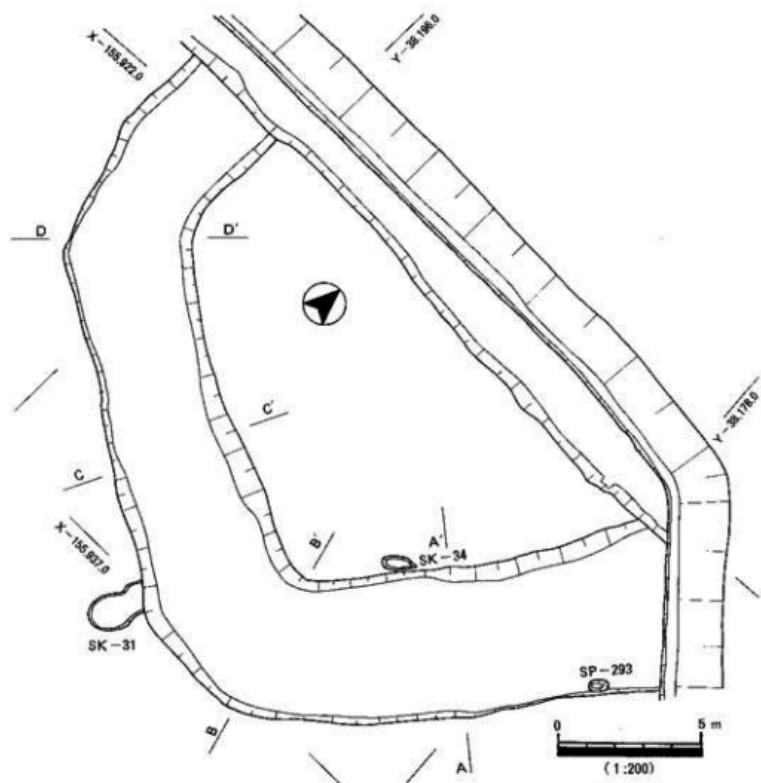
埴輪

埴輪類は周溝の内部を中心に出土している。量的にはコンテナ10箱程度が出土しているが、2号墳と同様小片が中心で遺存状況が不良なものが大半を占めている。

埴輪の種類では、円筒埴輪・朝顔形埴輪のほか形象埴輪には盾形埴輪・馬形埴輪・人物埴輪・太刀形埴輪がある。

・円筒埴輪

円筒埴輪は10点（305~314）を図化している。全て小片化しており、全容は不明であるが図



第72図 3号填断面図

化したものから口径18.6~24.0cm、底径15.8cm程度の規模が推定される。タガは三段に巡らされており、断面形が突出度の低い台形ないしは不整台形を呈している。器面調整は外側がタテハケ、内面はハケないしは指ナデである。スカシ孔は円形である。焼成は(314)が須恵質でそのほかは無黒斑の上質である。円筒埴輪分類(P-85参照)ではIIa類が(314)、IIb類が(306・307・309~313)、III類が(308)である。色調は須恵質の(314)が灰白色のほかは橙色~黄橙色である。焼成は良好で、胎土には長石・石英粒が多量に含まれている。2号埴出土の円筒埴輪との比較では、2号埴がIIa類・IIc類が多いのに比して、3号埴ではIIb類が多いようである。また、口縁端部の形状においても、2号埴出土のものには端部にくぼみがあるが、3号埴出土のものは水平な面を持つなどの差異が認められる。

・朝顔形埴輪

(315)は口縁部で器面調整は内外面共にやや粗目ハケ目が施されている。(316)は全体に風化が著しいものでタガは突山度の低い形態化したものである。

・盾形埴輪

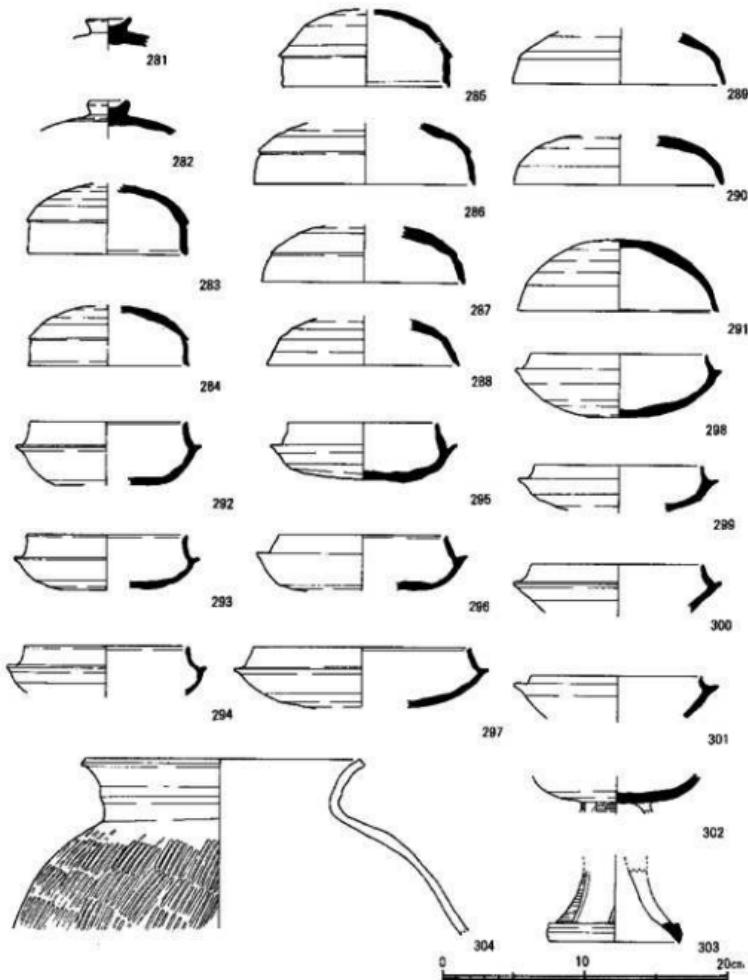
盾形埴輪は3点(317~319)を図化した。所謂石見型盾形埴輪と称されるもので、(317・318)は同一個体で(319)は外縁の圓線が2本あるため、別個体と推定されるが3点共に作風が類似しており、同一工人の手によるものと考えられる。いずれも、ハケにより盾面が平滑にされた後に退化した直弧文が線刻されている。(317)が最上段の右端、(319)が最上段の左端、(318)が盾面の反りから最下段の左端と推定される。(317・318)に断面の形状が方形を呈する穿孔が斜め方向に穿たれている。

・馬形埴輪

(320)は鏡板と推定される。上部以外の面が完存しており幅7cm、厚さ1cmを測る。上面に径1.5cm、厚さ4mmを測る円形の粘土長が2個貼り付けられており、飾錦を表現したものと考えられる。両面ともにナデにより平滑にされている。焼成は良好で色調は淡橙色である。胎土には小砂粒が少量含まれている。(321)は尻尾である。先端は上方に反っており、その部分に粘土紐が螺旋状に巻かれている。尾は中空の円形で、先端に行くに従って幅を減じ、先端部分では中実の円錐形を呈している。尻との接合部分の補足粘土は特に下部において頗る著である。ナデにより全体を丁寧に仕上げている。浅黄橙色の色調で胎土は精良である。

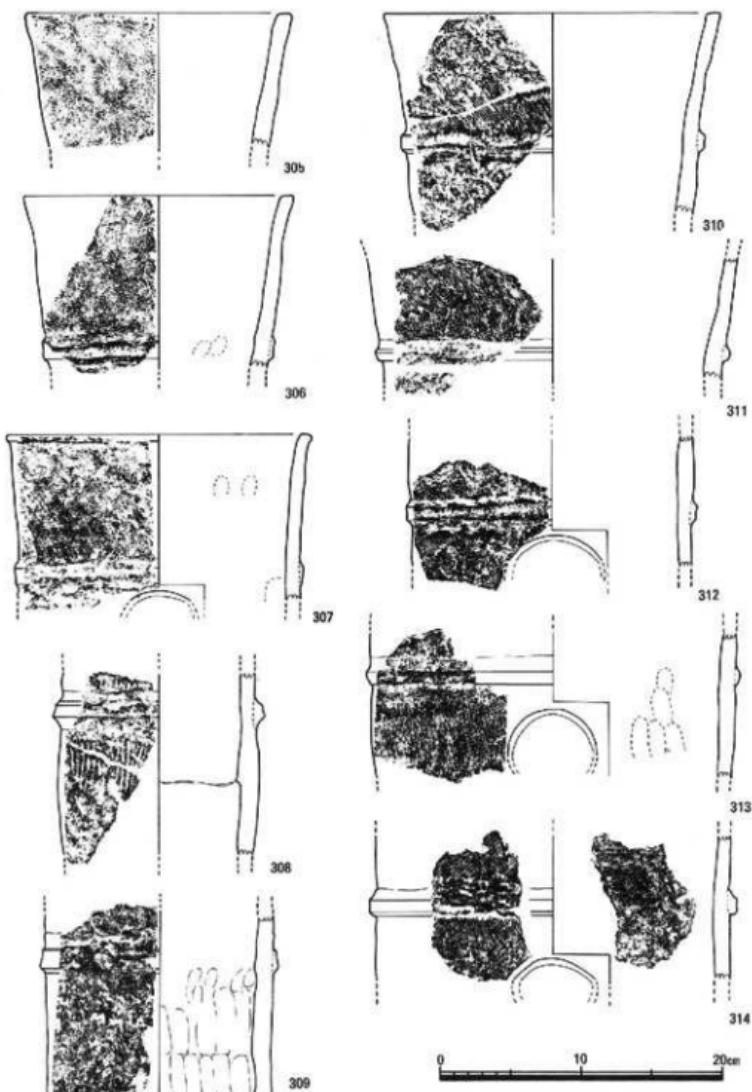
・太刀形埴輪

(322)は柄頭から柄間にかけて破片である。柄頭は梢円錐台形を呈するもので、最大幅5cm、最小幅3.6cmを測る。柄縁は中央部が円錐状にくぼみ、その上下にV字状の切り込みが認められるもので、上部の切り込みを挟んで幅9mm、高さ4mm程度の突起が作られている。柄間の形状は中実の円形である。全体に丁寧な作りで、器面はナデにより平滑にされている。焼成

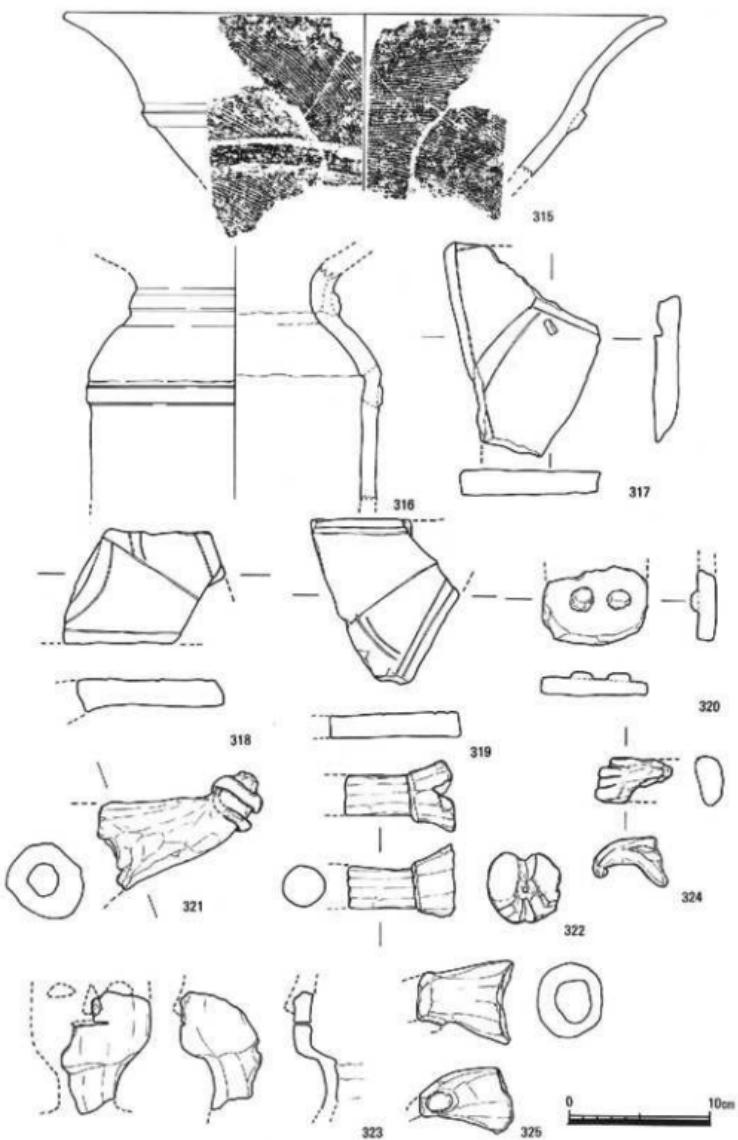


第73図 3号墳出土遺物実測図－1

胎土は良好で、色調はにぶい橙色である。大阪府東大阪市の大賀世3号墳出土の太刀形埴輪に酷似している。



第74図 3号墳出土遺物実測図-2



第75図 3号墳出土遺物実測図-3

・人物埴輪

(323) は左顔面から首部にかけての破片である。顔面から首部にかけて丁寧なユビナデが施されている。顔面内面は成形時の指押えの痕跡が認められるほか、首部内面には粘土紐の痕跡が遺存している。(324・325) は人物埴輪の胸から手にかけての資料で(324) が左腕、(325) 右腕である。(324) は指先を内側に曲げた形状で、指間を分ける表現が忠実に行われている。(325) は中空で楕円形を呈するやや太めの腕が幅を減じて手に至るもので、楕円形で小さく突起する部分が親指を表現したものと考えられるが、他の指は欠損しており不明である。(323～325) は共に淡褐色の色調で、焼成は胎土ともに良好である。

西区包含層遺物

第4層からは弥生時代後期および古墳時代中期・後期を中心とした遺物がコンテナ箱で10箱分が出土している。地点毎の出土遺物の分布密度については、遺構の検出を見なかった北西部が疎であるほかは、普遍的に出土しているが2号墳・3号墳を検出した調査区の北東部では墳丘の削平に伴う二次堆積のかたちで多量の埴輪類が出土している。遺物の時期別の比率では、古墳時代中期を中心としたものが大半を占めている。109点(326～434)を図化した。内訳は土師器・壺(326)・壺(327～334)・半底鉢(335～337)・盤(338・339)・高杯(340・341)、須恵器・杯蓋(342～352)・杯身(353～369)・壺(370・380)・壺(371・372)・高杯(373～379)・甕(381)・器台(382～385)、埴輪-朝顔形埴輪(386～392)・円筒埴輪(393～411)・衣笠形埴輪(412～417)・盾形埴輪(418～420)・羽形埴輪(421～427)・馬形埴輪(428～432)・鶴形埴輪(433)・不明(434)である。

土師器

(326) は中型の直口壺である。茶褐色の色調で胎土に角閃石・長石粒が多量に含まれている。時期的には古墳時代中期より遡る可能性がある。(327～334) はいずれも大型の長胴壺と推定される。(327) は口縁部端部が内側にわずかに肥厚するもので、布留式甕の最終形態のものである。そのほか、口縁部の形態で区別すれば「く」の字のもの(328・330・333)、直上にわずかに伸びた後外反する(329)がある。(334) は接地面の大きい平底の底部である。外面調整は(329)以外はハケナデ、内面調整は(329)のみがヘラケズリで他はハケナデである。平底鉢は3点(335～337)を図化している。底部外側面が丸味を持って立ち上がる(335・336)と丸味を持たずに立ち上がる(337)がある。(335)は1/2以上残存しており、口径10.6cm、器高10.1cm、底径5.2cmを測る。外面調整は(335)が単位幅の大きいハケナデ、(336・337)は風化が著しく不明瞭である。3点共に淡赤褐色の色調で、胎土には長石・石英の小砂粒が含まれている。(338・339)は盤である。(339)には角状の把手が付いており、上面にはヘラにより深い切り込みがあるほか、下面には棒状工具による刺突(径4mm、深さ2mm)が1ヶ所穿た

れている。(340・341)は楕形の杯部を持つ小型の高杯である。(340)の杯部外面は下半には放射状にハケナデが行われている。共に赤褐色系の色調で胎上は精良で、焼成も良好である。

須恵器

杯蓋は11点(342～352)を図化した。(347・352)の完形品を除けば1/2程度が遺存している。小型の(352)およびやや大型の(344・345)のほかは、口径11.2～13.2cm、器高4.1～4.7cmを測る。天井部の形態では、丸味をもつもの(342・346)、平らに近いもの(347・350・351)、上面が凹状のもの(348)に区別できる。稜はいずれも鋭く、口縁部が下外方ないしは垂直に下る。(348)の天井部にはカキメ状の条線が残る。色調は外面は淡紫灰色、内面が赤褐色で焼成が不良な(348)を除けば青灰色ないしは灰白色を呈し焼成も良好で堅緻である。これらの杯蓋はTK216型式に対比されよう。一方、口径14.8cm、器高4.6cmを測る(344・345)は丸味のある天井部を持つもので、稜の先端が丸く下方に明瞭な沈線が巡るもので、型式的にも前者よりは新しくTK15型式に対比されよう。(352)は完形品で口径11.2cm、器高3.5cmを測る。TK209ないしはTK217型式に対比される。杯身は17点(353～369)を図化した。(353)は1/2以上が遺存している。口径9.8cm、器高4.1cm、底径8.2cmを測る。TK85型式に対比される。杯身(354～368)は口径9.2～12.4cm、器高4.2～5.5cmを測る。立ち上がりの角度は直立して伸びる(368)以外は内傾している。口縁端部は丸く終るもの(356・357・358・360・363・364)平坦なもの(355)、平で内傾するもの(354・359・361・365・367)、尖り気味で終る(369)がある。受部の方向では、水平に伸びるもの(355・363・364・365・366)のほかは外上方に伸びる。底体部の形態では丸底で深い体部をもつ(360・362)のほかは丸味をもつものと、平に近いものに区別される。(362～364)の底面に「+」のヘラ記号が認められる。焼成が不良で灰白色を呈する(355)以外は青灰色の色調で焼成も良好堅緻である。TK216～208型式に対比される。(369)は浅い体部に小さく内傾する立ち上がりが付くもので、TK209型式ないしはTK217型式に位置付けられる。壺(370)は口縁部と頸部の境に凸帯を一条巡らすことにより、複合口縁を強調している。灰白色的色調で焼成はやや不良である。(371・372)は口径部が大きく外反するもので、外面の凸帯は(371)が1条、(372)が2条巡らされており、共に凸帯間に波状文による装飾が行われている。高杯は7点(373～379)を図化している。(373・374)は無蓋高杯の杯部で共に1/2程度が遺存している。共に口縁部下半に2条、体部中位に1条の凸帯を巡らせ、凸帯間に波状文を施している。(378)は杯部を欠くが無蓋高杯と推定される。有蓋高杯は4点(375～377・379)で、そのうち蓋が3点(375～377)である。(375)は完形品で口径12.0cm、器高4.3cm、つまみ径2.0cm、つまみ高0.7cmを測る。TK208型式に属するものである。(377)は天井部に櫛描刺突文が二段にわたって施文されている。(379)の脚部外面にはカキ目調整が施されており、(375～377)よりは後出のTK47型式に比定される。

(380) は短頸壺で口縁部に一部を欠くほかは完存している。口径8.3cm、器高7.0cm、体部最大径12.2cmを測る。体部上位に木の葉の痕跡が認められる。(381) は扁球形の体部を有する甌で体部の1/2が遺存している。体部中位に櫛描刺文が施文されている。器台は4点(382~385)を図化している。(382) は楕形を呈する器台杯部である。杯部外面の中位から上位にかけては凸帯と波状文で構成される装飾、中位以下はタタキ調整が施されている。色調は外面が灰色、内面および器肉部分が紫灰色である。杯部内面に自然釉が認められる。(383・384) は器台脚部で外面には凸帯と波状文で構成される装飾が施されている。スカシ孔は方形である。色調は(383) が青灰色で器肉部分が紫灰色、(384) が灰白色である。(385) は脚部の一部が遺存しているのみで全容は不明であるが、他資料からみれば大きく斜上方に張り出す突帯よりさらに上部に筒状に立ち上がった後、杯部が形成される形態が推定される。脚部のスカシ孔は一角形である。色調は灰白色である。

埴輪

・朝顔形埴輪

7点(386~392)を図化している。(386~388) が頸部から口縁部、(389~392) が肩部から胸部にかけてのものである。焼成は(386・388・389) が上師質、(387・390~392) が須恵質ないしは半須恵質である。(387) は口縁部内面にヨコないしはナナメハケが施されている。(390~392) は外面がタテハケ、内面が指ナデである。出土位置から(386・389・390・392) が2号墳、(387・388・391) が3号墳に伴うものと推定される。

・円筒埴輪

円筒埴輪は19点(393~411)を図化している。大半が小片のため全容を知り得るものはない。焼成で区別すれば土師質・半須恵質・須恵質のものがあるが量的には土師質のものが9割以上を占めている。(393~395) は口縁部の資料である。端部は水平でやや内傾している。器面調整は外面がタテハケ、内面が(394・395) がナナメハケ、(393) が指ナデである。(394・395) はタガの形状からII a類に分類される。(393) が土師質、(394) が須恵質で(395) が半須恵質である。(396~411) は胸部から底部にかけての資料である。I類に分類されるものは(396・397・407) で外面にヨコハケ(B種ヨコハケ)が施されている。(396・397) が上師質、(407) が須恵質である。I類は掲載した3点のみの出十であるため2号墳・3号墳に伴うものとは考えられない。II a類は(398~400・402・403・408~411) である。外面調整では細いタテハケ(398・399・404・408) のものと粗いタテハケ(400・402・403・409・410) がある。焼成では上師質(398・402・403)、半須恵質(399・404)、須恵質(400・408~411) のものがある。II b類は(401・406) の2点である。外面調整は(401) がタテハケであるが(406) は風化のため不明である。焼成は共に上師質である。II c類は(405) の一点のみで、外面調整はタテ

ハケ、焼成は土師質である。出土位置から（393・398・402・406・409～411）が2号墳、その他は3号墳に伴うものと推定される。

・衣笠形埴輪

衣笠形埴輪は6点（412～417）を図化した。（412）は笠部で、端部に幅3cmを測る突帯が巡っている。突帯部分がヨコナデ、他はタテハケである。25D地区出土。（413）は笠部から円筒形台部にかけてのもので、全体に風化が進んでおり、等部の一部でタテハケ調整の一部が観察される程度である。25D地区出土。（414～416）は立ち飾り、（417）は軸部である。（414～416）は器面をハケナデにより平滑にした後、両面に線刻により装飾が施されている。（414）が23C地区、（415）が24D地区、（416）が24C地区出土。（417）は中空の円筒形を呈するもので、径5.5cm、検出長8.0cmを測る。23C地区出土。出土位置から見て、全て3号墳に伴うものと推定される。

・盾形埴輪

3点（418～420）を図化した。（418）は盾面の左側部分で、円筒部との接合部分に沿って割れている。盾面および裏面に方形の穿孔が1個づつ穿たれている。（419）は盾面の左側部分である。（420）は盾面上部の左端の部分で、色調や調整からみて3号墳出土の（317）と同一個体と考えられる。出土位置は（418・419）が24D地区、（420）が25D地区であることから、3号墳に伴うものと推定される。

・鶴形埴輪

7点（421～427）を図化した。小片のため詳細は不明であるが、表面のみに線刻が認められることや、盾形埴輪裏面にみられるような円筒部との接合関係が認められない点、さらには矢印形が表現されている特徴から鶴形埴輪とした。（421～423）は同一個体と考えられるもので、（421）が右上部、（422・423）が左上部と考えられる。23C地区出土。色調は浅黄橙色で、胎土は僅少量含まれてる小砂粒のほか、継状に広がる白色土が全面で観察できる。（424）は表面がわずかに内側に反っているもので、表面全体にハケ調整が施されている。24D地区出土。（425）は最上部左端にあたるもので輪郭に沿って2本の条線が線刻されている。23C地区出土。（426）は矢印により矢を表現している。24D地区出土。（427）は器面をハケ調整で平滑にした後、線刻による矢形およびその周辺に円形の押型文を配するもので、矢筒部を表現したものと推定されるが小片のため詳細は不明である。24E地区出土。出土位置から見て（427）が2号墳、その他の3号墳に伴うものと推定される。

・馬形埴輪

（428）は鞍の破片と推定されるもので、上部から側面にかけて縦方向に突帯が巡っており、この部分が鞍橋の前輪を表現したものと推定される。24C地区出土。（429）は尻尾で先端部分

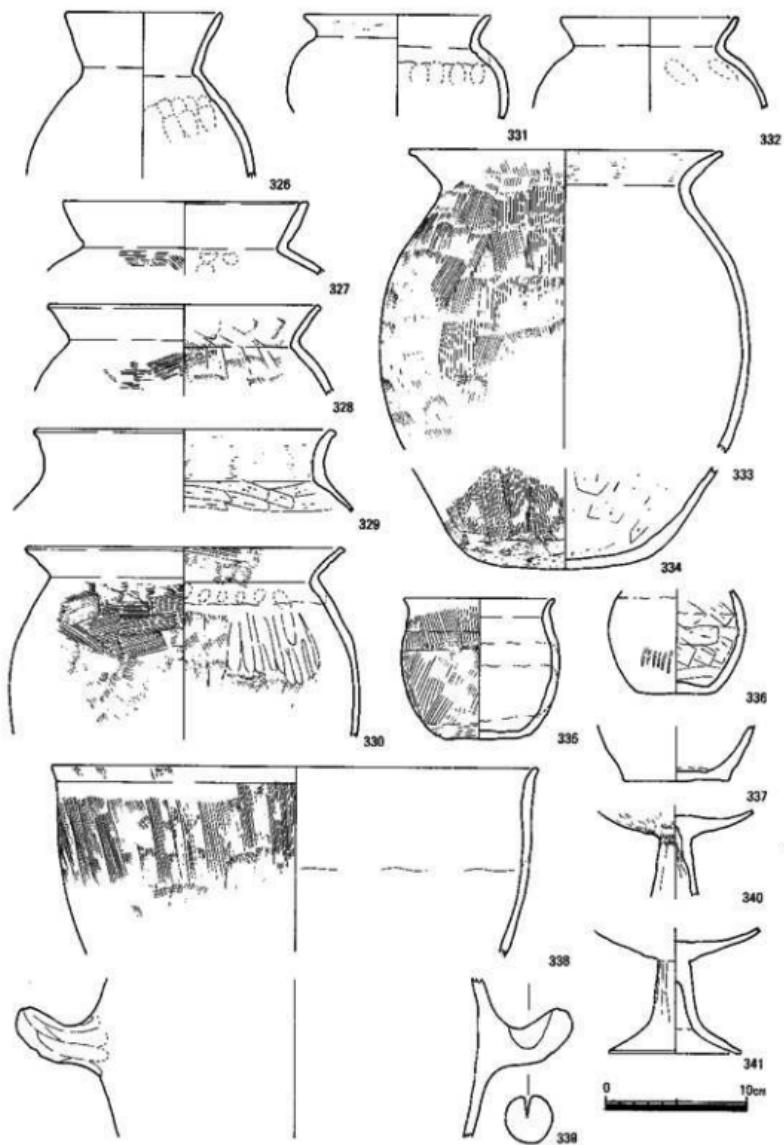
は上方に上がっている。途中までは梢円形で中空であるが先端部分は中実である。尾の先端部分には粘土紐が螺旋状に巻かれ結束状況が表現されているが、一部を残して剥落している。24D地区出土。(430～432)は同一個体で、(430)に見られる革紐に続く部分を杏葉と推定すれば、尻繋の革紐を表現したものと考えられる。革紐の表面には、列点文を1段ないしは2段に施されている。3点共に25E地区出土。出土位置から(428・429)が3号墳、(430～432)が2号墳に伴うものと推定される。

・鶴形埴輪

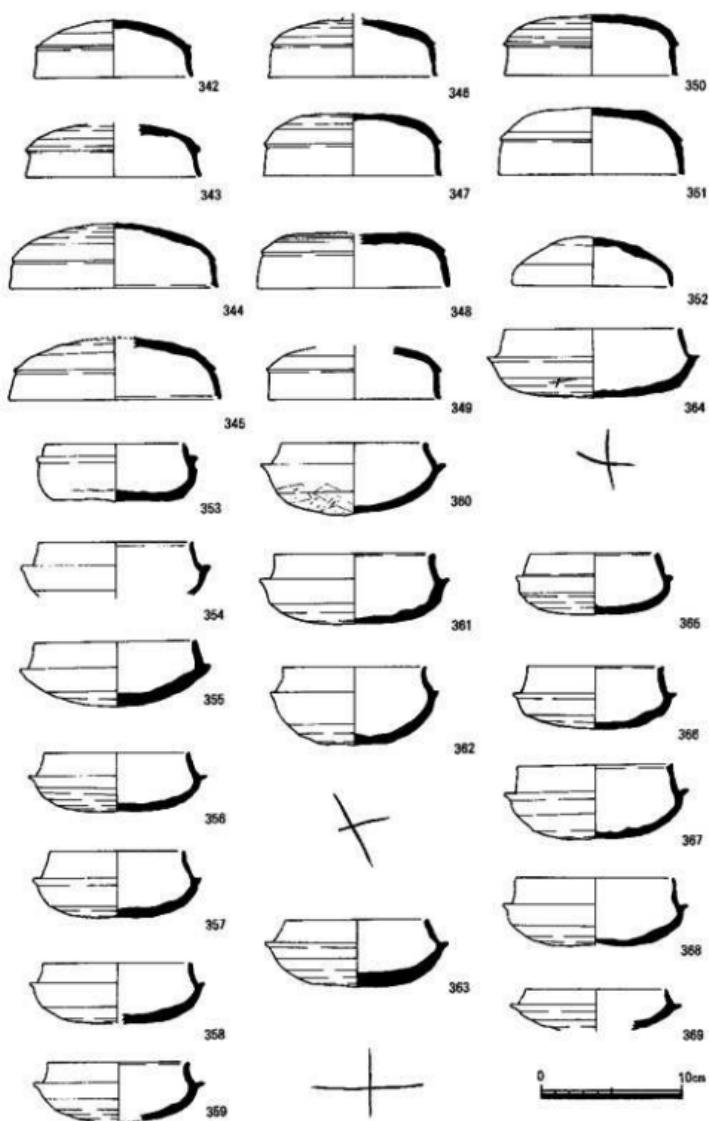
(433)は鶴形埴輪の首部から頭部にかけて遺存しており、現存高9.6cmを測る。中空の首部上端に頭部が写真的に表現されている。鶴冠は欠損しており本末の形状は不明である。目には小円孔が穿たれているほか、耳は円形浮文で表現されているが一方は剥落している。25F地区からの出土であるため2号墳に伴うものと推定される。

・不明埴輪

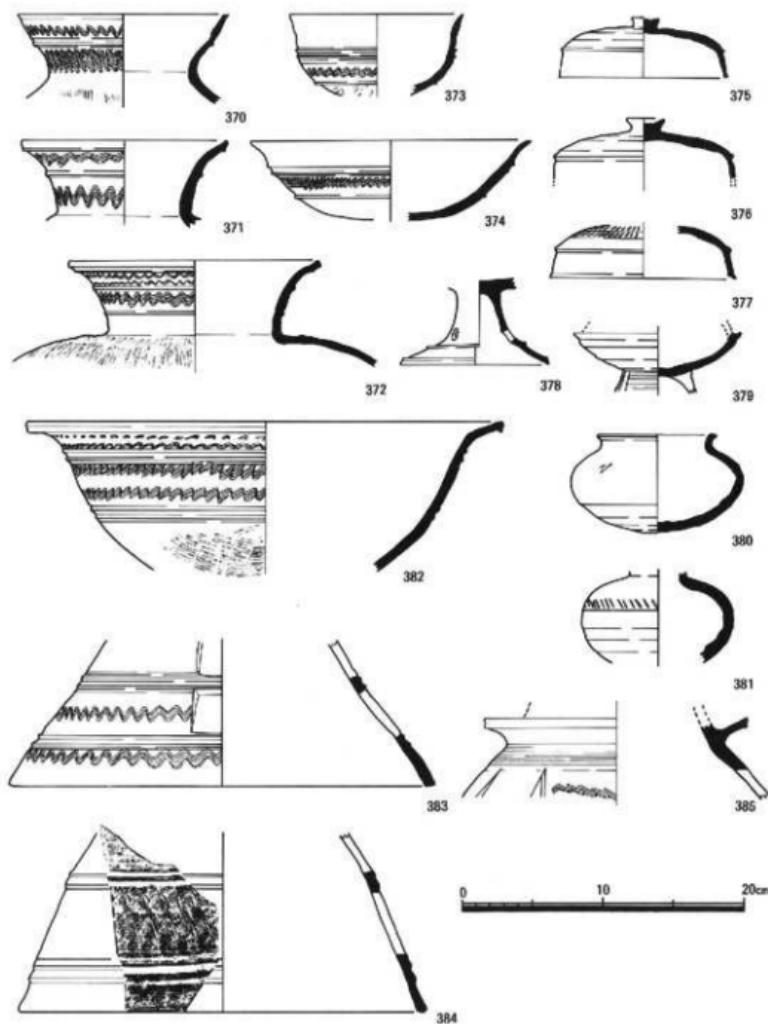
(434)は大型の埴輪片で遺存部分で長さ33.6cm、幅13.8cmを測る。幅広の板状部分に幅4cm前後、厚さ1cm前後を測る短い板状部が「L」字形に取り付くもので、直線的に伸びた後、内湾するが、それより先は欠損しており不明である。形状からは家形埴輪の破風板とも考えられるが、端面部分は全て完了する形で、接合の痕跡も確認できない。なお、出土地点は埴輪類が出土した2号墳・3号墳からやや離れた28F地区から出土しており、埴輪以外の可能性も考えられる。



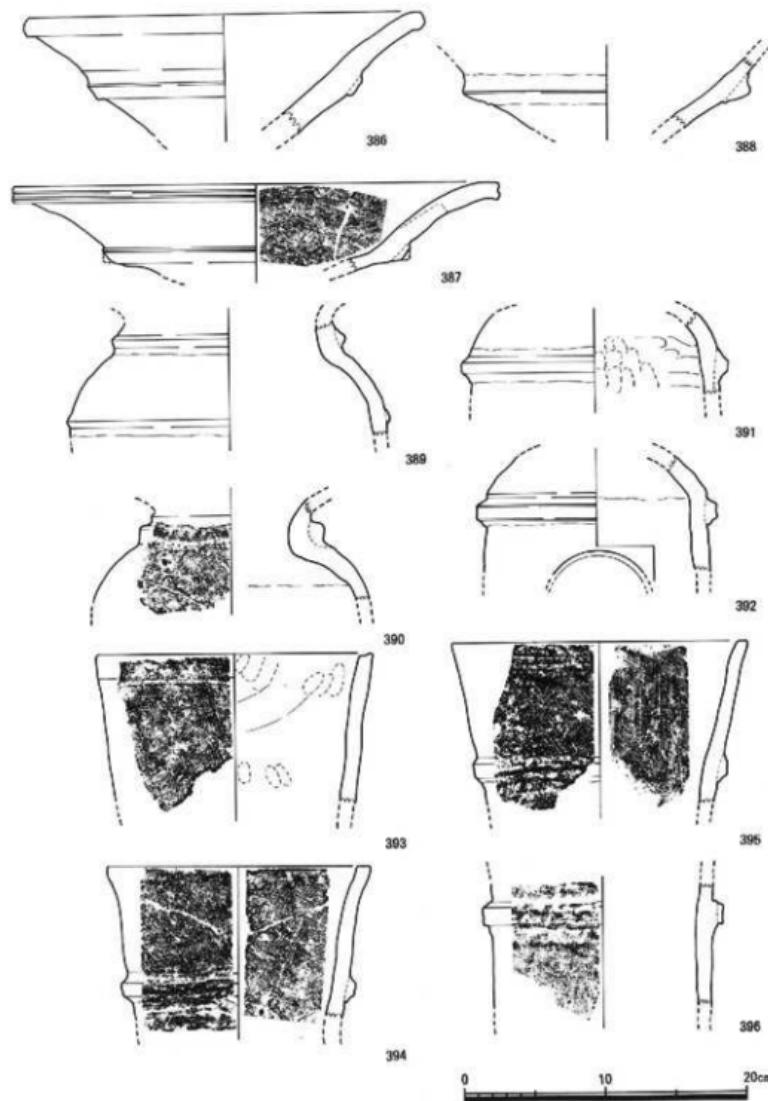
第76图 西区第4层出土遗物实测图 - 1



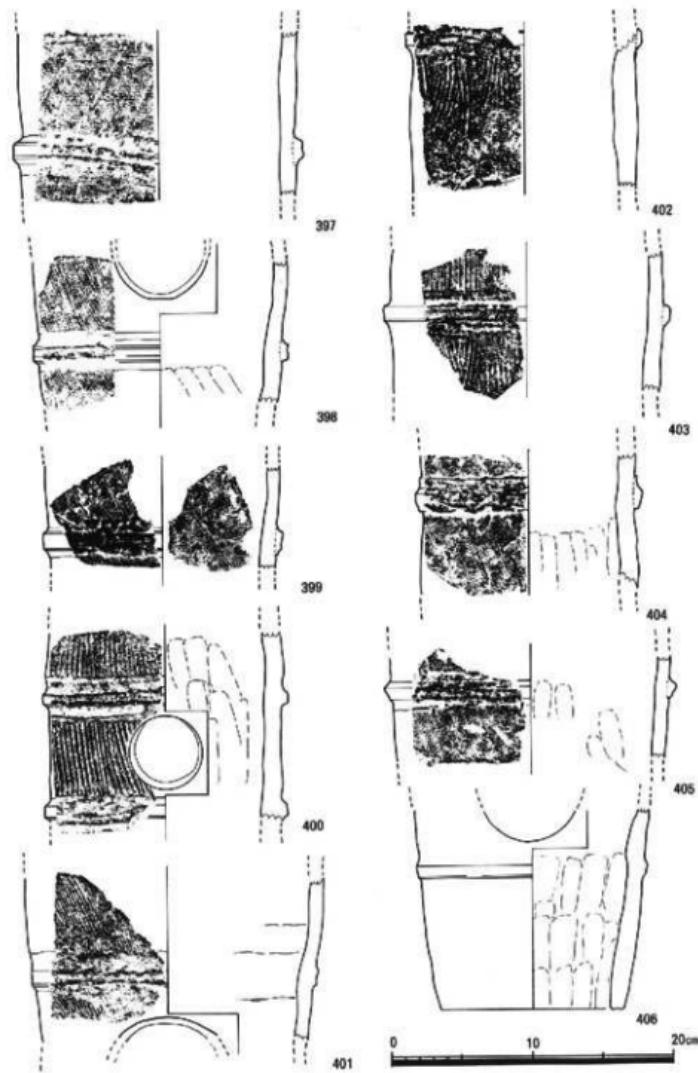
第77図 西区第4層出土遺物実測図-2



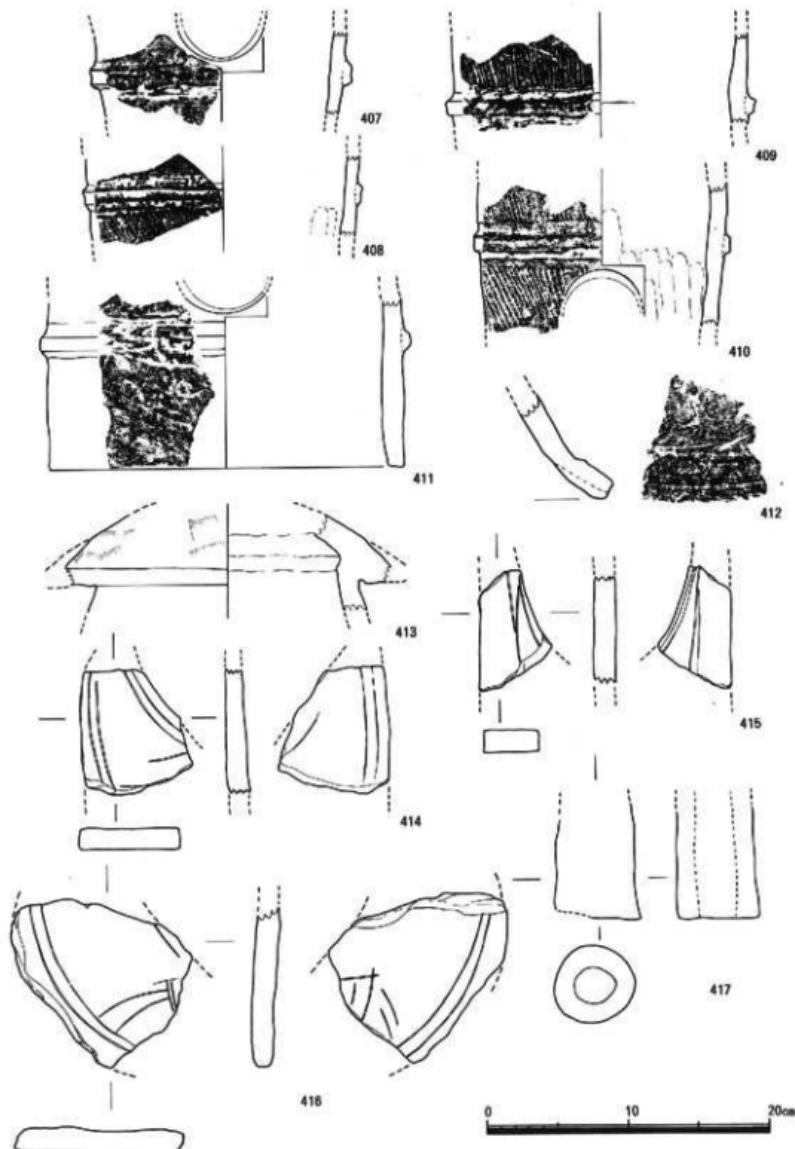
第78圖 西區第4層出土遺物實測圖 - 3



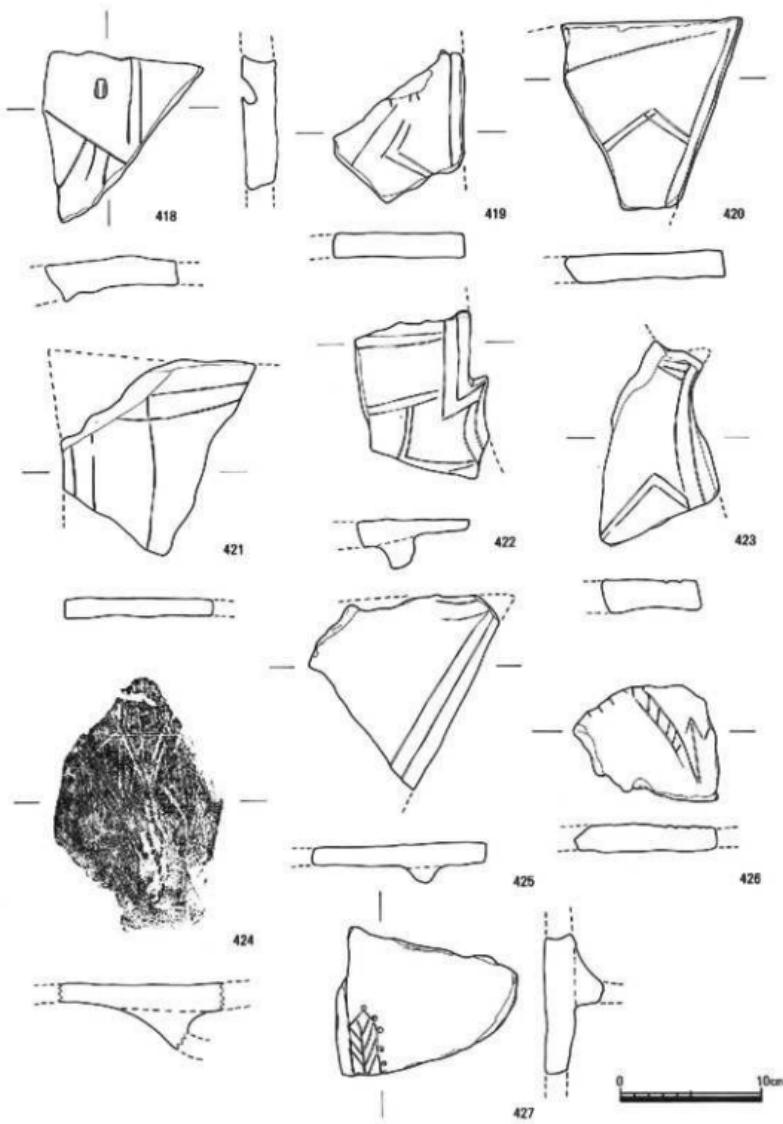
第79図 西区第4層出土遺物実測図-4



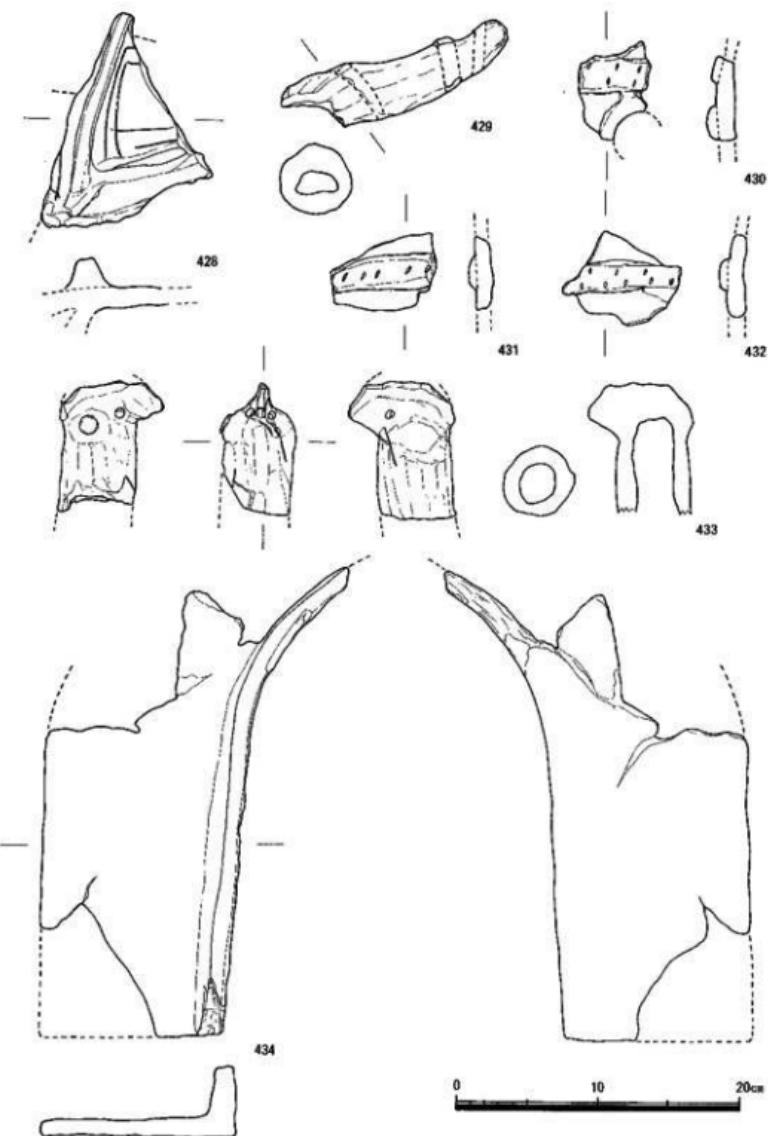
第80図 西区第4層出土遺物実測図—5



第81図 西区第4層出土遺物実測図-6



第82図 西区第4層出土遺物実測図－7



第83図 西区第4層出土遺物実測図-8

第4節 下層確認調査（旧石器時代相当層の調査）

（1）八尾南遺跡における旧石器調査の現状

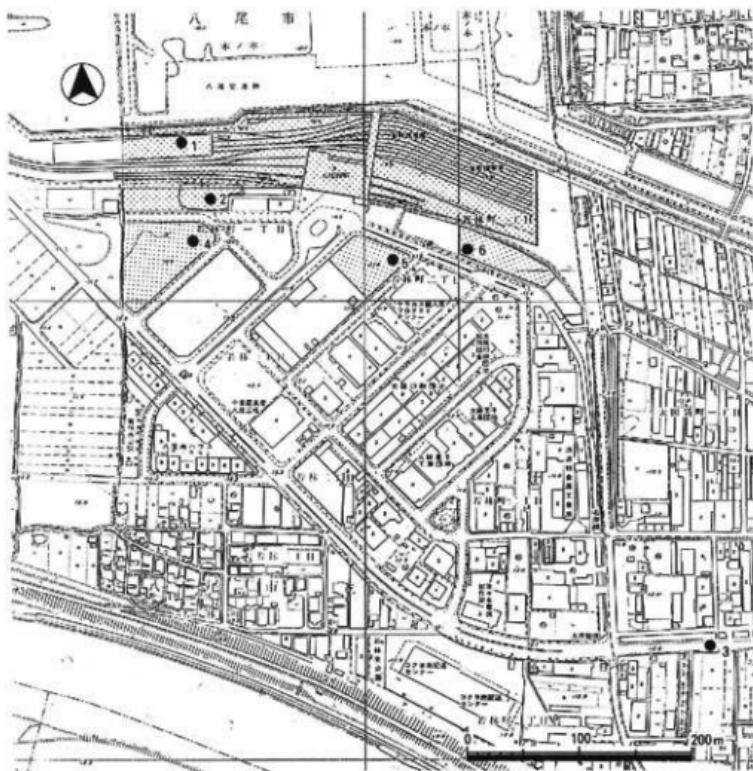
八尾南遺跡に西接する大阪市の長原遺跡で、1978年度に長原遺跡調査会により実施されたNG14次調査で、沖積層下の從来「地山」と考えられていた地層から旧石器が発見されて以来、長原遺跡・八尾南遺跡では同時期の遺物包含層の存在が注目されてきた。これらの調査以降、現在（平成7年3月）に至るまで両遺跡の約30ヶ所で旧石器の出土が報じられている。八尾南遺跡内で旧石器を検出した主な調査としては、1984年に当調査研究会が実施した八尾南遺跡第2次調査（八尾南遺跡第2地点）、1987年に大阪府教育委員会が実施した八尾南遺跡第3地点の調査、1989～1990年に大阪府教育委員会が実施した八尾南第6地点の3点があげられる。

八尾南遺跡第2地点の調査は、大阪府住宅供給公社の分譲住宅建設に伴うもので、調査面積は2,500m²を測る。旧石器は、調査区東部の径30mの範囲で検出された4ヶ所のブロック（Aブロック～Dブロック）を中心に出土している。石器類はT.P.+8.60～8.70m付近に存在する10層濃灰色シルトおよび11層乳青灰色粘土から出土しており、垂直分布では5～15cm程の深度幅が認められた。石器の内訳はナイフ形石器16点、石錐5点、搔器1点、抉入搔器1点、削器2点、石核6点、剥片・碎片418点で、石材はチャート6点と縁泥片岩1点を除けばサヌカイト製である。特にCブロックからは、石器類ほか剥片生産技法を知るうえで有効な接合資料が出土している。出土したナイフ形石器は、長さ2～3cmの小型で2側縁加工が認められるものが中心である。これらの小型ナイフ形石器は、斎一性の高い国府型ナイフ形石器に比して、形態変化に富むもので、素材となる剥片生産技法においても、瀬戸内的な横剥ぎの伝統を留めていない。

八尾南遺跡第3地点の調査は、下水管埋設工事に伴う調査（87-1調査区）で、5×6.5mという狭い範囲から石器類が集中して出土している。旧石器は、第8層・第9層・第12層・SX01から出土しており総数で417点が出土した。石器の内訳は、ナイフ形石器24点、角錐状石器1点、スクレイバー2点、石核19点、剥片12点、碎片186点である。垂直分布はT.P.+9.00mを中心に30～50cmの幅がみられるが、母岩別の分布状況や接合関係から1つの石器群であることが確認されている。ナイフ形石器の素材となる剥片生産技術においては、瀬戸内技法を作うものが少なく、打点と作業面とが交替する「不定形の横剥ぎ」を特徴とする櫛石島技法が主体を占めていることが指摘されている。

八尾南遺跡第6地点の調査は、大正川流域調整池築造に伴うもので、3,016m²におよぶ調査区域のなかの西隅部分の第11層から2909点におよぶ石器類が検出されている。水平分布は、10ヶ所のブロック（1ブロック～10ブロック）と拡散的分布域1ヶ所から出土している。垂直分布については、T.P.+8.0mを中心に10cmの幅が認められる。石器組成としては、小型ナイフ

I 八尾南遺跡第8次調査(YS87-8)



第84図 八尾南遺跡旧石器出土地点位置図

第5表 八尾南遺跡旧石器出土地点調査一覧表

地点	所在地	調査主体	調査期間	文 献
1	若林町1丁目	八尾南遺跡調査会	1978.4～1980.3	『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会 1981.3
2	若林町1丁目49	当調査研究会 (YS83-2)	1984.1～1984.7	『旧石器考古学38』1989.5
3	太田3丁目	大阪府教育委員会	1987.4～1987.6	『八尾南遺跡－旧石器出土第3地点－』 大阪府教育委員会 1988.3
4	若林町1丁目87	当調査研究会 (YS87-8)	1987.5～1988.1	『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』 脚八尾市文化財調査研究会報告16 1988.12
5	若林町1丁目76-3	当調査研究会 (YS88-13)	1988.9～1989.2	『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』 脚八尾市文化財調査研究会報告25 1989.12
6	若林町1丁目25	大阪府教育委員会	1989.7～1990.6	『八尾南遺跡－旧石器第6次地点の調査－』 大阪府教育委員会 1993

形石器を主体としており、そのほかにスクレイパー、ノッチ、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、彫器がある。石材はサスカイトが大半でチャートが微量含まれている。石器群の特長としては、瀬戸内技法に関する資料が含まれていないことや、ナイフ形石器は2~3cmの小型が中心で、石器の素材となる剥片生産技法として、櫛石島技法および求心的な周辺剥離技法が見られことなどである。以上のように、八尾南遺跡内では3地点で良好な資料が検出されており、各地点出土のナイフ形石器の形状や素材となる剥片生産技法の違いから八尾南遺跡第3地点→八尾南遺跡第6地点→八尾南遺跡第2地点という変遷が示されている。これらの3地点を含めて、八尾南遺跡では6地点から旧石器が出上している。

このように、八尾南遺跡・長原遺跡の南部では近年旧石器の検出例が増加している。これらの成因としては、両遺跡が河内台地につながる低位段丘が河内低地の沖積層下へ没する地点に立地しており、旧石器時代相当層が地表面から比較的浅い位置に存在しているといった地形的条件や、地下鉄谷町線延伸工事以降この地一帯の市街化が急速に進行し、それに伴う調査件数が増加した結果と考えられている。また、長原遺跡を中心とした肩位学的な細分化が、調査精度を高めた結果、旧石器の検出例を増加する一因となったほか、陥没時期の明確な広域火山灰の存在は、各地点出土の旧石器群の先後関係を明かにする上で鍵層の役割を果たしている。両遺跡の広範囲にわたる旧石器の出土例は、河内平野周辺で面的に捉えることが希なこの時期の石器群の様相を考えるうえで示唆に富む資料を提供しており、長原・八尾南遺跡が後期旧石器時代を代表する標識遺跡として認識されるようになってきた。

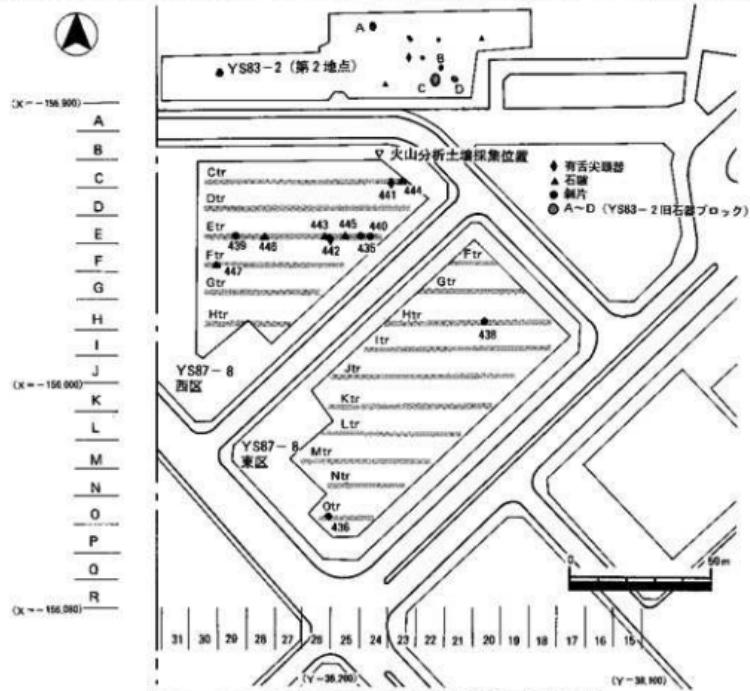
(2) 本調査以前の旧石器調査の状況

本調査が行われた1987年以前に八尾南遺跡内で旧石器時代相当層を対象として実施された調査は3件である。

1979年に八尾南遺跡調査会により実施された調査は、西接する長原遺跡で同時期に行われていた地下鉄谷町線延伸工事に伴うNG14次調査で旧石器が発見されたを契機とするもので、長原遺跡で旧石器が検出された地点の東へ続くB-2地区（八尾南遺跡第1地点）を中心に実施された。この調査では、旧石器相当層が上部調査面から比較的浅い位置に存在していたため、上部調査終了後、2m四方のグリッドを東西方向に概ね千鳥に配置し、グリッド内は手スコと手ガリを併用して平面的に下げてゆく調査方法が取られた。総数で16箇所におよぶグリッドが設定された結果、第20層の乳黄灰色粘土層からサスカイトの剥片数点が検出されている。

1984年には前記調査地の南に隣接する地点で、大阪府住宅供給公社の分譲住宅建設に伴い当調査研究会が第2次調査（八尾南遺跡第2地点）を実施している。この調査では、西部の（A区）では、上部調査面から2m四方のグリッドを23箇所設定したが、東部の（B区）では上部調査終了後、旧石器相当層直上付近まで人力掘削を行った後、同規模のグリッドを17ヶ所に設

定する調査方法が取られた。その結果、Bゾーンから石器類が小範囲に集中するブロックが4箇所で検出される等の結果が得られており、これらの調査方法が石器の検出や調査区の拡張等に対応するうえで有効な調査方法であると考えられた。これら2回の調査では、事業主が公的機関であったことから、期間等は恵まれたなかで調査が実施されてきた。しかし、1986年に第2次調査地の南東約130m地点で行った第5次調査は民間の社屋建設に伴う調査で、面積も4,500m²あり、既往の調査方法では、上部調査面から出土石器相当層直上までに堆積している莫大な量の堆土上の仮設場を確保するといった調査方法上の問題点のほか、調査口数の増大に伴う経費負担が一番の障害となった。以上の問題点を踏まえて事前協議を行った結果、上面の調査終了後、10m四方の調査区内に1m四方のグリッドを4ヶ所（北部・南部で2箇所づつ）に設定し、石器を検出した場合は拡張する調査方法をとることが決定された。調査においては、これらの調査方法に従って調査を進めたが、狭小な調査区でしかも深度が1.2m前後に達するため作業能率が悪く、全体の層位のつながりを把握する点においても問題が生じた。従って、調査ゾーンの北部に設定した並立する2箇所のグリッドについては、調査地を横断するトレンチ調査に切り替



第85図 八尾南遺跡第8次調査(八尾南第4地点)石器出土地点

え、南部の2箇所についてはグリッド調査とした。これらの経緯を経て本調査（第8次調査）が計画されたわけであるが、第8次調査の西区が第2次調査で旧石器を検出した地点に隣接する関係にあたるため、旧石器相当層に対する全面調査が必要であると言う認識が高まりつつあった。事前協議においてもこれらの問題が俎上に上ったが、民間の開発に伴う調査で面積が約1万m²におよぶ広大なものであったため、全面に及ぶ旧石器相当層の調査は事实上困難で、期間の制約が優先された結果、第5次調査と同規模の調査方法を取らざるを得なかった。以上のことから、第8次調査では第5次調査での問題点を踏まえたうえで、第5次調査で実施した回上座標に沿って東西方向にトレンチを設定する調査の方法を取り、調査の敏感性と旧石器相当層付近での連続した層位の把握に努めた。

（3）調査の概要

1) 調査の方法

下層確認調査では、第5層上面の調査終了後、アルファベットで区分した東西方向の地区割の一区画（10m四方）内の北から8～9m間に東西方向に伸びる1m幅のトレンチを設定し、石器を検出した場合は部分的に拡張する方法を取った。調査区名は西区Eトレンチのように、調査区名とトレンチ名を併記する方法を取った。東区でFトレンチ～Oトレンチ、西区でCトレンチ～Hトレンチを設定した。規模は、東区のFトレンチ15m、Gトレンチ35m、Hトレンチ59m、Iトレンチ65m、Jトレンチ65m、Kトレンチ55m、Lトレンチ45m、Mトレンチ43m、Nトレンチ26m、Oトレンチ15mを測る。西区では、Cトレンチ70m、Dトレンチ73m、Eトレンチ62m、Fトレンチ50m、Gトレンチ40m、Hトレンチ18mを測る。両調査区での調査総面積は約736m²を測る。調査では下層確認トレンチの設定面から0.6～1.1m迄に存在する第11層上面までは、遺構・遺物の有無を確認しながら機械より掘削した後、第11層以下は手スコと手ガリを使って石器の検出に主眼を置いた調査を実施した。その結果、第12層および第13層上面で後期旧石器～繩文草創期に比定される石器類が出土している。なお、層位と火山灰の関係を探るために島大学理学部地質教室柴田喜太郎氏に火山灰の分析を依頼した（『旧石器考古学38』に掲載）。火山灰分析土壤採集地は西区北東隅の24C地区の北壁である。

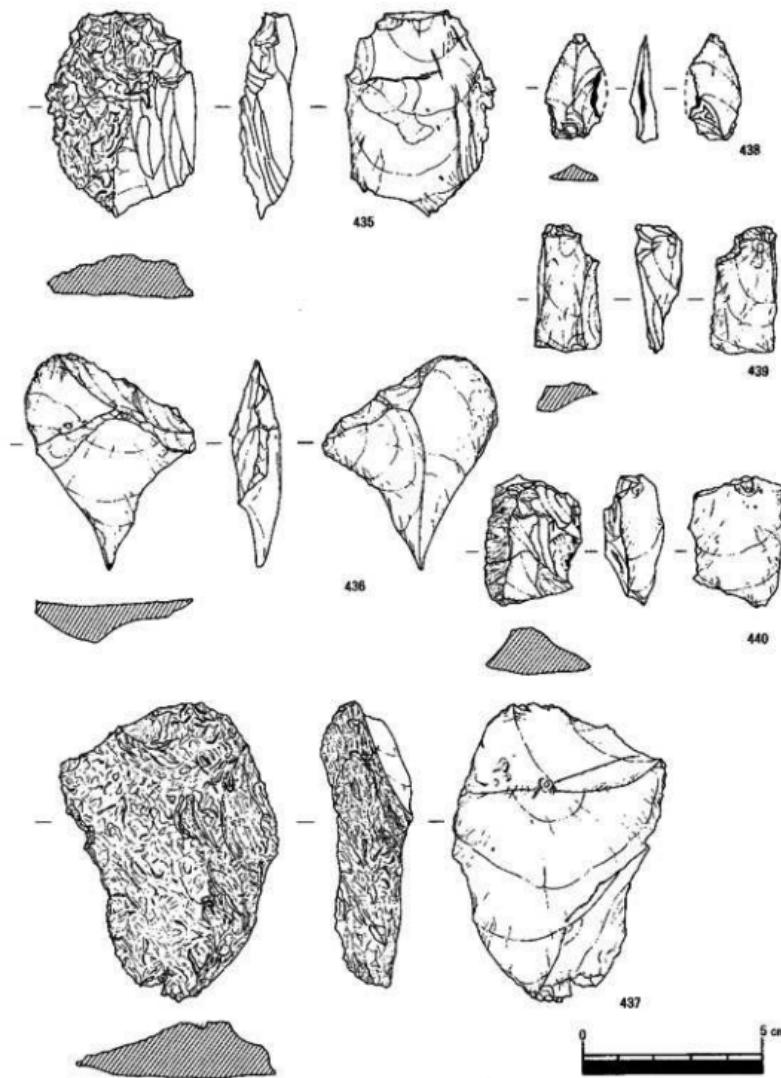
2) 出土遺物

・石核（437）

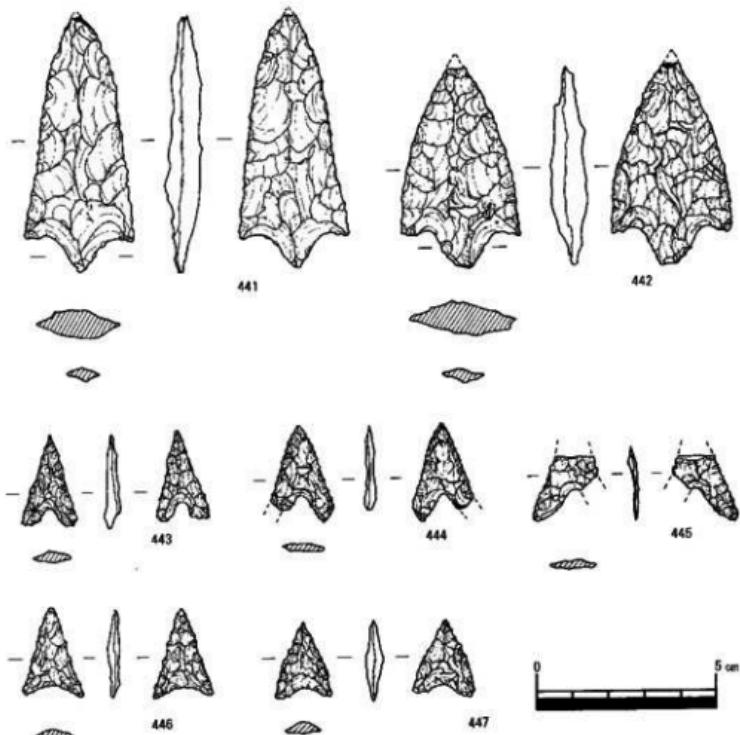
拳大程度の自然並円錐を素材としている。上端の自然面を打面として剥離した後、剥離痕で形成された稜を打点として剥離が行われている。東区Hトレンチ出土層位不明。

・剥片（435・436・438・439・440）

（435）は上端の自然面を除去する形で平坦面を作り出し、その面を打面として剥離されている。西区Eトレンチ24E地区第13層上面出。 （436）の背面側は、素材剥片の剥離面および



第86図 下層確認調査出土石器実測図-1



第87図 下層確認調査出土石器実測図-2

左側縁を打面として薄い剥片を数枚剥離している。腹面側は、剥離により形成されたボジティヴァな面の左側縁を打点とする剥離が行われている。東区Oトレンチ25O地区第13層上面出土。(438) 背面の右側縁を欠いている。流状構造をもつサスカイトを用いるもので、形状は小型ナイフ型石器に似ている。底部から背面の左側縁部にかけて自然面を有する。東区Hトレンチ20H地区第13層上面出土。(439) は上端の自然面を打面として得られた剥片である。西区Eトレンチ29E地区第13層上面出土。(440) は自然面が背面背面左側部および下端部にみられる。背面構成面は多方向からの剥離を受けている。腹面は上端部を打面として剥離されている。西区Eトレンチ24E地区第13層上面出土。

・有舌尖頭器 (441・442)

(441) は西区Cトレンチ23C地区第13層上面出土。横長剥片を素材とする有舌尖頭器で、

先端部分が僅かに新しく欠失している。形状は、中型の細身で両側縁は直線的に伸びており、返刺は鋭く内湾しながら発達した舌部につながっている。石材は表面に微細な円形のくぼみが斑点状にみられるサヌカイトを使用しており、色調は全体に風化のため白灰色である。長さ70.95mm、幅30.55mm、厚さ9.7mm、重さ16.5mgを測る。舌部は逆三角形を呈し、舌部長9.8mmを測る。先端部から基部に向かっておおまかな成形をした後、側縁に細かな整形剥離を主に腹面から加えている。なお、背面の一部には剥離が及ばずこぶ状に遺存する部分がある。

(442) は西区Eトレンチ26E地区第13層上面出土。先端部および舌部基部を欠失している。やや小型で幅広のもので、両側縁はやや内湾気味に先端部に移行する。返刺から内側に向かって内湾しながらやや幅広の舌部を作り出している。風化のため、白灰色を呈している。石材はサヌカイトである。長さ55.55mm、幅33.15mm、厚さ8.4mm、重さ13.4mgを測る。舌部は逆三角形を呈し、舌部長8.1mmを測る。先端部から基部に向かって両面を粗く成形した後、さらに腹面側にはより細かい器面調整と側縁には細かい剥離で鋸歯状に仕上げている。

・石鎚 (443~447)

石鎚は5点出土している。全て西調査区からの出土で (443・445・446) がEトレンチ、(444) がCトレンチ、(447) がFトレンチからの出土である。出土層位は12層である。使用石材は全てサヌカイトである。形態的には、基部に抉入りのある凹基無茎鎚が3点 (443~445)、基部が直線的な平基無茎鎚が2点 (446・447) に区別できる。



写真3 東区下層確認調査(Oトレンチ)調査風景(西から)

第4章 まとめ

今回の調査では、後期旧石器時代・縄文時代草創期・弥生時代後期・古墳時代中期に比定される遺構・遺物を検出した。なかでも、西区を中心に検出された古墳時代中期の集落域と、集落が廃絶した後の古墳時代中期後半に集落域の北部に形成された墓域は、八尾南遺跡内でのこの時期の集落の在りかたを推定するうえで貴重な資料を提供する結果となった。ここでは、今回の調査で検出した弥生時代後期と古墳時代中期の集落の性格を推定するとともに、既往調査結果から、八尾南遺跡内での古墳時代前期初頭（住内式）から古墳時代後期中葉に至る集落の変遷を考えてみたい。

（1）八尾南遺跡第8次調査検出遺構の性格について

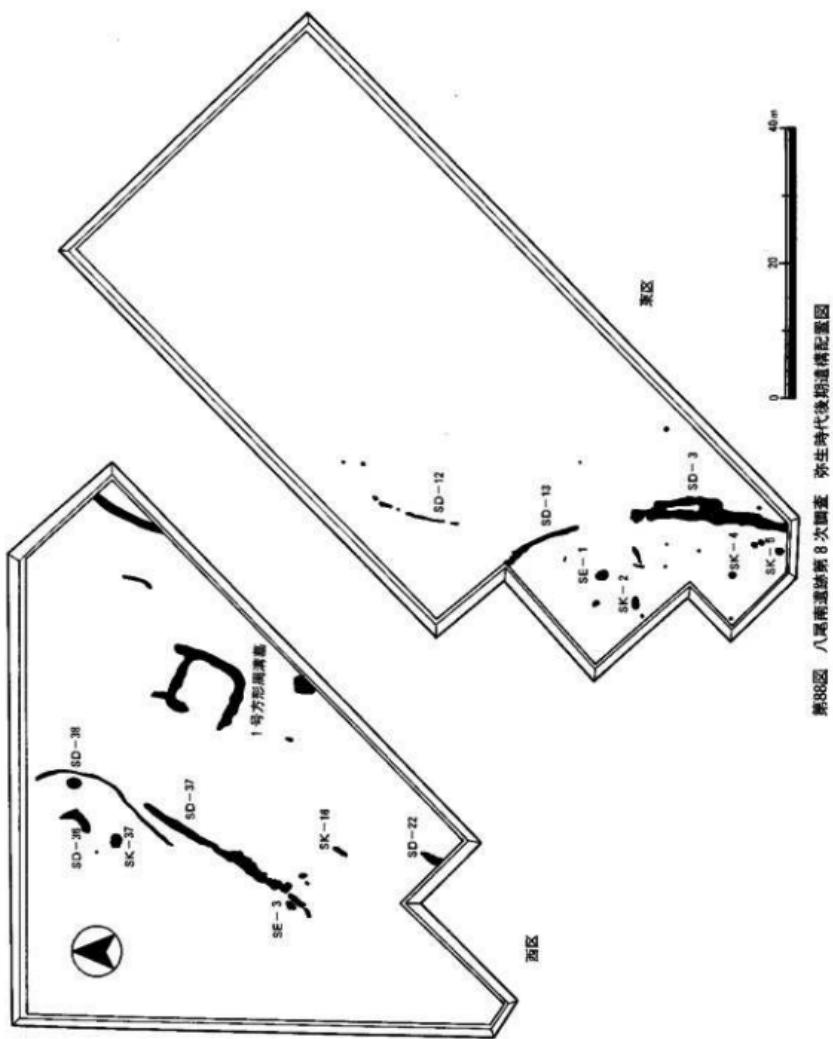
1) 弥生時代後期の集落について

弥生時代後期の遺構は、東区では、S E - 1 を検出した南西部から南部一帯と西区では、方形周溝墓を検出した東部から北部を中心検出されている。全体的に散発的な分布で、しかも居住域の中核を成す建物が検出されていないため、不明な点も多いが、土器の型式から見れば、西区で検出した遺構群（北集落）が古いことが明らかであり、その後、東区の遺構群（南集落）に移動したことが認められた。北集落については、西区の北方で実施された第2次調査（YS 83-2）^{註1} や八尾南遺跡調査会調査地（B-4地区）^{註2} で同時期の遺構が検出されており、少なくとも南北方向に100mに亘って散発的な遺構の広がりが認められている。今回の調査で検出された1号方形周溝墓が、これら一連の範囲に広がる集落を掌握した家長の墓と推定される。

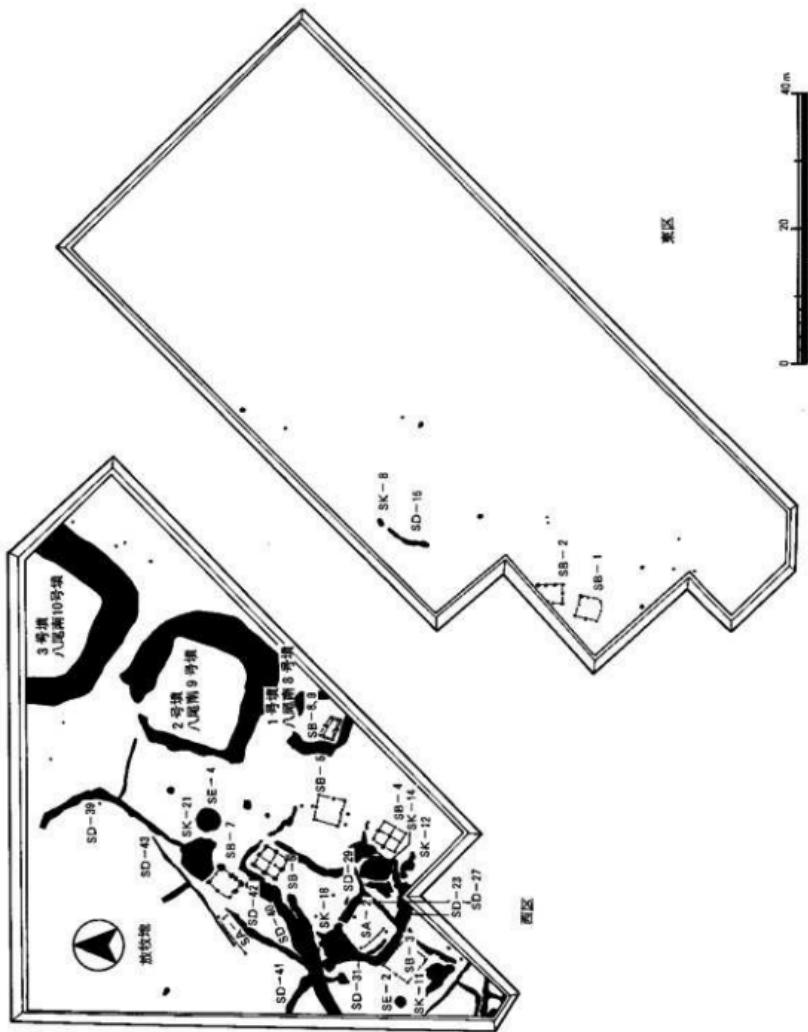
また、西区の北に隣接する第2次調査（YS 83-2）で出土した小形仿製鏡片（高倉氏分類の内行花文日光鏡系仿製鏡第III b類）^{註3} についても、これらの集落との有機的な関係が推定されるとともに、破碎鏡を介した祭祀形態の変化や近畿系小形仿製鏡の発現や普及を知る資料としても貴重である。一方、南集落については、後期末に成立した集落と考えられる。ただ、周辺で実施した調査においては、この集落に関連した遺構が検出されておらず、比較的小規模な集落であったことが推定される。これらの集落に関連した生産域としては、東区の東部に隣接する第5次調査（YS 87-5）、第13次調査（YS 88-13）で水田が確認されている。^{註4} ^{註5}

墓域としては、本調査地の南東約400m地点で実施された第1次調査（YS 82-1）^{註6} で12基の方形周溝墓が検出されているほか、南約200m地点の長原遺跡内（大阪市平野区川辺3丁目）で行われた調査（NG 82-41）で6基の方形周溝墓が検出されている。

後者の墓域については、時期的に南集落と符合するもので、両者間の有機的な関係が推定される。



第39圖 八屆南遺跡第8次調查 古墳時代中期遺構配置圖



2) 古墳時代中期の集落について

今回の調査で検出した古墳時代中期の集落を構成する居住域は、一部やや古柏のものが含まれるもの、須恵器編年（田辺氏編年）のTK216～208型式段階を中心とするもので、比較的短期間の集落であったことが窺われる。さらに、居住域の廃絶直後の段階（TK23型式段階）に西区の北東部が、墓域として変化していく過程が看取された。居住域の中核を成す、掘立柱建物については両区で9棟が検出されている。これらの建物の主軸はSB-2以外では西に12°～40°振っており、〔八尾南遺跡調査会1981〕で検出された西高高地（B-4地区）に向かって南北方向に伸びる形状に概ね沿った方向を指向している。未調査部分を含めて資料としては限界があるが、建物の配置から取て、小単位に区分すれば5グループ（aグループ～eグループ）に分けることが可能である。

aグループは西区中央部で検出したSB-6・SB-7。bグループはaグループの南東部で検出したSB-4・SB-5。cグループは西区の南西部で検出したSB-3。dグループは東区の南西部で検出したSB-1・SB-2。eグループはbグループの東で検出したSB-8・SB-9である。また、a～cグループの周辺では、堅穴状の土坑SK-11・14・21が検出されている。これらの土坑は、表面積に比して深さが15～27cmと比較的浅く、底面が水平で底面近くに炭を含む層が存在している。更には、SK-11を除く各遺構から溝造構が派生している点や、テラス状を呈する部分を一部造り出しているSK-21の存在からみて、これらの遺構の一部は、建物に付随する炊事に関連した遺構であったものと推定される。同様の性格を有する遺構が、東大阪市と八尾市にまたがる池島・福万寺遺跡（6世紀前半～中葉）で検出されている。^{註8} 池島・福万寺遺跡では、これらの堅穴状遺構から甕が検出されていることから、竈屋（炊事施設）と考えられており、主屋・副屋（倉）・井戸・竈屋・畑が小群を構成するものと考えられている。本調査では甕が検出されていないものの、これらと同様の性格を有する施設と考えており、池島・福万寺遺跡より遅る5世紀中葉段階にこのような性格を持つ遺構が確立していたことになる。これらの性格を有する遺構を含めて、さらに各グループの周辺で検出された遺構とのセット関係を示せば、下記のように俊別することが可能である。

aグループでは、建物が主屋のSB-7と副屋あるいは倉のSB-6、井戸ではSE-4、炊事施設ではSK-21とそこから伸びる溝のSD-39がある。

bグループでは、建物が主屋のSB-5と副屋あるいは倉のSB-4、炊事施設ではSK-14とそこから伸びる溝としてはSD-23があり、井戸については明確でないもののSK-12の一段深くなる部分がその機能を果たしたものと考えられる。

cグループでは、建物が主屋のSB-3、井戸のSE-2と不定形土坑のSK-11がある。

dグループでは、建物が主屋のSB-1と副屋のSB-2から成るが、これらの建物に関係

する遺構は検出されていない。

e グループでは、建物としてはSB-8・SB-9の2棟が検出されているが、重複関係からみて、SB-9からSB-8への建て替えが確認されている。建物の規模は1間×2間を測るが、南西部が1号墳の南周溝に切られているため、本来の規模は不明である。

以上のように居住域内を小単位にグルーピングを試みた。なかでもaグループとした小単位は、建物においては主屋・副屋（倉庫）ともに他の建物の柱穴に比して大きいばかりでなく、井戸（SE-4）や炊事施設（SK-21）の規模において、他のグループとは一線を画している。したがって、aグループが全体のグループを統率した首長クラスの居住地として位置づけられる。また、aグループを構成する大型井戸（SE-4）から出土した木製鞍の存在から、これらの集団が馬の飼養を行っていた集団の集落であることが推察される。

このような前提のうえで、さらに居住域内の遺構配置を細かく推定すれば、馬の飼養に対応した遺構配置が行われていたことが説明できる。まず、放牧地としては、西区北西部の遺構空白地が想定される。この放牧地の南側から北側を囲繞する形でSD-39・SD-41～SD-43が存在しており、南でSD-41が北でSD-39が屈曲して伸びていることから、これらの溝が放牧地を区画する性格を帯びたものと看取される。また、放牧地と推定した遺構空白地域の検出面（第5層上面）において、無数検出された斑点状の汚れの広がりについても、馬蹄跡であったと考えざるを得ない。さらに、SD-43の西部で検出した柵列1（SA-1）についても、位置関係から放牧地内の区画や、馬を係留するための施設であると考えられる。一方、放牧地の南部で検出したSK-18・SD-31・SD-27・SD-29により方形に区画された空間（6.5×7m）については、柵列2（SA-2）の存在や北部隅の溝が途切れる部分が入口と考えれば、この空間が馬を一時的に係留しておく施設と推定されよう。なお、この施設の西に付属する形で検出されたSK-18に付いては、平面形に対して深度が比較的浅い点やこの遺構に続くSD-31との高低差においては、逆にSK-18の方が10cm程度低いことから、この部分が馬の洗浄を目的とした水溜め状遺構であった可能性がある。放牧地とこれらの施設の中間に存在するSD-40についても、溝状遺構としているが、底部が水平で不均質な堆積土層であることを加味すれば、道路の機能を果たした遺構と考えるのが妥当である。このように推測を含めて見ていくと、放牧地、一時的な係留地、馬の水飲み場ないしは洗浄場が機能的に配置されていることが明らかであり、さらに、一時的な係留地とした方形区画の南で検出した2間×3間の掘立柱建物（SB-3）が馬屋的な施設と考えることも可能である。SB-3が馬屋であったと考えた場合、西部に入口が想定されるし、また、北側の柱通りの中で、SP-121とSP-122の間が少し北側に張り出している部分に注目すれば、この部分から方形区画側に十橋的な施設を設けて両遺構をつなげだことも推定され、出入り口が北に存在していた可能

性も考えられる。このように、居住域の遺構の中から馬の飼養に関連した遺構を今一度整理すれば、馬屋としての掘立柱建物（S B-3）、一時的な係留地としての方形区画と柵列2（S A-2）、水溜め状遺構（S K-18）とその水源を確保するためのS E-2、さらに道路遺構（S D-40）を隔てて放牧地が広がっており、これらを囲繞する形でS D-39、S D-41～43や柵列1（S A-1）が存在しており、これらの遺構の西側を取り囲んで、aグループ、bグループの建物群が存在している居住域の景観が推定される。

一方、文献的にみられる河内地域における馬に関するものとしては、『日本書記』応神十五年八月六日の条に、百濟王が阿直伎を遣わして、両馬二頭を貢進してきたことが初現であり、5世紀初頭には良馬の一時的な入手が行われていたようである。このように、文献においては、5世紀初頭段階に馬に関する内容が認められるものの、考古学においては、やや時代が下る5世紀中葉の遺跡から馬に関連した遺物が出土している。この時期、韓式系土器や須恵器等の新出性土器の台頭や製塙土器による安定した塙の供給等の伴う社会的変革の一環の中で、馬の飼養や乗馬の風習が始まり、その深化のなかで、馬飼を職掌とした集落が各地で成立したものと考えられる。

これらを裏付けるように、5世紀中葉以降、河内地域においても北河内の生駒西麓部を中心とした地域や河内台地東縁に位置する長原遺跡・八尾南遺跡で馬に関連した各種の遺構・遺物が検出されている。八尾南遺跡に西接する長原遺跡においては、長原2期・3期の集落に馬齒・馬骨が検出されているほか、長原古墳群にみる馬形埴輪および馬飼人を表現した人物埴輪の存在や七ノ坪古墳（6世紀前半）出土の鉄製馬具と言った、馬に関連した遺物の出土が多いことが指摘される。したがって、八尾南遺跡でこの様な性格をもつ集落の出現以降、この地域では馬の飼養が一般化したことが窺われる。以上、木製軸の出土から、今回検出した集落を馬飼の集団と規定したうえで居住区内の遺構配置を推定してみた。しかし、これらの推定に当たっては恣意的な要素が多分に介在しており、今後、同様の性格を持つ集落の検出例の増加を待って、馬飼い集団の本質的な部分が解明されることを期待する。

3) 墓域について

西区の北東部で3基の方墳〔1号墳（八尾南8号墳）・2号墳（八尾南9号墳）・3号墳（八尾南10号墳）〕を検出している。これらの古墳群は居住域が廃絶した後の5世紀後半段階（TK23型式段階）に成立する墓域で、さらに、北部の第2次調査地（YS83-2）で検出されている八尾南7号墳（TK23型式段階）を含めて、4基がほぼ南北に直列する形で築造されている。築造順としては、八尾南9号墳（TK23型式段階）→八尾南10号墳（TK23型式段階）→八尾南7号墳（TK23型式段階）→八尾南8号墳（TK47型式段階）が想定される。

なかでも、2号墳（八尾南9号墳）と3号墳（八尾南10号墳）については、八尾南遺跡内で

検出されたこの時期の古墳のなかで、規模的にも他を凌駕する関係にあるばかりでなく、埴輪を所有している点においても特筆される存在である。埴輪類については、後世に改変を受けており原位置を知り得る資料は皆無であるが、2号墳（八尾南9号墳）からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（鶴形・盾形・馬形・人物・鶏形）、3号墳（八尾南10号墳）からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（衣笠形・鶴形・盾形・馬形・人物・太刀形）が出土している。埴輪編年¹⁰の基準とされている円筒埴輪の成形技法や付随する特長を示せば、黒斑が無い、外面の1次調整がタテハケのみ、スカシ孔が円形、タガが低い台形か二角形、須恵質のものが含まれている等の属性を示している。川西宏幸氏による円筒埴輪編年¹¹のV期の特長と合致しており、V期の初現とされているTK23型式とも矛盾しない。一方、長原遺跡内においては、200基余りの方墳が検出されている。今回検出した方墳は、長原古墳群の分類によれば2・3期（5世紀中頃～6世紀初頭）に該当するもので、長原古墳群の9割以上がこの時期にあたるものとされている。長原古墳群では2・3期に比定される約160基の古墳のうち、30基余りの古墳から形象埴輪の出土が確認されており、この時期の古墳の5基に1基の割合で形象埴輪の使用が許された階層が存在していたことが推定されている。八尾南遺跡においても、この時期に該当する10基のなかで形象埴輪が検出されているのは2号墳（八尾南9号墳）・3号墳（八尾南10号墳）の2基であり、比率的には長原古墳群内の状況と同様な結果が得られている。さらに、埴輪類が出土した2号墳（八尾南9号墳）・3号墳（八尾南10号墳）が埴輪を持たない古墳に比して規模的に優位なことについても、長原古墳群で検証されている結果と同様である。ただ、これらの造墓を推進した集団の集落が八尾南遺跡内では検出されておらず、西接する長原遺跡内での動向から検証する必要がある。

第6表 八尾南遺跡検出古墳一覧表

※（ ）は推定値

古墳名	調査名	墳形	長径(m)	短径(m)	埋蔵深(m)	出土上遺物	時期	文献
1号墳	八尾南遺跡調査会	方形	12.5	12.5	1.6～2.1	布面土蓋、円筒埴輪	4C末	「八尾南遺跡 八尾南遺跡調査会1981」
2号墳	八尾南遺跡調査会	方形	11.5	11.5	0.7～1.6	井内式土蓋	庄内Ⅲ	「八尾南遺跡 八尾南遺跡調査会1981」
3号墳	八尾市教育委員会	方形	(10)	(10)	1.0～2.0	土師器、須恵器	MT15	未報告
4号墳	調査研究会（YS89-1）	方形	(6)	—	1.5～2.0	土師器、須恵器	TK23	細八文研報告5
5号墳	調査研究会（YS89-1）	方形	(7.5)	—	1.0～2.5	土師器、須恵器	TK23	細八文研報告5
6号墳	調査研究会（YS89-1）	方形	7	6	1.0～2.0	須恵器	TK47	細八文研報告5
7号墳	調査研究会（YS89-2）	方形	7.9	7.8	1.0～2.5	土師器、須恵器	TK23	細八文研報告7
8号墳	調査研究会（YS89-2）	方形	6.6	4.8	0.4～1.8	土師器、須恵器	TK47	本審掲載 YS87-8 (1号墳)
9号墳	調査研究会（YS87-8）	方形	14.5	12	1.2～5.4	須恵器、埴輪（円筒・朝顔・盾形・馬形・人物）	TK23	本審掲載 YS87-8 (2号墳)
10号墳	調査研究会（YS87-8）	方形	(12.5)	—	4.2～5.3	土師器、須恵器、埴輪（円筒・朝顔・盾形・馬形・人物・太刀）	TK23	本審掲載 YS87-8 (3号墳)
11号墳	調査研究会（YS88-12）	方形	6.2	6	0.55～0.75	—	5C後	本審掲載 YS88-12 (1号墳)
12号墳	調査研究会（YS88-12）	方形	—	—	0.7～0.85	土師器	5C後	本審掲載 YS88-12 (2号墳)
13号墳	調査研究会（YS88-12）	方形	7.9	6.8	0.45～1.9	須恵器	TK23	本審掲載 YS88-12 (3号墳)
14号墳	調査研究会（YS88-12）	方形	8.5	—	0.5～1.0	須恵器	MT15	本審掲載 YS88-12 (4号墳)

(2) 八尾南遺跡内の古墳時代の集落推移について

1978～1979年に実施された地下鉄谷町線八尾南駅建設に伴う〔八尾南遺跡1981〕の調査では、広範囲にわたる調査が実施された結果、古墳時代前期初頭（庄内式古相）から古墳時代中期に至る居住域・墓域・生産域等の変遷の一部が明らかになった。なかでも、これらの調査で出土した古墳時代前期における土器群の編年的研究は、その後、河内地域の古墳時代前期を代表する土器編年として広く流布したことは、周知のごとくである。これらの調査以降も、大阪府教育委員会、当調査研究会により継続的に調査が実施されており、古墳時代前期初頭（庄内式古相）～古墳時代後期中葉に至る居住域や墓域の検出例が増加している。

ここでは、本調査および既往調査の成果から、古墳時代前期初頭（庄内式古相）から古墳時代後期中葉の集落を構成する居住域・生産域・墓域の広がりを、大體的に領域として捉えたうえでグルーピングを試みた。居住域では居住域A～H、生産域I～III、墓域1～8に区分し、さらに、当該期を12期（1期～12期）の小期毎に区分したうえで、八尾南遺跡内（一部長原遺跡^{註12}を含める）における当該期の集落の変遷を考えてみたい。

・居住域

- 居住域A 八尾南遺跡調査会D-1地区からD-3地区の西部にかけての地域で、報告書で
中央微高地と呼称されている部分の東西100m、南北100mの範囲。
- 居住域B 八尾南遺跡調査会D-3地区南部で、報告書において東側微高地とされる地域か
ら、その南部で実施された大阪府教育委員会1989調査地の西部一帯。^{註13}
- 居住域C 大阪府教育委員会1989調査地の東北部一帯。
- 居住域D 第5次調査地（YS87-5）北区の北西部から第13次調査地（YS88-13）の西
部一帯。^{註14}
- 居住域E 第8次調査地（YS87-8）から長原遺跡NG93-56調査地（大阪市平野区長吉
川辺3丁目）一帯。^{註15}
- 居住域F 第18次調査地（YS92-18）一帯。

- 居住域G 市教育委員会1981調査地、第3次調査地（YS84-3）一帯。^{註16}

- 居住域H 長原遺跡NG82-41調査地（大阪市平野区長吉川辺3丁目）一帯。^{註17}

・生産域

- 生産域I 八尾南遺跡調査会D-4地区一帯。

- 生産域II 第7次調査地（YS87-7）一帯。^{註18}

- 生産域III 第3次調査地（YS84-3）・第10調査地（YS87-10）一帯。^{註19}^{註20}

・墓域

- 墓域1 八尾南遺跡調査会D-3地区。八尾南2号墳（SX2）。

- 墓域 2 八尾南遺跡調査会 B - 3 地区。八尾南 1 号墳 (S X 1)。
- 墓域 3 大阪府教育委員会1989調査地の南東部。土器棺墓（土坑29）。
- 墓域 4 第 2 次調査地 (Y S 83-2) 東区の八尾南 7 号墳。第 8 次調査地 (Y S 87-8) 西
区の八尾南 8 号墳～10号墳。
註21
- 墓域 5 市教育委員会1980調査地。八尾南 3 号墳。
註22
- 墓域 6 第12次調査地 (Y S 88-12)。八尾南11号墳～14号墳。
註23
- 墓域 7 第 1 次調査地 (Y S 82-1)。八尾南 4 号墳～6 号墳。
- 墓域 8 長原遺跡 (NG 82-41) 大阪市平野区長吉川辺 3 丁目。NG 106号墳・NG 107号墳。
註24
- なお、八尾南遺跡内検出遺構の古墳番号については、調査件次の古いものから順に通し番号
を付けてている。

・八尾南 1 期（庄内式 I 期）

この時期の居住域は、居住域 A の南部と居住域 C の 2ヶ所で確認されている。居住域 A は、
〔八尾南遺跡調査会1981〕の調査で中央微高地と呼称された位置にあたり、居住域 C について
も東側微高地とされた地点の南東部に続く、微高地上の比較的安定した位置に居住域が設けら
れている。これらの微高地を挟んで居住域 A、居住域 C が存在しているが、双方ともに遺構の
周密度が低いことから、小規模な居住域であったことが推定できよう。また、居住域 C と墓域
3 が約20m の間隔をもち検出されており、居住域と墓域が近距離に存在していたことが窺える。
居住域 A・C に伴う生産域にとしては、生産域 I が想定される。

・八尾南 2 期（庄内式 II 期）

続く、八尾南 2 期の居住域は、居住域 B の南西部および北東部にわずかに認められる程度で、
いずれも、前代の居住域近辺での極部的な移動のなかで推移している。生産域は前代と同様、
生産域 I にあったようである。

・八尾南 3 期（庄内式 III 期）

この時期は、庄内式期において最も居住域の拡大ならびに分散傾向が顕著な時期である。八
尾南 II 期の居住域を検出した居住域 B が南北方向に居住域を拡大するとともに、居住域 A では、
〔八尾南遺跡調査会1981〕の中央微高地の全域にわたって居住域を拡大させている。また、第
5 次調査地 (Y S 87-5)・第13次調査地 (Y S 88-13) 付近では、新たに居住域 D が出現し
ている。墓域としては、居住域 B の北部で居住域に近接して墓域 1 (八尾南 2 号墳) が検出さ
れており、これらの集落を統括した首長の墓と推定される。生産域は前代と同様、生産域 I が
継続して利用されている。

・八尾南 4 期（布留式 I 期）

この時期の居住域は、居住域 A、居住域 B の 2ヶ所で確認されている。居住域 A においては、



第90図 八尾南遺跡の古墳時代前期初頭（庄内式期）～古墳時代後期中葉における集落推移概念図

前代と同規模の居住域をもつが、後者においては居住域B内での極部的な移動と縮小化が顕著であり、居住域Aが中心的な役割を果たした居住域であったことが推定されよう。生産域は、生産域Ⅰが想定されるが、墓域は検出されていない。

・八尾南5期（布留式Ⅱ期）

続く、八尾南5期の居住域は、居住域Aの北部で僅かに認められる程度で、この時期、集落規模の縮小化が顕著である。

・八尾南6期（布留式Ⅲ期）

この時期の居住域は、居住域Bの西部で確認されている程度で前代と同様、居住域は小規模である。

・八尾南7期（布留式Ⅳ期）

前代と同様、居住域Aならび居住域Bの2ヶ所で確認されており、双方ともにやや東部に居住域が移動している。居住域Aでは、竪穴住居（S I I）を中心とした集落構成が認められ、前代に比してやや居住域が拡大している。また、在地系土器に韓式土器に代表される外米系の土器様式が混在するのもこの期の特長の一つである。これらの居住域に関連した墓域としては、居住域の約250m西方で検出された墓域2（八尾南1号墳）が想定でき、長原古墳のなかでも古式に位置付けられている古墳とを比較をするうえで貴重である。

・八尾南8期（布留式V期-T G232・T K73・85型式併行期）

この期の居住域は居住域Bが居住域Aに集約されるほか、新たに遺跡範囲の北部で居住域Fが成立している。一時期を除き、八尾南7期までみられた居住域Aと居住域B内でみられた極端的な移動から、この時期新たな居住域が分散して成立している。これらの居住域に共通して言えることは、韓式系上器や須恵器に代表される新出性の器種の増加に伴う生活様式の変化や、竪穴住居に代わって掘立柱建物が住居の主流となっている点にある。また、鳥足文を有する土器群が出土した居住域Dにみられるような大量の韓式土器を保有する集落の出現については、内発的な概念のなかで捉えられない要素を含んでいることも考慮する必要があろう。居住域Aの生産域としては、生産域Ⅰないしは生産域Ⅱ（4区第4面水田）、居住域Fについては居住域の西部で確認されている生産域Ⅲが想定される。

・八尾南9期（T K216・208型式併行期）

この期には、居住域Aの全域にわたって遺構の広がりが認められているほか、新たに遺跡範囲の南西部で馬飼の飼養を職掌とする集団である居住域Eおよび南西部に隣接する長原遺跡（NG82-41）で居住域IIが成立している。遺跡の北部では八尾南8期の生産域である生産域Ⅲが洪水により機能を停止するのに符合して居住域Fが移動を余儀なくされたようで、この時期、廃絶した生産域Ⅲ南部を中心に居住域Gが成立している。居住域A・E・G・Hにおいて

は、いずれも、掘立柱建物を中心とする建物群で構成されている。生産域としては、生産域Ⅰ・Ⅱが想定されるが、墓域は現時点では確認されていない。

・八尾南10期（TK23・47型式併行期）

この時期の該当する居住域は確認されていないが、墓域が各地点で検出されている。この時期の墓域は遺跡範囲の西部から南部にかけて、墓域4（八尾南7号墳～八尾南10号墳）、墓域6（八尾南11号墳～八尾南13号墳）、墓域7（八尾南4号墳～八尾南6号墳）、墓域8（NG106号墳～NG107号墳）が検出されており、2基～3基を一単位とする方墳群で形成されている。方墳の規模は、墓域4の2号墳（八尾南9号墳）と3号墳（八尾南10号墳）および墓域8のNG106号墳の規模が11～14.5mを測るのに対して、その他は6.2～8.5mと小型である。そのうち、埴輪類が検出されているのは、中型の規模を有する2号墳（八尾南9号墳）・3号墳（八尾南10号墳）・NG106号墳である。なお、西接する長原遺跡では、この時期以降、集落の中心が瓜破台地の東部に移動したことが確認されており、八尾南遺跡内の集落についても同様に推移した可能性が高い。

・八尾南11期（MT15型式併行期）

前代と同様居住域は確認されていないが、墓域6の北部で八尾南14号墳が検出されている。

・八尾南12期（TK10型式併行期）

この期のものとしては、〔八尾南遺跡調査会1981〕の西微高地とされたC-1地区で土器埋納ピットが2基検出されているほか、古墳では墓域5で八尾南3号墳がわずかに1基検出されている程度で不明な点が多い。西接する長原遺跡においても、この時期の集落がほとんど認められておらず、両遺跡ともに同様の集落推移が推定されている。

以上、これまでに実施してきた発掘調査の成果から、八尾南遺跡内での古墳時代前期初頭（庄内式古相）～後期中葉に至る集落推移を概観してみた。これらからこの時期の集落は、微地形に応じて集落を構成する集落域・生産域・墓域が選択され推移したと考えられる。1978年～1979年に八尾南遺跡調査会により実施された調査では、遺跡範囲の中央部を横断する形で調査が実施された結果、西微高地、中央微高地、東微高地と呼称される南北方向に舌状に伸びる微高地が検出されており、これらの微高地に沿って集落が存続したことが確認されている。その後の調査においても、微高地の広がりが確認されており、これらの地形と遺跡立地の在り方が推定できるようになってきた。これらの微高地は概ね南北方向に伸びるものと推定され、各微高地間は浅い谷状地形と成っており、その部分に自然流路ないしは溝が存在している。当該期における地形復元を完全に行っておらず不確定の要素が多分にあるが、敢えて各微高地と遺跡南部の集落の関係を示せば、西微高地には、北から墓域2・墓域4・居住域E・墓域5・

墓域8・居住域H、中央微高地には、居住域A・居住域D・墓域6・墓域7、東微高地には居住域B・居住域C・墓域3、東微高地の東には生産域Iが立地している。遺跡北部の集落については、居住域Gが西微高地の北端に位置する可能性があるが他は不明である。

次に、各時期における集落内の動向については、下記のとおりである。

居住域においては、1期に居住域Aと居住域Cで成立した後、2期には居住域Bに集約されるが、3期～7期までは一部を除き居住域Aおよび居住域Bの中での極端な移動で推移している。しかし、外来系土器の台頭に代表される社会的変革や生活様式の変化を見た8期・9期には、新たな居住域として、遺跡の北部に居住域F・Gや西部に居住域E・Hが分散して成立している。

生産域については、1期から7期までが生産域Iを中心として生産が行われているが、居住域が分散化する8期・9期には、これらに符合して新たに生産域II・IIIが成立している。

墓域としては、3期に比定される墓域1（八尾南2号墳）が同時期の居住域に近接して築造されている。一方、7期の墓域2（八尾南1号墳）は、同時期の居住域Aの西方約250m地点に築造されており、埴輪を伴う方墳（一辺11.5m）で、八尾南遺跡の布留式後半における首長の動向や、長原遺跡内で検出されている塚ノ本古墳（直徑55m円墳）・一ヶ塚古墳（全長45m帆立貝形）・高廻り1号墳（一辺15m方形）・高廻り2号墳（一辺17.5m円形）と比較する上で、

第7表 八尾南遺跡の古墳時代前期初頭（庄内式期）～古墳時代後期中葉における集落推移概念表

番白丸内の数字はP-3の表1と符合している

時期	土器編年	居住域	生産域	墓域	主な遺構
1期	片内Ⅰ期	A・C	I	3-土器格塞（土坑29）	①-SE10 ②-土坑29・井戸1
2期	庄内Ⅱ期	B	I		③-S233 ④-土坑43・溝18
3期	片内Ⅲ期	A・B D	I	1-八尾南2号墳	⑤-SW1～4 ⑥-土坑34・35・37・40・溝17
300	4期 布留Ⅰ期	A・B	I		⑦-SE9・16・SK74 ⑧-井戸9・落ち込み8
5期	布留Ⅱ期	A	I		⑨-SE4
6期	布留Ⅲ期	A・B	I		⑩-上坑30・52、井戸7
400	7期 布留Ⅳ期	A・B	I	2-八尾南1号墳	⑪-SE21・22・26、S11 ⑫-井戸6
8期	布留V期 TG232-TK73+85	A・F	I・II		⑬-SK2・27、SK7 ⑭-SD-201
9期	TK216・208	A・B G・H	I・II		⑮-SE1・5・16・SK2・38、⑯-SK1、⑰-SE301 ⑱-SK1・3、⑲-SE2・4、SK14・15・18・19
10期	TK23・47			4-八尾南7～10号墳、6-八尾南11～13号墳 7-八尾南4～6号墳、8-NG106・107号墳	
500	11期 MPT15			6-八尾南14号墳	
12期	TK10			5-八尾南3号墳	

貴重である。10期の墓域は、墓域4（八尾南7～10号墳）・墓域6（八尾南11～13号墳）・墓域7（4～6号墳）・墓域8（NG106号墳～NG107号墳）で計12基の方墳が検出されている。この時期の方墳は、3基程度の方墳が密集して構築されている点や主軸をほぼ北に向けることで共通している。墳丘の規模では、一边が6～8mの小型のものと、一边が11～14.5mを測る中型のものがあり、中型に区別した八尾南9号墳・八尾南10号墳・NG106号墳には埴輪が伴っており、墳丘規模や埴輪使用が階層の優劣を示すものと理解されよう。11期の墓域としては、墓域6の北部で八尾南14号墳が検出されている。12期の墓域としては、墓域5で八尾南3号墳が検出されている。この時期、西接する長原遺跡においても、集落の存在が希薄になることが確認されており、両遺跡のこの時期の動向を知る上で貴重な資料を提供している。なお、八尾南10期とした八尾南10号墳においては、7世紀初頭（TK209型式段階）まで墓前祭祀が行われていたことが確されているが、これらに伴う居住域は確認されていない。

今回提示した八尾南遺跡内における古墳時代の集落推移の内容は、あくまでも部分的な調査成果からみたものであり、認識誤認や不確定な要素が多分に含まれている。今後の調査の積み重ねにより、この時期の遺跡全体像がさらに明晰にされることを望む。

註

- 註1 駒沢 敦 1985「1 八尾南遺跡（第2次調査）」『昭和59年度事業概要報告』(八尾市文化財調査研究会報告7) 勅八尾市文化財調査研究会
- 註2 米田敏幸他 1981「八尾南遺跡」八尾南遺跡調査会
- 註3 高倉洋彰 1985「弥生時代小型仿鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻第一号
森岡秀人 1987「「十」状図文を有する近畿系弥生小形仿鏡の変遷」『横山健一先生古希記念文化史論叢 上』
- 註4 駒沢 敦 1988「7 八尾南遺跡（第5次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』(八尾市文化財調査研究会報告16) 勅八尾市文化財調査研究会
- 註5 成海祐子 1989「23 八尾南遺跡（第13次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(八尾市文化財調査研究会報告25) 勅八尾市文化財調査研究会
- 註6 駒沢 敦 1994「3 八尾南遺跡」『昭和58年度事業報告』(八尾市文化財調査研究会報告5) 勅八尾市文化財調査研究会
- 註7 田辺昭一 1966「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ
- 註8 江浦 洋・井上智博他 1991「池島・福万寺遺跡 発掘調査概要II」(大阪文化財センター
寺川史郎・三宮昌弘・森本 徹 1991「池島・福万寺遺跡 発掘調査概要IV」(大阪文化財センター
森本 徹 1992「池島・福万寺遺跡 発掘調査概要V」(大阪文化財センター
森本 徹 1994「池島・福万寺遺跡における韓式系土器と集落」『韓式系土器研究V』韓式系土器研究会
- 註9 前掲註1

- 註10 川西宏幸 1978「円筒埴輪總論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 註11 京嶋 覚 1982「長原遺跡古墳群ーまとめにかえてー」『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』 勅大阪市文化財協会
京嶋 覚 1989「第2節 長原古墳群の形象埴輪」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅰ』 勅大阪市文化財協会
積山 洋 1989「第3節 円筒埴輪の検討」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅰ』 勅大阪市文化財協会
なお、長原遺跡内における古墳時代全般の集落推移については、勅大阪市文化財協会 田中清美・高橋 工両氏からご教示を受けた。
- 註12 庄内式期～布留式期の時期区分の概念については、原田昌則 1993「第5章 まとめ 3) 中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『II 久宝寺遺跡(第1次調査)』 勅八尾市文化財調査研究会報告37
- 註13 宮野淳一・山田隆一・瀬川眞美子 1991「八尾南遺跡発掘調査概要・II」 大阪府教育委員会
- 註14 前掲註6
- 註15 京嶋 覚 1994「井戸 井戸 井戸」「葦火」49号 勅大阪市文化財協会
- 註16 原田昌則・成海佳子 1985「II 八尾南遺跡発掘調査概要報告」「八尾市文化財発掘調査概要 昭和59年度」 勅八尾市文化財調査研究会
- 註17 大阪市教育委員会・勅大阪市文化財協会 1983「大阪市土地開発公社川辺市営住宅建設工事に伴う長原遺跡の現地説明会資料」
田中清美 1987「13-a. 長原遺跡」『韓式系土器研究Ⅰ』 韓式系土器研究会
- 註18 西村公助 1993「VI 八尾南遺跡(第7次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」 勅八尾市文化財調査研究会報告41 勅八尾市文化財調査研究会
- 註19 前掲註15
- 註20 成海佳子 1994「II 八尾南遺跡(第10次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」 勅八尾市文化財調査研究会報告40 勅八尾市文化財調査研究会
- 註21 前掲註1
- 註22 八尾市教育委員会1980年度調査未報告
- 註23 本書掲載P131～P143「II 八尾南遺跡第12次調査(Y S88-12)」
- 註24 前掲註16

図 版



調査地遠景（東から）



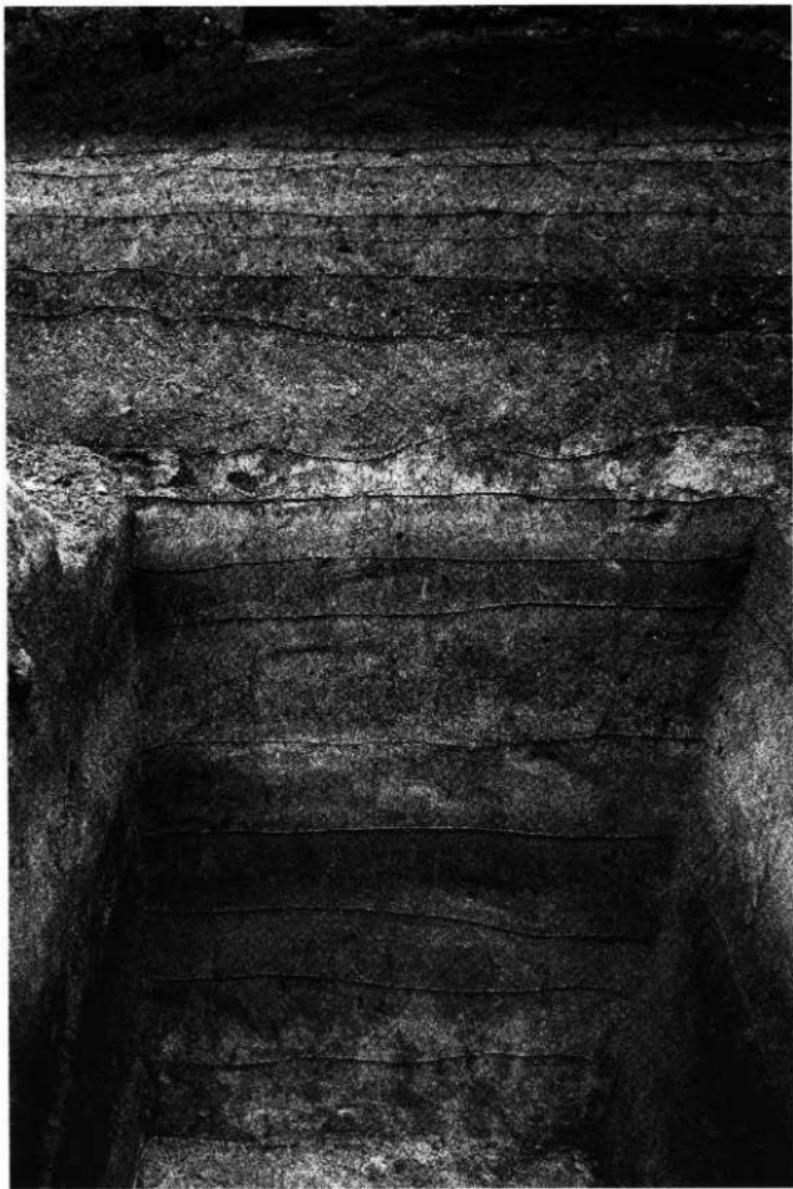
調査地遠景（西から）



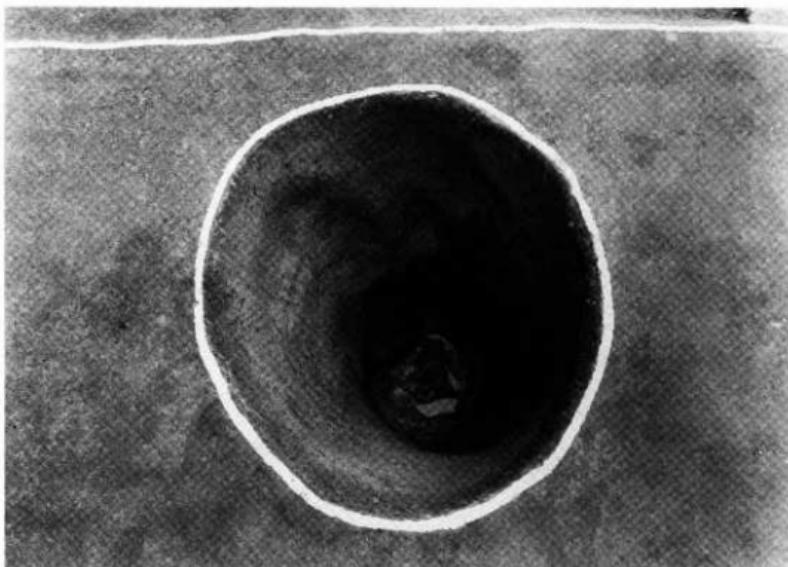
西区全景



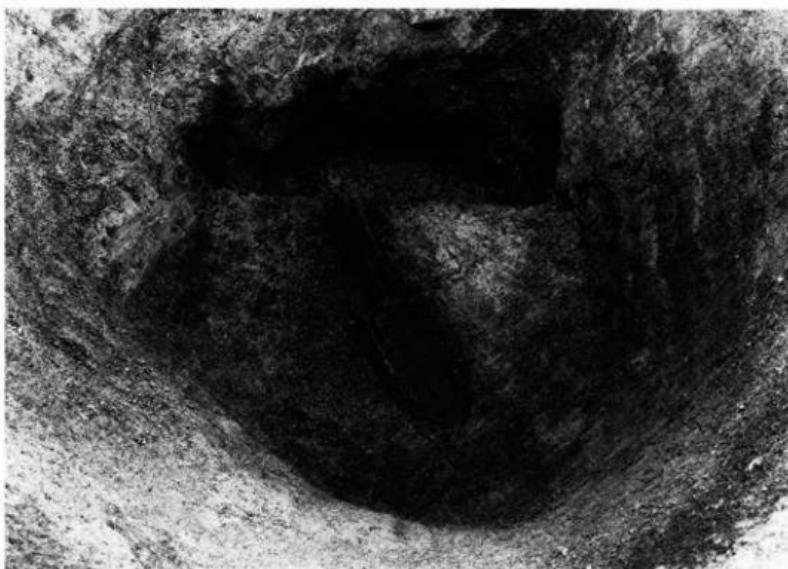
東区全景



西区Gトレンチ西壁 (W-2)



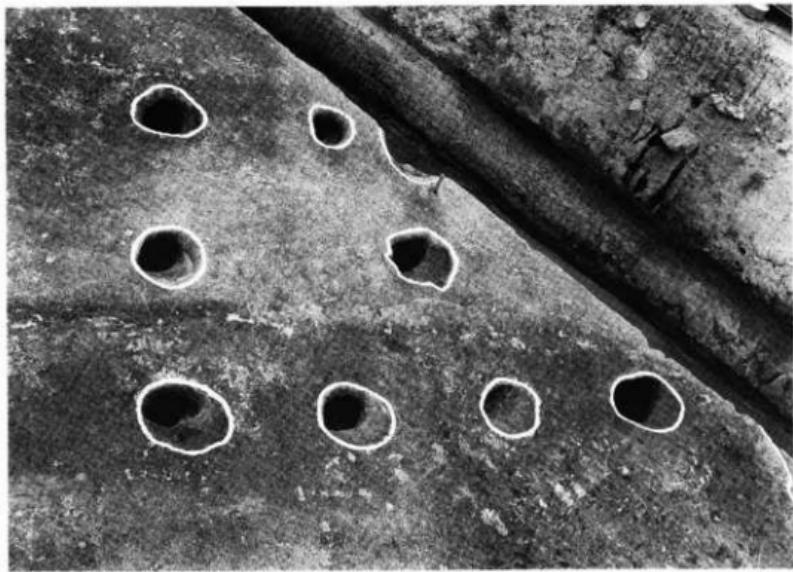
東区SE-1検出状況（北から）



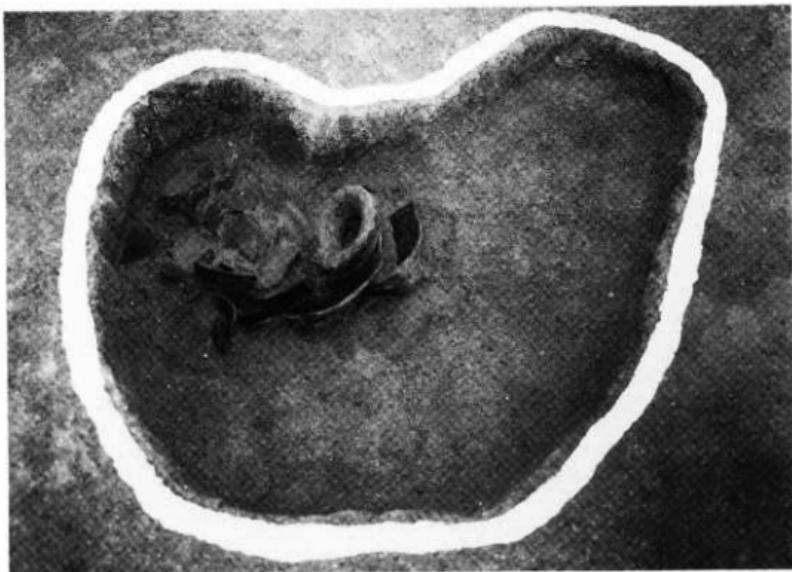
東区SE-1出土状況（北から）



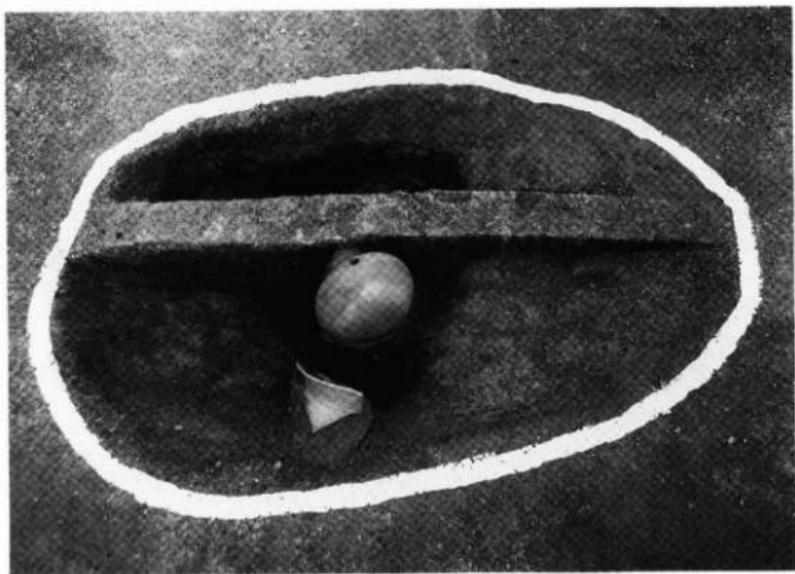
東区SB-1検出状況（東から）



東区SB-2検出状況（東から）



東区SK-1検出状況（東から）



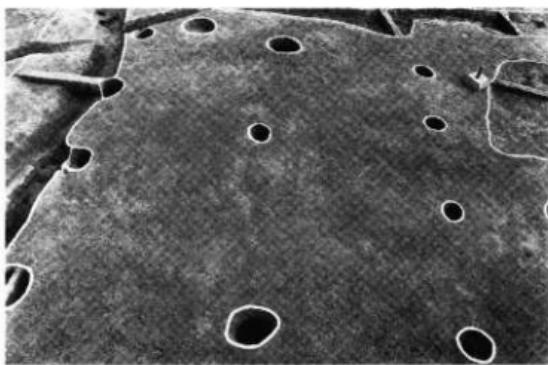
東区SK-8検出状況（東から）



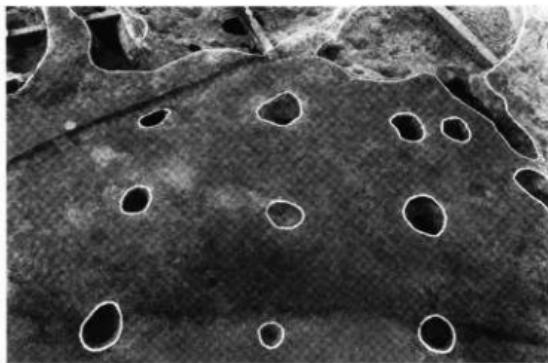
西区南部遺構検出状況（東から）



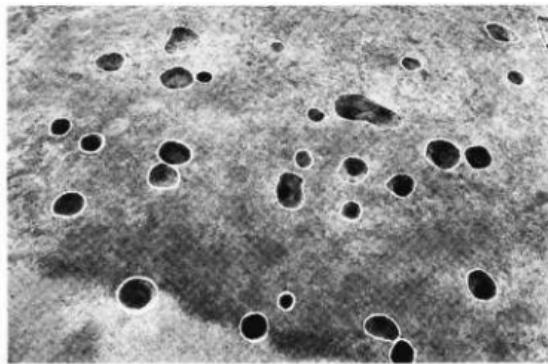
西区中央部遺構検出状況（南から）



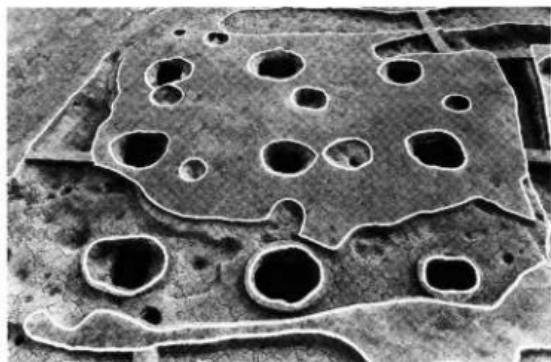
西区SB-3検出状況（北から）



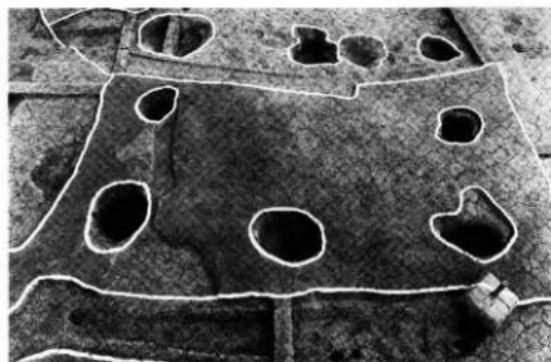
西区SB-4検出状況（南から）



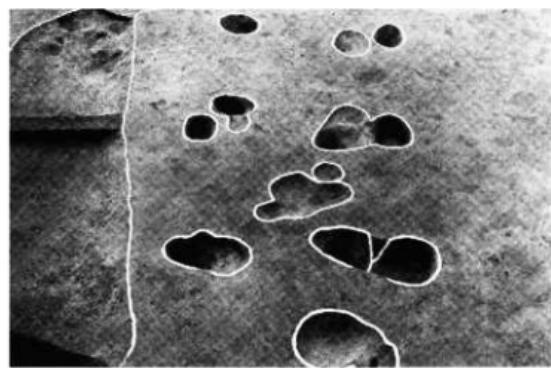
西区SB-5検出状況（東から）



西区SB-6検出状況（北から）



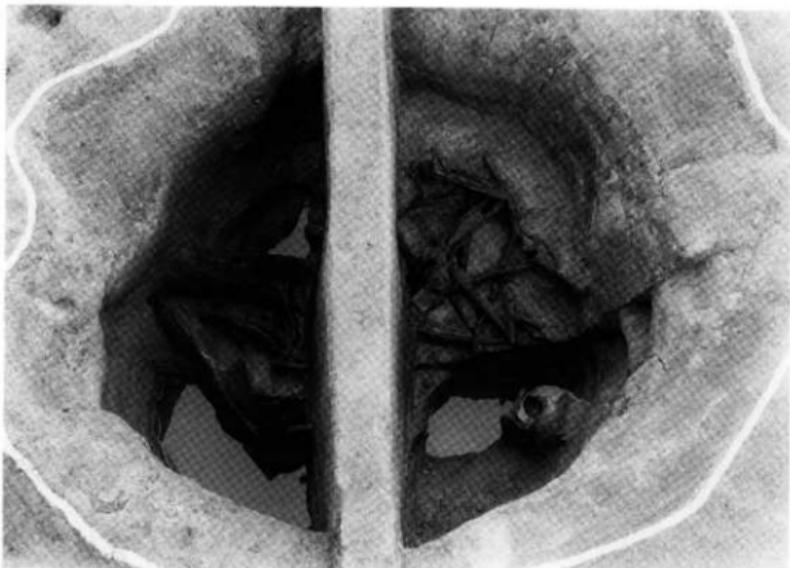
西区SB-7検出状況（北から）



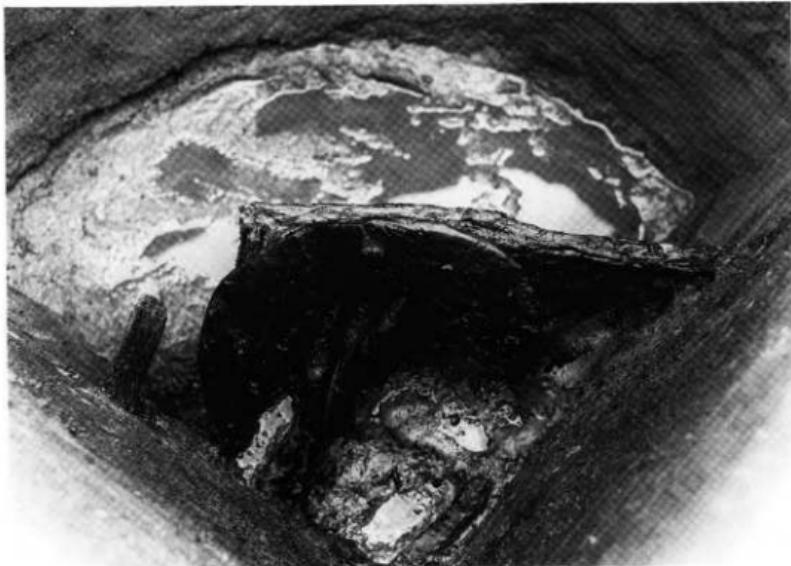
西区SB-8・9検出状況（東から）



西区SE-2検出状況（東から）



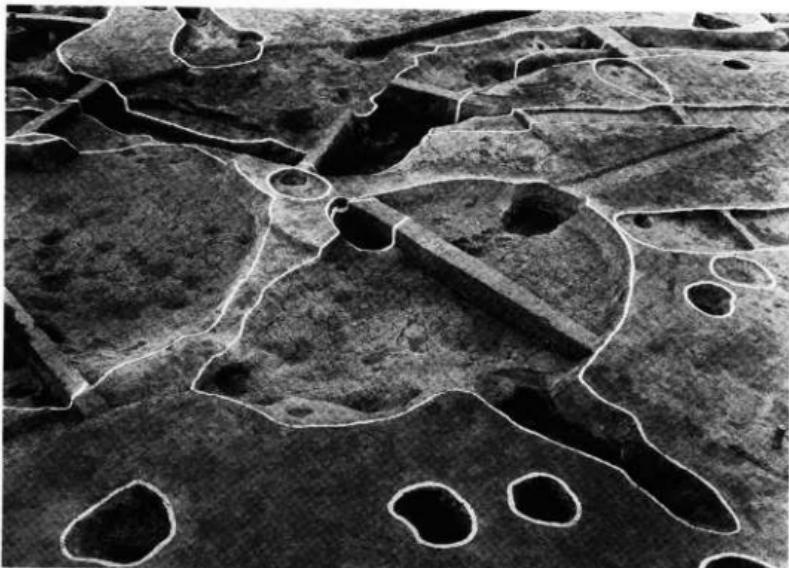
西区SE-4検出状況（東から）



西区S E - 4 稼出土状況（北から）



西区S K - 14 稼出土状況（東から）



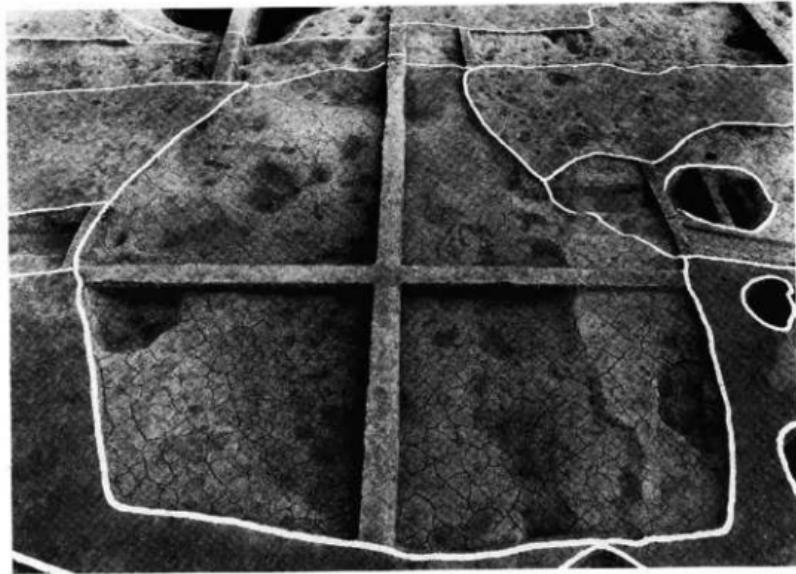
西区SK-15検出状況（東から）



西区SK-15遺物出土状況（南から）



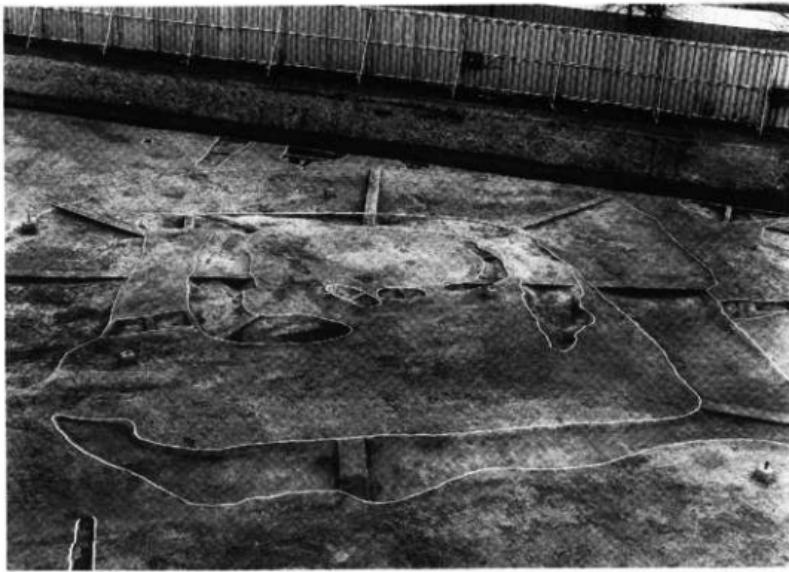
西区SK-18検出状況（南から）



西区SK-21検出状況（北から）



西区1号方形周溝墓および1号～3号墳検出状況（南から）



西区1号方形周溝墓および2号墳検出状況（西から）



西区1号填検出状況（北から）



西区2号填検出状況（西から）